

積の白い砂礫と、あたりの山の茂り合ふ木立とが
みどりの庭園を造つてゐる。

右手のヤロク澤の上あたりで、かつこうが頻りに
呼んでゐる。

左手の柱ノ澤からほととぎすが、キョツキョツと
むせび啼いて、新緑の溪を飛び過ぎる。

蘆倉の、木炭を運ぶ男女数人が、積の端に憩ふて
ゐた。彼等はドノコヤ峠を越えた鑛山の下方から、
遙々運んで來るのである。

蘆安渡し一貫目、やうやく零細の價にしかならな
い木炭を一日にこの難路の往復をして、一荷(十餘
貫)の賃錢を得るのであつた。

賃錢の貴さは、不慣れた山の案内者などから、粗
野な請求を受けられて、往々に清貧に疲れた山中住
民の露骨な人情を見せ付けられる事がある。彼等の
貪婪を責むる前に、先づ何等の利器をも持たぬ人間
の、埋もれた單純なその生活を思ひ識つてやること
は、山を眞に理解する上に於て、除外出來ない一事
である。

本谷はいよ／＼溯り詰めて、先端はカクシノ澤、
ヒカゲ澤となつて唐松峠の頂稜に盡き、道は右手に
峠の登りへかゝつてゐる。午後一時。ミツバツ、ジ
の紫、ミヤマスミレやエンレイサウが、道の側らに
花を見せてゐる。

途中に一塊の残雪があつた。峠の上に着く。一時
半。峠は甲斐駒山脈の主稜の一端に有つて、一五一
八mの低少乍ら、北はドノコヤ頭(一七〇〇m)八
層(一七四四・八)高谷から夜叉峠、杖立峠を経て
鳳凰山に續き、南は、ヒカゲ澤ノ頭(一七四〇m)
から東へ寄つて、西山(楯形山)の最高奥仙重(二
〇五一・七m)の大きな山體へ接續してゐる。

峠上に立つて野呂川の溪谷を覗く。雨池山を近く
前にして、左は薄曇りの空へ、乳色に滲ちむやうに
先づごつい白峰農鳥岳の残雪がいち早く眼に寫る。

その東面山腹の鳥形残雪は、まだ形を現さず、大
門澤の登路さへ、全くたゞ白皚々として、素晴らし
い大雪溪を引落してゐる。
大ゴモリ岳(二七六七m)、白河内岳(二八一二m)

いづれも頂稜は白々と残雪を冠つて高く屹ち、黒河
内岳(二七一七・六m)以南の黒木立の山嶺も、地
肌は又尠なからぬ雪に掩はれてゐるらしい。

農鳥岳の北へ間ノ岳、北岳の山嶺も白々と現れ、
南は高山(一八〇一m)のかけに東岳の雪さへ見えて
ゐる。

野呂川の溪流の音が異様に峠上まで響いて來た。

峠を下る。道はドノコヤ澤に沿ひ、下に蘆安銅山
の小屋が見えてゐる。樹下にはイワカミ、ツバメ
オモトなどが生え、次いで熊笹が多く現れて來た。

笹の中で籤鶯が、初夏の山路につきものの美音を頻
りに弄してゐる。峠上から三十分で、蘆安銅山へ着
いた。小規模ではあるが、今なほ採鑛されてゐる。

それより少しく下降すれば、道はドノコヤ澤を離
れて左に入り、野呂川の溪のすつと高所の山腹を横
にへづつてゆく。

カツラ、ブナ、シデ、カヘデなどの潤葉樹の大木
が亭々と繁つて、新緑の梢に、山の小鳥の一群れが
さえづり、黝灰色の樹肌を、五十雀が走り渉る。何

處かでコロ／＼と音をたてるのは、隼の所在を知ら
せるものである。で、不審に見廻す瞬間、一羽の隼
は、矢のやうに風を切つて樹の間を縫つた。

道はこの邊から少しく登りとなつて、三丈位の高
さの瀧のかゝる小流などを横切り、或る山脚の突端
へ現れると、野呂川の溪流と、前方に奈良田の里落
が見えるやうになつた。

焼畑の急斜な山腹を降り、野呂川の河原へ着く。
銅山より三十分である。

溪流は、南アルプスの融雪期がもたらす雪消えの
うす白く濁つた水を浪立たせてゐる。

對岸よりは農鳥岳の登路をなす廣河内が合流し、
上流は鮎差へ、最近まで人の通行を阻止した險惡な
峽流となつてゐた。

對岸の道へ通ずる丸太橋は、春季の増水で流失し
て無く、野呂川左岸の中腹の怪しげな道をへづり、
崩壊した危險な個所を過ぎ、午後二時二十分、奈良
田の里へ到達する。其處からは、早川溪谷の仙境西
山温泉まで、僅かに一里弱の道程である。

早

川

早川

白峰、甲斐駒、兩山脈の、向斜面の水脈を綜合する早川は、赤石山地の山懷に深く流域をもつた河川として、大井川溪谷に次ぐ溪流である。水源は白峰間ノ岳の西北面に發し、北岳の山麓を一巡りして方向を北より南に轉じ、花崗岩及び第三紀層と古生層地がなす斷層線に沿ふて下り、雨畑川を合せて、河津を直角に東へ迂曲し、飯富に於て富士川へ横谷となつて注流してゐる。大凡奈良田より上流を野呂川と稱し、下流を早川と呼んでゐる。

この溪谷の流域が、古くより相當の開拓進展を觀せてゐることは、右岸の古生層地より産出する數個の金坑と、名湯西山温泉などに因ると云ふ可きである。

西山温泉は、隣縣に幾多の温泉郷を控え、富士、八ツ、茅の三火山を併有してゐる甲州が、甲府近郊

の湯村や、笛吹川上流の川浦の如く、微温湯以外はあまり恵まれてゐない中に、水温はC四十度乃至五十度を示し、眞に温泉らしい唯一のものである。湯川が早川に注流する附近の三紀層と古生層の裂罅に湧出し、新舊二つの温泉宿があつて、舊湯は湯槽四箇所、四層樓建ての山間には不似合ひな程浴客の收容力をもつてゐる温泉である。

それは胃腸病、婦人病等に良いとされ、四、五月の頃が最も混雜してゐる。

西山登山口の根據地、此の湯泉宿を訪ねたのは、單獨登山として残雪の黒河内岳に向ふ爲めである。それは五月下旬の一日であつた。午前四時には、この深い溪底の湯場も、もうすっかり明るくなつてゐた。四時半に温泉宿を出て、奈良田に向ふ。今や新緑の色あでやかな早川の溪である。

對岸左手の山城澤ノ頭（一五八三・三m）の黒木立の中に、僅かに残雪を見せて、裾はヤマツ、ジの眞赤な花が咲き、道の頭上に山藤が、紫の花房を垂れてゐるものもある。

草の茂る荒地、焼畑の中などを過ぎる。その里道は細く、そして割合ひに險しかつた。

溪が左に外れると、黒河内と、それから少し離れて白河内が合流してゐる。

黒河内の溪奥には、白剝山（二二三七・二m）の黒頭が覗き、白河内の奥には、白河内岳（二八一二m）が、文字通りに残雪白く、雄渾な山頂を現してゐる。

早川溪の上流には、大ガレノ頭（二一八六・一m）が展望される。

一時間弱にして、奈良田の里落へ着く。

奈良田は、早川溪谷最奥の村家である。

戸數四十二戸、人口二百三十餘人、富士身延鐵道波高島驛から十餘里、中央線の龍王驛へも約十里に近い山間鄙僻の里落である。

一字を建て、奈良王尊を祀り、此處の外良寺や民家に寶物などが残つてゐる。そしてこの傳説は相當に強く主張せられてゐるが、確たる文献に見えないので、未だ決定的の評價はない。

奈良田が、明治の維新前まで、山間極僻の鄙郷として、山代郡奈良田村なる一郡一村をなし、今日迄特有の古い言語と生活風習を存してゐた事は事實である。里道に子守をしてゐた考婆は、山の旅人に向つてかうした事を語るのである。

奈良田の犬

昔、荒川さ、いつたれば、山犬の子がいとどうに。その子うとつてわせるからに、それで青鹿を追はせとうに、そうても良い犬になつたよつて、あるひにの、かりうどが、この犬うつれて、ニク狩りに行つたれば、それが九十九まゝる捕つとうどうに、ひとまる分は、親方を食ふつもりだつとう。

親方は、かんぢよ（便所）う行つてると、そ

原始耕作の形式として、今なほ焼畑（火田）を存し、物々交換の取引が多く、特種の産兒制限が行はれてゐるものか、女子は三十歳後は殆んど妊娠する事なく、又盜賊を知らない程の仙境である。

小學校は一人の教師が、義務教育の六學級をなす一の分教場を受持つてゐる。

傳説に依れば、人皇第四十六代の孝謙女帝（後の稱徳天皇）が退位し、御不例につき、天平寶字元年、西山温泉入湯療養の爲め暫らく此の地に御駐輦あり、約八ヶ年間に及び、朕が住めば即ち此の地も「平城である」と仰せられたので、地名も奈良田と稱せられるに到つたと云ふ。女帝が平城還幸に際し、村の名主に賜つたと云ふ御歌は、
難波かたかすまぬなみも霞けり

うつるもくもるおぼろ月夜に

と記されて、御眞筆と云はれてゐるそれは、あかね染の袱紗ふくさに包まれ、村の自家深澤順吉宅に秘藏されてゐる。

皇居の趾と信ぜられてゐる宮平に、現今は茅屋の

の犬が、川さ行つて水に浸り、ひじろ（爐端）へわせて、身振るひするだに、かりうどは、こりやどうも變なこつた、火い消して、おれをいまる分にしくさるだとかんけえたんで、そつとめしなべて、てめえのきものうおつかぶせ、てつぼう持つて岩の上へ上り、その犬う見てえたとこが、あちやあどの（おまへさま）かりうどと思つてそのなべに、かぶり付いたに、此の野郎めと、一ばつぶつばなしとうが、山犬はがいに、おつかないもんだと思つたそうどうに。

奈良田に七不思議といふのがある。それは、一、御符水。二、鹽池。三、檳榔子染池。四、片葉のよし。五、二羽鳥。六、洗濯池。七、奈良田七段、以上である。

それらは西山温泉に湯治の滞在客が、恰好の散策地となつてゐる。
奈良田の村家から、早川の岸へ細い道を下ると吊橋が在つた。右岸へ渡れば鹽島平の耕地である。麥畑の中道を辿り、片葉のよしや、鹽池を見物する。

二羽鳥は何處かと眺め廻したが、見當らず、空で雲雀が鳴いてゐた。古來鳥はこの里で、二羽より外には見なかつたと云ふ。そうした山間秘境でもひばりの鳴く現今は、どうやら二羽ばかりでもないと言ふ話だつた。

但し、傳説に残るこの鳥は、所謂普通の鳥ではなく、みやまがらすであるらしい點に注意を要する。

鹽島平から、白河内の溪流を渡り、白河内と黒河内の差挟む山稜、笹山尾根に取り付いて、記された小道の急な登りを始める。

急な杉の植林地を経て、青々とした潤葉樹の中を攀ぢ登れば、六時十分、山ノ神平といふ所へ出る。

五葉松、サワラ、ブナ、ツガの大本が生えて、樹下の小祠には山神の像が祀られ在つた。

朝の光線まで、みどりに映える山の本立の中に、白樺の樹皮がいやに白けて眼に寫る。それは露西亞で呼ぶ、森の番人の風格が良く當て筈つてゐる。

眞赤に咲くヤマツ、ジの花をつまんで食べたたりする。

左手の急斜面に焼畑があつて、このあたりから眺望はやうやく展げ、北に森山、南に山城澤ノ頭（一

五八三・三 m）、東に蕨平（一八一七・四 m）、北城（一

六五二・五 m）、ドノコヤ峠邊の山嶺が圍繞して眼に入る。道には小笹が現れて來た。ヤマナシの花が白く咲いてゐる。鶯が頻りに唄ふ。慈悲心鳥の聲も聞

える。森山よりもう少しく高所まで登つたらしい。路傍にアセビが生えてゐる。六時四十分。

白河内の溪奥に、白河内岳（二八一二 m）の残雪に白く塗られた頂稜が濃藍の空を背景にして仰がれる。心無い慣れた山の里人でも、此處から觀る白河

内岳の晩春の山容には、讚美の聲を漏らしてゐる。山道は狭い山稜の小平地にかゝる。イワカミの白い花。ミツバツ、ジの紫の花。鶯の唄が其處此處に聞える。

右手にザル山（一七九二 m）の山稜を眺め、脚下に白河内の深い溪間に走る白い流れを覗く。

七時十分、落葉松の林の邊で、左手に黒河内北又澤へ入つて、白剝山（二二三七・二 m）方面へ通ず

る道が岐れてゐる。右に執つてそのまゝなほ山稜を登つて行けば、ミズナラやヤマハンノキの林の中に椎茸を栽培してゐる所があつた。このあたりまで來ると、潤葉樹の芽はまだ若く、枯葉の中にやうやく蕨やゼンマイが生えてゐる。

ミズナラが散在し、小さな熊笹の生えた急な斜面となる。カラマツやシラカンバの粗林もある。角笛を吹くやうな鳥の聲が聞えてくる。

餘りな登りの苦しさに、暫らく山の中腹の斜面に小笹を褥として横臥し、仰いで初夏の空を眺めた。

空には薄い一沫の白い雲が流れてゐる。午前中の日光は、程よい温氣をもたらして、萌え出づる草の香を放散する。あたりに山鶯はにくい程、巧妙なゾーカルを聞かせて呉れる。

此處では、何の遠慮氣兼ねもない。山の鳥の小唄に合せて自分も又、エーホ、ウを聲高く唱ふのである。

カラマツとカンバの林を登り盡すと、又小平地となる。八時五分。右に白河内岳から大ゴモリ岳（二

七六七 m）にかけての山嶺の残雪は益々美しく、左は白剝山、八萬平（二一八〇 m）、別當城山の黒木立の峰を望む。

サルオガセを附けたシラベ、トウヒ、コマツガの針葉樹が多く生えてゐるやうになつてくる。少しく寒い風が吹く。

此處の細くなつた山稜の端しに、一坪位の簡単な假小屋が在つた。笹山（一九二〇 m）の内のタルキトリ場と云ふ。水は無い。溪流の音が聞える。サウシカンバの梢が少しく芽ぐむ。八時四十分あたりは清淨な天地そのもののやうである。又小平となり、伐採跡があつて益々眺望は良く、右手の間近かにガレが見えてゐた。

富士山が高く、蕨平（一八一七・四 m）の上に懸り、白峰南半の笹ヶ岳の双頭、残雪と針葉樹で胡麻

鹽色の生木割等が、八萬平の上に一寸現れてゐる。九時二十分、小屋跡に着く。その北に丸太を割り

抜いた水槽があつて、水が溜つてゐた。筒鳥の聲がする。氣温 C 二十度、残雪があつた。

高距は二一〇〇m位らしい。四十分休む。十時こゝを後に更らに登りを続ける。右手ザル山（一七九二m）の背へ、地藏、観音、薬師、辻山などを望見してシラビソ、コメツガの中を登る。二十分、新しい簡単な山小屋の三軒建の所へ出た。シヤクシの小屋と云ふ疊の椽板の製作所だ。今迄の明かな山道は消えて邊りはまだ白く一面に残雪が敷かれてゐる。山人等は六月にもならねば山住りは始めないらしい。

シラベ、コメツガの針葉樹林中に、隈なく残る雪を踏んで、小屋の背後を登つてゆくと十時半、山稜の白河内に面したガレの端へ出た。それから割合ひに歩き良い雪の山稜を登つて行けば、小平が在り、或は急斜があり、シヤクナギが現はれ、シラビソも短少となつてきて、かくして、木立はなくなり、偃松が見えてくると、間もなく、黒河内岳の山頂（二七・六m）へ着く。十二時十分、東斜面は雪に埋められてゐたが、頂上は消え失せて露出した石原となつてゐた。

いち早く眼をやつた東俣の、溪の向ひに聯なる逸

物、鹽見岳、北俣岳（二八六〇m）、蝙蝠岳、それから南に轉じて、荒川岳、東岳、千枚澤ノ頭（二八七九・八m）上河内岳等の残雪なほ白皚々たる群嶺を展望する。徳右衛門岳（二五九八・五m）の上に、東岳が三稜形に白々しく屹つ。

北は、直ぐ近く黒河内岳の別峰が笈形に盛られ、白峰の本峰は、白河内岳の大きな山腹にかくされてゐた。

木曾駒の連山は雲にさえぎられ、東方甲斐駒の群嶺も雲の帷に消されてゐる。気温C十四度。山頂の石原はハイマツ、タケカンバ、シラビソ、シヤクナギの矮樹が圍み、風も無く穏やかに、岳雲雀が一羽小石の上に鳴いてゐる。

岳鴉が一羽飛び去つた。白河内岳の大きなドームの方へ。其處に初夏の雪の山々が息詰まる程の景觀を投げ出してゐる。一時間を山頂の低徊に費した。

午後一時十分、黒河内の峰頭に名残りを止めて、下山せんとすれば、東面に高く氣高い富士の姿が浮んでゐた。

南方に笹、青蘆、青枯、大崩山、デンツク峠の頂稜が続く。山頂は残雪が白く、下界は一帯に緑濃き新緑の溪である。

踏む雪は硬く、緊つてゐて落ち込まないから、大變歩き易く、下りは速い。三十五分で、もうシヤクシの小屋の邊へ出た。

小屋と小屋の間に板で作られた水槽へ、屋根の雨樋の水が溜つてゐる。間もなく雪は消えてゐるので現れた小道を辿る。但し下降には、雪を踏む方が遙かに歩きよい。

笹山の笹の斜面を降り、再び鶯の唄に耳を傾け乍らカラマツの林、ミズナラの林を過ぎ、黒河内北又澤の道と合する山稜の小平地へ着く。三時十五分。

白河内岳を再參、惚れ惚れとかへり見つゝ潤葉の若葉に包む急な山路を降りに降つて、山裾に着き、白河内の流れを渡り、早川の吊橋を経て奈良田に着いたのは、四時少し前であつた。

鹽島の山裾で、野鼠を咬へた一匹の黄貂を追ひ出したり、畑の畦で、扁平にとぐるを卷いた小形の蝮

を、靴の先で脅やかしたのは、悲喜交々の餘興であつた。

それから奈良田を経て西山温泉まで、早川左岸の往路を歸る。白河内の葉蔭れのせりに、白河内岳の描く奇怪な残雪の隈が、不思議に見る者の眼をひきつけてゐる。道草しながら歩を進めて、夕景、温泉宿に辿り着く。

登高の激烈な勤勞から解放されて、綺麗な山の湯に浸たる時のなごやかな氣分は、普通の湯治客には解らぬことであらう。狭い部室も、粗末な食物も、そんな事は問題ではない。

只だ與へられた時間と、成遂げ得た登高と、肉身と精神の健康さを讃め頌へればそれでよいのだ。

その夜は靜かに語る事をやめ、滞在客の有志が催す懇親會にわけも無く賛成して出席すれば、湯宿の女中である湯島の娘達が、何の遠慮もなく、甲州の俚謡、縁故節、踊などを持出して、夜のふけて行くのさへ忘れ勝ちであつた。

縁 故 節

白須白菊臺ヶ原の小菊
三吹とつばづれのばら牡丹
北に金峰西には白峰
中に立つのが地藏佛
河鹿ほろ／＼釜無河原
鐘が鳴ります七里岩
薫りや鈴蘭色ならつゝじ
甲州初夏甘利山。

左に、曾て西山温泉に於て育くまれた可憐なロー
マンズの一つを記してみよう。

温 泉 情 話

西山温泉は、毎年山の峠路の雪が消える四月
下旬から五月一杯へかけてと、秋十月の候の各
農閑期には浴客で最も賑ふのが常であつた。農
村の老若男女が、米や味噌持参で、自炊しなが
ら入浴に、足慣峠の險を超えて續々とやつて來

消えて、雪解の清く冷たい水が、早川の溪を瀬
の音勇ましく流れてゐた。

Kが西山温泉へ辿り着いたのは、もう夕方であ
る。

彼れは初夏の南の山に憧れて、その勤めてゐ
る商會より強いて休暇を貰ひ、韭崎口から鳳凰
山を超え、残雪なほ白皚々たる白峰三山を縦走
して廣河内を奈良田に降り、銅ノ小屋峠を経て
歸村する案内者と其處で別れ、一人ぼつねんと
温泉宿にやつて來たのである。

重いリュックサックを肩に、ピッケルを小脇
に抱へた彼れを三階の一部屋に導いたのは新倉
の娘お琴であつた。が、彼れは其の時、彼女に
は注意してゐなかつた。

部屋は八疊の間で、湯川の溪流に臨んでゐる。
山城澤ノ頭（一五八三m）に纏れ絡まる雲霧の
動きは、天候の急變を豫想する事が出来る。K
はそれを見ると、明日の歸京が氣遣はれてなら
なかつた。

る。かうした時には、湯宿では特に其處から一
里ほど離れた下流の湯島の村家から娘達が招き
寄せられて、女中がはりに手傳ひをするのが例
である。

彼女達は、いづれも山の乙女としての特徴を
多分に持つた、何處までも純朴であどけなく、
極めて清楚で、又可成りに美しい人達も少くは
ない。

中でも、其の時新倉から手傳ひに來てゐた娘
のお琴は、殊に容貌も整つてゐて、色白く、肌
理濃やかに何處とはなく限りない魅力を持つて
ゐた。

昔、奈良田の里には、孝謙天皇が暫く御駐輦
あらせられたが爲めに、今でも住民には殿上人
の血が流れてゐるといふ。お琴を見る者は、成
程そうした系統の一人であるかも知れないなど
と噂をし合つた。

山に眞紅な山躑躅の花が咲いて、崖には紫の
藤の房が長く垂れ、そして白峰の雪は日一日と

夕食の膳には、眼の下一尺もある見事な山魚
の鹽焼が乗せられ、そしてお琴が給仕として慎
ましく彼れの前に坐つた。

Kは此の時、初めて彼女を熟視した。そして
若い彼れは、忽ち彼女の純な美しさに惹きつけ
られてしまつた。

燈火に晴々しくそ向けた顔とふくよかな、豊
頬の膚色は雪の如く白く而も暖味を含み、透明
ではないかと思ふ程、艶やかな光澤がある。若
し一人山中の孤屋などで不圖彼女に出遇ひでも
したなら、それは正しく美しい妖怪變化の類と
信ずるかも知れぬなどまで、彼れには窺かに
心の内に考へられた。

二言三言言葉を交はすに、その應待も甚だ要
領を得てゐて、Kはつひに思はぬ嬉しさと、山
岳人の柄にも似合はない氣羞しさに襲はれず
はゐられなかつた。

これはきつと、數日間の山の旅で、人間その
ものに渴えてゐた心がさせる仕わではなからう

か、あの位の女なら、都にはいくらも居る筈なのに、但しあゝした自然のさせる麗質と、その質朴な味こそはないが、などと頻りに考へられたが、併し一度彼れの胸奥に萌した煩惱の芽生えは、逐ふ可くもなく、益々深められてゆくのをどう仕様もなかつた。

ところが、Kは其の夜中になつて、意外な腹痛を覺えて起き上つた。

大門澤の雪溪を降る時、食べた雪に當てられたのに相違ないと云ふ事は、直ぐに察せられたが、その劇痛の苦しさに耐えられず、湯宿の家人を呼び立てた。

と、慌しく駆けつけて来たのは彼のお琴である。

Kはそれから間も無く激しい下痢を始めたが汚物をも厭はなかつた彼女の懇切な介抱に依つて、やうやく痛みも静まり、そして何時とはなく熟睡する事が出来るようになった。

翌日は山の小雨が烟るやうに降つてゐた。

に定めてしまつた。

と、どうしたわけか、お琴は急にこの湯宿の手傳ひを辭して、新倉へ連れ戻される事となつた。

併し、彼女はその事で、決して落膽はしなかつた。

彼女の新倉の村家から温泉宿までは約三里、早川の溪流に接した新倉峠の險惡な小道が通じてゐる。

お琴は、其の日の家事を終れば、夕景ふらりと家を出て、湯宿まで忍んでKに遇ひに来て、その夜の内に又人知れず自宅へ歸つて行く。單純で眞實な山の乙女の戀は、燃ゆる山躑躅の色よりも濃やかに、藤の房よりも優れてしほらしかつた。

この事は、細心にして用心深いKの計らひに依つて、彼等以外には可成り嚴秘を保たれてゐたらしかつたが……。

湯島の里に駒吉と呼ぶ青年があつた。かねが

Kは昨夜の數度の下痢ですつかり衰弱し、入浴すらも困難を覺える程だつたので、この日は終日臥床して居て養生に暮らした。お琴は仕事の隙さへあれば、何故かいつも彼れの部屋へ来て、やさしく世話をしてくれる。

彼れの雪焼けの色の消える如く、二、三日にしてKの元氣は回復したが、それと共に、彼れの心の中には、彼女に對する一種異様な感情が蔓延して、自制心ではどうしようもない、搔きむしられるやうな焦燥の惱みに苦しめられてきた。

斯くして、數日間の内に、いつとはなしに彼れと彼女とが並々ならぬ間柄に落ち入つたのは、かうした機會に導いた自然的の、必然がさせる仕業であるとすら想へなかつた。

Kは何時までも此の懐しい山の湯宿を離れたくはなかつた。

そしてKは、如何なる犠牲を拂つてもと思ひ込むやうになり、遂に暫らく此處に滞在する事

ねお琴に對して、頻りに思慕の情を寄せて居たが、不圖湯宿の客と彼女の戀愛沙汰を垣間見るに及び、失望落膽に加へて、恐ろしく嫉妬の炎を燃え立たせ、そして直ちに彼女をわざと新倉へ歸らせるやうに、彼等の間に妨害を加へたのであつた。

處がなほ尠しもその効果は無く、更に、二人が會遇してゐる事を發見すると、瞋恚に己れを忘れて躍氣となり、つひに彼れは、彼等の通ふであらうと推察した新倉峠（その頃は右岸の舊道すらなかつた）の道を物色して、早川の斷崖に懸けられた丸太橋に窃かに下から鋸を入れ、素知らぬ顔で過ごしてゐた。

それとも知らぬ可憐なお琴は、或日の夕景、Kと遇ふ可く湯宿へ急いで彼の斷崖の橋にかかつた。すると、俄然その橋木は折れて、アツと云ふ間に眞さか様、深い險しい早川の溪流に墜落して、あえなくひ戀に身を焼く可憐な乙女は非業の最後を遂げてしまつた。

それと知つた山村の騒ぎは大きかつた。駒吉はいち早くも村を出發し、つひに行衛は知れなくなつた。

併し單純な村人の多くは、彼女の恚うした惨しい最後に、哀れな如上の因縁のあつた事には不思議にもとんと氣が付かなかつた。そして常の如く、たゞ只管に山道そのものゝ罪として、その不備と不便とを歎きかこつた。そして村人は此處を、お琴のガレと稱してゐる。

その時のKの悲歎は、どれ程であつたであらう。想像外の事實であつた。

彼れは間もなく想ひ出の山の湯宿を後に、精神は身に添はずして、恰も蛻の如く大きなリュツクサツクへ堪へ切れぬ程の重い彼女と彼れの涙を背負ふてあてどもなく、とぼとぼと一人足慣峠を越えて行つた。

X X

後記 今、新倉峠より湯島へ、水電會社の拓いた早川左岸の新道を辿る時、美しい時雨

へられてゐる、熾烈な感激と涙の賜物であると云ふ。そして先年はからずも、稀有の天變に遭遇し、海岸の別墅に於てあえなき人の數となつてしまつた。

但し彼れは、此の哀しい物語だけは嚴かに秘めてゐて、生前決して人には語らなかつたのである。

翌日は午前十時、西山温泉を後に、早川の溪沿ひの道を下つた。道は溪流の左岸をすぎる。約二十分位で足慣峠への分岐路となり、右をとつて行けば右岸に上湯島の小里落を眺めて、別當城山の山腹を仰ぐ。

左岸に、足慣峠より流れ出るセンシロ澤が合流してゐた。それは下方浸蝕が著しく、小溪流に普通の深いV字谷をなし、但し早川溪谷の水蝕には及ばず此處に著しい懸谷 Hanging valley を見せてゐる。

下湯島は左岸にあり、村家の入口に山王大権現の杜が見えて、週圍三丈五尺と云ふ杉の巨木が立つてゐる。村家の南には東京電燈の早川第三發電所の水

瀑の懸る附近で、對岸を眺むれば、新倉峠の舊道より深い溪流の底へ、大きくガレた急な崩崖を發見するであらう。それは即ち彼女が遭難の跡、村人の云ふお琴のガレである。

早川の溪流は常に限りない悲戀の恨みを込めて萬籟の如く岸邊の崑頭に激してゐる。駒吉は其の後どうなつたか。彼れは北海道の炭坑に暫らく働らいてゐたが、其の後奇禍に遇つて死亡したとかの噂である。粗野な失戀に泣いた彼れも、又餘り憎めない原始的な單純な山の男であつた。

Kはそれからどうしたか。悶々の情遣る方なく、遂に意を決して歐洲に渡り、スイツザアランドを取巻く大アルペンの、峻烈な氷雪と巔崑に、疲れの堪へ切れぬ無量の憂苦と、渾身の熱情とを捧げたが、後、歸朝して其の山旅の名著を物された。彼れの文章には、到る所何人にもとうてい眞似の出來得ないうま味が包含されてゐるが、これはその胸奥に湛

量取入口があつた。

溪流を右手に瞰下して、倉尾(一八五三・九m)の山腹をへづる平な道が、水電事業の爲めに拓かれてゐる。そして、シン澤、二ノ釜澤、三文澤、クスギ澤などの小溪を横切つて行く。クスギ澤の路傍には美しい時雨瀑といふのが落ちてゐた。

對岸は新倉峠の舊道が通ずる横尾戸山(一五六三・六m)で、潤葉樹の中にモミ、ツガ、アカマツなどが雜じり、道端にはヤマブキ、ヤマツ、ジ、ミツバツ、ジなどの花が美しく、満目すべてこれ新緑の溪である。山の小鳥達が鳴き渡る。めじろ、やまがらこりなど。雉が何處かで一聲叫ぶ。

此のあたり、早川の溪は峡谷となつて、濃い緑葉の底を低く流れてゐる。道は、砂岩凝灰岩等を貫いたトンネルを四つもくぐる。

對岸に内河内が合流してゐる邊で、山の鼻を左に廻れば、早川第三發電所の水壓鐵管が、山の上から道を横切つて下つてゐた。水量二百二十ヶ、落差五百尺、發電能力六千六百キロワット。對岸には田代

川第二發電所が見えて、その水壓鐵管は、鈴ヶ尾(一六〇m)から早川溪に敷設されてゐた。
午後一時、新倉に着く。早川入りの鄙僻の孤村新倉が、現今は恰も山間の小街區のやうな觀を呈してゐる事は、固より地の利を得た水電事業の關係であるが、貧寒な山村としての既往の有様を知る者にとつては、それは正に晴天の霹靂のやうな想ひがされる。

新倉の水電

新倉に於ける發電計畫は、早川電力會社の企圖に始まり、後、東京電力と合併改稱し、目下は東京電燈會社に併合せられてゐる。

大井川の上流田代川の二軒小屋と、早川の新倉とは、距離は極めて近く、而も高距約三千尺の差を有し、發電には最好の位置を占めてゐたので、田代川の水を取入れて始めは此處に一發電所を設ける考へであつた。所が、斯く高落差に於ては、一個の水量は二百キロワットに價するので、水壓管に對する過重な水壓を懸念し、

尺流れる量をいふ。

耐壓隧道は、二軒小屋より保利澤まで、白峰、山脈デレック峠の一三〇〇間を貫通し、更に鉢ヶ尾山上までを通算すれば、二九〇〇間、コンクリート巻き、岩質軟弱な部分は、鐵筋コンクリートを用ひ、かくして合計三千尺といふ世界屈指の落差を得てゐる。

高落差の發電所に於て最も注意を要する事は、水壓鐵管と水車の安全装置である。

突然負荷の切れる時は、水車及び發電機に空轉を起して破損したり、又一時に水を遮斷すれば Water hammer を起して鐵管は破裂する虞れがある。この安全装置として此處では Detector を採用してゐる。それは、負荷の切れると共に一種の瓣でノズルより出るジェットを、水車のバツケット外にデフレクトせしめ、一度デフレクトしたジェットをオイルプレスに依つてニードルを徐々にノズルマウスに進めて漸次閉鎖する式である。其の他、貯水堰堤の設計、第二發電所

尙又内河内の水量も取入れる爲め、廣河原と新倉の二ヶ所に分けて建設し、第二の放水路は直ちに一の水槽へ導き、第一のそれは更に、早川第一(樽坪)の取入口へ導く事とした。

第一發電所(新倉)

流域面積、九・二一平方里(田代川七・〇〇内河内二・二一)

使用水量、平均一三六個毎秒。最大二二七個毎秒(負荷率六二・六%)

落差、一一八〇尺 發電出力、一七〇〇〇キロワット。

第二發電所(内河内、廣河原)

流域面積、七・四一平方里(田代川七・〇〇内河内〇・四一)

使用水量、平均一一一個毎秒、最大一九二個毎秒(負荷率五八%)

落差、一七〇四尺 發電能力、二〇〇〇〇キロワット。

(註、水量一個は、一尺立方の水が一秒間に一

サージタンクの計算、並びに水壓鐵管の厚さ、及びアンカアプロックの算定等に就いては、各専門家が一方ならぬ苦慮考案を凝らしてゐるのである。

發電所、變電所、事務所、會社住宅、俱樂部などの建ち並ぶ新倉は、正に現代文化の都市の片影をなす水電村である。

新倉から、富士川の沿岸飯富に近い早川大釣橋までは、五里の間會社が建設の當時發電機具材料運搬の爲め、幅九尺の通路を開鑿し、之に軌幅二呎六吋十八封度のレールを布設して、現今は人も荷も便乗する、馬の索くトロリイを通してゐる。

新倉を後にして、午後發のトロリイに身を托せば早川溪谷の沿道約三時間で、早川大釣橋へ着く事が出来る。茂倉附近の東岸をなす三紀層の内には、銅山。柱河内、西ノ宮、保附近の西岸古生層中には、幾多の金坑が發掘されてゐる。畑ガレ、甲子、黒ガレ、西ノ宮、大金山等の金山がそれである。雨畑川

流域にも、奥澤、長畑の金鑛があつた。

早川は、異なる二つの地層の裂罅を、傾斜の方向に流下してゐるが、草鹽の附近に到つて傾斜に直交し、雨畑川を合せて富士川に注いでゐる。それは南アルプスの溪谷、富士、大井、天龍の支流に多く見られる現象である。早川は、急流に過ぎるからといふので、舟楫を通ぜず、富士川に合流する地點に於ても、溪流は本流をかつて對岸を激突浸蝕せしめ、爲めに、その岩壁は屏風岩をなして、古來富士川舟航路中の最難險をうたはれてゐた。

富士身延鐵道が敷設され、沿岸の道路を乗合自動車に通ふ今日は、富士川の舟航は殆んど絶滅の運に瀕してゐるが、白峰の春の残雪を溶かした、やゝ白濁の早川の溪水は今も相變らず、幾多の可憐な物語を残す屏風岩の岩壁に打當つて、不斷の水沫を上げてゐるのである。

富士川音頭

舟は帆かけて川瀬をのぼる

可愛い妻子は出て招く

黒澤下れば岩淵泊り

明けりや身延へ引き小舟

浪は舟べりドンドンと叩く

濡れて棹差す屏風岩

波高島から下部へ一里

泊りや湯の宿雨になる

小石河原の焼砂踏んで

鳥の唄さへホーホケキヨ

法の庭かや身延の山は

南部内船遇ひにくる

* * * * *

三峰川

三峰川

一市野瀬

伊那町は一寒村より明治の中頃に開けた都邑として上伊那郡の中心地をなし、漸時殷賑を加へて行くらしい。

町の中程の小澤川に懸かる伊那橋の上から、東はるかに、仙丈岳と、鋸や甲斐駒が、初秋の空に聳立してゐるのが望まれる。

高遠町行き乗合自動車は船入驛の前から通つてゐる。

所謂権兵衛街道の此の坦路は、高遠まで二里半、三峰川の河流が構造した大きな河段丘 Terrace の約三段階をなす中段を走つてゐた。このテレースに現はれてゐる河蝕の活動は、上流の山地から搬ばれて

くる砂礫の消長を物語り、上流の地盤の隆起作用に伴ふ大なる河蝕の復活と、新しいテレースの構成運動を示してゐる。

高遠町へは分で着いた。三峰川入三十の都邑ではあるが、寂れた小さな町で、川岸の小高みの景勝な臺地を占めてゐるものゝ、有名だつた古昔の面影とは大分相違してゐるらしい。高遠城趾は、藤澤川を隔てた東高遠の高臺にあつて、今は公園となり、月藏山の山下僅か廢墟殘壘を止めてゐる。元暦元年笠原平吾頼直始めて築城し、次いで武田氏の南信經營の根據地となり、天正十年三月、信玄の子、仁科五郎信盛が、決死の士三千を卒ゐて織田六萬餘の敵に當り、武田家最後の花を咲かせたのはこゝであつた。元祿四年内藤清政三萬三千石に封ぜられて明治維新に至る。その盛衰興亡は、そゞろに人の世の極

まりなき推移變遷を識らしめ、また城下町として時代の反映はこゝに切實に現はされてゐるやうに思はれる。

高遠から北へ七里餘、杖突峠を上諏訪へ越える道は、三里の御堂垣を経て、そして南へは三峰川沿ひに同じく三里半の市野瀬まで、共に乗合自動車がつてゐた。

市野瀬行に乗る。街路を過ぎて藤澤川の橋を渡り東高遠の城趾邊を登つて、三峰川の斷崖に臨み、片麻岩を伐り開けた道をおそろしく曲折して行く。前方に戸倉山(伊那富士)を望み乍ら、山實川を渡り、非持、溝口の里落から黒川川合流點で三峰川橋を渡る。此處から黒川川の溪の奥に、鋸岳の稜線が、不動山、大ギヤツブ、最高點、編笠岳と明瞭に晴々しく手に取るやうに聳立してゐる。

川沿ひを行くに、三峰川の水は河原の小石に音立て、流れてゐる。水量はさまで多からず、上流溯行に何等の懸念はないらしい。おゝ、溪の上流に鹽見の突峰が見えてゐる。此のあたり溪澗に稻田が拓か

れて、もう水稻の出穂は揃つてゐた。栗澤川合流點の山の端に市野瀬の村家はまとまつてゐる。

自動車捨て、旅舎橋本屋へ泊る。中央線辰野から半日、都合よくゆけば三時間内で達せられるであらう。

板葺屋根の人家が八十戸程街路に集り、小學校役場郵便局が在り、伊那里村の中心である。仙丈岳、鹽見岳の登山をなし、案内者に宮下銀彌平、林武雄馬場千代治外數名の人達がゐる。旅舎に橋本屋(宮下藤夫)綠屋、半里奥の松島に竹屋といふのが有る。

仙丈岳の登路は、里河内の尾勝谷溯行路と共に、最も捷徑をなして、登り約九時間、降り四、五時間の行程となつてゐる。即ち市野瀬から柏木の里を登つて(又は松島或は中尾から)、高見岩(一五六七m)を過ぎ、ハコ岩の山稜へ出てこれを東南に辿り、ヤケガレ、穴澤の頭(一九八三m)、前地藏(二二三七m)奥地藏、丸山谷小北澤の頭(二四六〇m)から西馬ノ背を経て、仙丈岳の頂上に到る経路で、正しく道は踏まれてゐる。

鹽見岳へは、三峰川から支流南荒川を溯行して往復どうしても途中二泊の野營を強いられる。

戸倉山(伊那富士)の登山も、此處からは山頂まで約二時間半の行程で、其處に聖權現の石碑を祀りたまさか登山者の來訪を見る事がある。冬又は早春の候、この片麻岩の山嶺から南アルプスの雪景を展望する事は、必ず期待されるものがなくてはならぬ筈である。

二 荒川渡まで

八月下旬に入つたばかりの朝で、気温C一七度、少々薄寒い。空には雲があつて淡い紅色に光つてゐた。宮下銀彌を案内として午前七時二十分に市野瀬を出立する。

三泊四日の豫定。準備は至極簡單なものだつた。携帶テント、毛布なし、スエータ二着、ゴザ二枚、飯盒二個、白米四升(一升弱残る)味噌二百匁、鹽、棒麩一ヶ、紛經半袋、佃煮百匁、乾鱈一枚、氷砂糖

酒、釣針、外小物一揃、荷は全部で五、六貫を出ない。溪谷の徒涉に登山靴は不便である。草鞋が最もよいが、數足の運搬は甚だ荷厄介であり、且つ今日では可成りの山間へ趣いても草鞋など賣る店はなくなつてしまつた。萬邊なく普及されてゐるゴム底足袋は、石の上を渡る時少しく滑る感じがないうが、中へ厚い足袋を重ねて履いてゐれば足を痛めるやうな事もなく一足で間に合つて、足は軽らく、先づ結構であると云へよう。

村家の北の端れから、縣道鹿鹽道は、赤石裂線(斷層)の栗澤川に沿ふて右に岐れ、三峰川(入ノ谷)入りの村道は左へ、結晶片岩の硬い山の峭を開鑿して右岸を奥へ通じてゐた。二十分で松島の村家、橋を渡つて右岸に移る。更に山の鼻を廻つて十五分、岩入の里を過ぎる。

河原にはフジアザミの群落が生え、ませまれいやせぐるせきれいが飛んでゐる。道は此處から登りとなり、後方には戸倉山、左方は大雑段(一四八二m)浪人小屋(一七七二m)から、行手に城山(一七二

二m)と二兒山の黒頭を眺める。かけすの一群れが横切る。きつゝきの聲が聞える。山路特有の一種底冷たい涼風があたりを這ひ廻る。

路傍にはヤマハギ、オミナヘシ、オトコヘシ、ヤマトナデシコ、イブキボウフラなどの草花が咲き、きあけは、きべりたては、もんきてふ、みやましるてふなどが飛んでゐる。

鹽平や割芝への道と岐れて右手を執る。姥墓と稱する石のコツがある。乾性のイワベンケイが澤山に生えて黄色の攢花を着けてゐる。人夫はそれを百日陽照りだと云ふ。ミヤマナデシコの濃藍色と紫色の可憐な簇生した小花が其處此處に見られた。

廣大な平頂峰田城ケ原(一八五〇m)から出る小流れに、小さな水車小屋が建つてゐる。桃ノ木の里である。家數十戸、戸草が五戸、いづれもいぶせき板葺の家屋、その板は栗材を用ひ、三枚重ねとすれば、雨の漏る憂ひは更になく、そして約三十年位は保つと云ふ。

午前九時、戸草から先きは奥浦へ渡らず、鹽平の

より、湯山温泉よりも、更にそれは無名で、そして野趣横溢してゐる所が面白かつた。秋蠶の合ひ間を米味噌持参の湯治客が近在から詰めてゐる。年頃の娘達が六、七人に男達が十數人、無遠慮に考へれば強いて窮屈な、併し乍ら野性的な所に多大の興味を覺えるものらしい。

晝食に約一時間を過ごした。

小瀬戸の湯場から又右岸に移り、小道を辿る。左方から東風巻谷が注ぐ。此の谷を熊澤越の頭(一九九五m)へ登つて大熊澤へ出る徑は行程約三時間、岩魚釣りの通ふ徑である。午後一時。西風巻谷合流點、右岸の木立の中はトクサが一面に生えてゐる。これは大横川の奥までも斷續してゐた。

右岸木立の中の小徑は歩き易かつた。カルカヤ谷ワル谷を過ぎると山小舎が在つて柚の一家が住んでゐる。前方に樺山の黒木立を望み、なほ川畔の潤葉樹林中を進む。タル澤を過ぎて川原に出れば川中にコメツガの生えた大きな石がころがつてゐた。カワヤナギやトチノキの樹下に休息する。一時四十分。

下まで、右岸につけられた、細い嫌な小徑を辿る。川は直角に東へ左折して、コモタテ澤が注流する。草の中をいゝ加減登り、そして河原へ降る。鹽平の下まで約一時間、シヨ澤が合流して川は又直角に南へ右折する。丸山谷が左手から注いで乏しく水田が拓けてゐた。へうもんでふ、きまだらひかけ、はしみすじ、やまじようろうやまとしじみ、てんぐてふなどを追ふて行く。

十時二十五分。平瀬着。橋を渡らずに左岸の左手の道を行く。道は細く、岩入から桃ノ木の間のやうに登りとなる。二兒山から出る船形谷が注ぐ邊で、道はぐつと左に曲り、そして降りとなる。此の邊はナラ、カツラ、ブナ、シデの亭々とした木立の繁りである。小瀬戸谷の落合に在る柚小屋へ着いて休む。經木工場の事務所がある。傍らには大きなヒマワリが咲いてゐた。

其處を三町程進むと、對岸に小瀬戸の鑛泉宿が在つた。二階が一間、下が三間程の古びた鄙陋な原始的山の湯宿である。沸し湯の浴槽が一個、小澁ノ湯

三峰川の流れは蒼白に混濁し、上流に糸河でも有るかのような様子であるが、それは河蝕の盛んな活動を示す證據として認められる。

右から下ヨロヒヲ澤、左から曲澤、又右から上ヨロヒヲ澤、ゴボウ澤、赤岩と合流し河原を行き、或は右岸の木立の中を辿る。二時三十五分。河原は傾斜を加へてくる。川鳥がヂツと鳴いて逃げてゆく。

河 鳥

(Cinclus pallasi Temmincks) 燕雀目。河鳥科。

留鳥。形羽、共にミソサザイによく似てもつと大きく、暗褐色、腹は白く、尾は短く、脚は長い。ヂツと啼いて溪流に飛び込み、水の中を潜り走つて底に棲む虫類をあさる。岸の岩塊の凹所などを選んで巢を營む。

私は鹽川に於てこの鳥の巢を採集した事があつた。

崩壊から出るヌケ澤と樺山から來る南澤との合流

點は、五十間位より離れてはゐない。三峰川は此處から河身がぐつと東に折れてゆくの地名を大曲りと呼んでゐた。三時十分。左手に迂回すれば谷は急に狭く、兩岸より大岩が迫つてこの溪谷の秘奥を閉じた最初の門戸のやうに見えてゐる。此處で第一回の徒渉をして右に渡り直ぐ左に渉る。流れは臍を濡らしたまゝで、さして激しくはなく、水溫も冷氣を感じられる程ではない。

又右へ渉る。右岸に高い絶壁を控えて、河中に巫子岩と云ふのが小さな石祠を祀つてある。三時半。往昔、何時頃の事か、親子の巫子があつて、此の地に來り、河中の岩の上に座つて數日間熱心な祈禱をつゞけてゐたが、證驗遂に空しくして敢無く岩下の深淵に身を投げてしまつた、と云ふ傳説である。

此處の峡谷をなす所を、左手の高所に攀ち登り、岩の上を巻いて横にへづる。危険と謂へば危険である。岩壁と流れの構成とは、風景として少なからぬ魅力添へてゐた。河原に降ると右手は白い石灰岩の大崩壊があつて

大小の疊石を乗り超える。空には岩燕の群れが飛んでゐる。

河原は又小廣くなつた。左に渉り、次いで右に越える。今度は股まで濡れてしまふ。正面に權兵衛岳(二六七〇m)が藍黑色に装はれて高く屹つ。河身は左右に曲折して、右手から小黒澤、四時五十分。大黒澤、五時。イエナギ澤より河身はぐつと一廻轉して北へ向ひ、行く先きに曠い河原をなして荒川渡が見えて來た。五時二十分着。

山の鼻に接し、東方から大きな支流荒川が注流しオモ川(本流)はやゝ西に腕曲してゐる。南に大黒澤の山皺を刻んで、小黒澤ノ頭(二四六〇m)を眺め、あたりの山々は針葉の黒木立多く、幽邃の仙境である。山の确端に小さな山小屋が在つたが、蚤の襲撃と多分の閉塞を厭ふて河原へテントを張つた。

早速蚊針を準備して岩魚釣りを試みたが、何の手堪へも無く、結局山小屋へ泊つた二人連れから尺餘もある大きなあめのうを一枚を譲り受けて夕食を賑はした。

山魚

(*Oncorhynchus macrostomus*) 等椎目、鮭科。

三峰川入りではあめのうを云ふ。いはなと共に純粹の淡水魚である。大いさ尺餘に及ぶものがあり、鱗片はいわなより著しく大きく、鱗の初期に似てゐる。海に下る事なく山間河川の冷水を好む。背部から腹面近く十個の黒紋と赤斑點を存す。但しこの赤斑點は關東以東の産にはないらしい。山國の水産として鯉、鱒、鮎、岩魚などと共に重要視されてゐるが、その保護方法と増殖案が徹底しない爲め、漸時減少してゆくらしいのは如何にも惜しい事である。

鹿兒島縣の北部より北には本邦到る處の河川に生棲し、風味は寧ろ鮎以上によい。伊那町まで出して百匁八十錢、岩魚が五、六十錢位であると云ふ。

料理法。新鮮な川魚は極めて美味である。これを鹽焼にするには、先づ臟腑を取去り、細かい鱗は取らなくともよいから、よく表裏に鹽を振

り、暫く置いて水に洗い、又焼く時にあつさり、と鹽をかける。そして表裏を程よく焼くのである。山に於て鐵網がなくば串に差して、焚火へ近く地上に立て、焼く。肉が崩れない様に注意を要する。

七時。夕食が済まされる頃暗くなつた。氣隨氣儘に就眠する。夜中、計らずも下流から網打ちがやつて來た。月は雲に覆はれてゐたが、薄明りをたよりに、夜中魚の靜止して逃げないのをしほに流湍へ網を打つのである。

高遠から來た初老の網打ちだつた。天幕の前の焚火で彼れは暫く暖まつたが、又も上流へ溯つて行つた。

三 三軒小屋

荒川渡の夜は明けた。小鳥も鳴かぬ靜かな朝だ。其處から窺く荒川の溪は、襖を中半開いた絶大な奥

座敷のやうに思はれる。鹽見岳へはこの溪から南荒川を溯つて西の肩に取付き、絶頂を往復此處まで下山するの約一日を要する。

空は曇つて小雨さへ降つて来たが、間も無く止んだ。高遠の網打が不思議にあめのをばかり捕つて歸つて来た。

午前六時四十分發。オモ川は西に折れて直ぐ北に向つてゐる。左へ涉り右へ涉る。更に左へ右へ。川を涉つた新しい熊の足跡が砂の上に印されてゐた。

河原に生えてゐるフジアザミは、葉の長さ一メートル餘に及ぶものも少なくない。砂の上には澤山の蟻地獄を發見する。蜉蝣類が多いのであらう。

溪流は左へと、又右へと渉る。流木が横たはり、カワヤナギ、ドロノキが生え、ハ、コヨモギ、ウスユキサウ、オホビランジなどの花を見る。七時五十分右岸に大きな崩壊が現れた。ノタナギと稱し、六

十年程前其の邊で小屋掛けをしてゐた側師(曲物製作人)の數人が、俄然起つたこの崩壊の爲めに一時に埋没せられて、敢なくなつてしまつたと云ふ話が

いぬわし

(Aquila chrysaetus chrysaetus) 鷲鷹目、鷲科。

漂鳥。大形の鷲で、他の大鷲(Thalassaeetus pelagicus)や又尾白鷲(Haliaeetus alioillus)などより寧ろ大きい位である共に南アルプスの山中に棲息してゐるから、偶々目撃する事が出来る。いぬわしは羽色が大體黒味を帯びてゐて、一名黒鷲の方言がある。

午前九時、大熊澤着。休憩三十分。空は晴れてゐたが、陽の光は暑くなく、小寒い位にさへ感じる。カワヤナギ、ドロノキの密生した中洲で又休む。イタドリ、コメス、キ、カワラナデシコ、ヤマハコ。十時、黒檜谷に到る。そのあたり巫子岩以來絶えて久しい、但し小規模な峡谷の態様をして淵がつづく。左手に岩をへづり右へ渉る。陰濕な岸邊の木立を超え、分流を涉り、左手へ川瀬を越えた。徒渉する個所は大體水中に石が並んでゐたり、水量も減じてゐるから、驕より上を濡らす事は稀れで、水は清澄であ

ある。

崩壊の右縁りを、唐檜の傍らから熊澤越(一九九五m)へ聯絡する山徑が登つてゐた。左へ渉る。八時十分。左岸に屏風岩といふ折込みになつてゐる低い岩盤が現れ、石灰質の川中に在る大石に攀ぢて左に越える。右に、左に、そして川中にサワラの生えた大石を右にする。川身が左右にうねる。徒渉右へ又左へ右へ、その先きが小熊澤の渡しである。左へ涉つて左手の林の中を突切つて行く。樹下はトクサが生えてゐる。山鳥が一羽ゴト／＼と羽音高く翔け上つた。

宮下の話に依ると、以前此の邊で大鷲を撃つた事があつたと云ふ。その時連れてゐた犬が小熊澤へ入り込むと一羽の大鷲が飛び立つて附近の梢に止まつた。行つて見れば今小猿を捕へて食べてゐた所らしい。彼れは狙ひを定めて撃つたが、當らなかつた。そして遠く逃げもせぬ鷲をいましまし相に狙つた第二弾で斃し、諏訪まで持出したがその頃は、圓にすらならなかつたとの事である。

るが、今日も水温は冷たくない。右、左、右、左とどし／＼徒渉して行く。御殿場、十時半。左よりメンパ澤を合せる所で山の端を越すと大横川の落合になつてゐる。十一時。今迄の群小支流が急勾配を以て注ぐのと違ひ、大横川は荒川に次いで、ゆるやかな傾斜流域を見せて注流してゐる。對岸の岩壁に、岩の階段を利用して鳥の巢かなぞのやうな假小屋が、釣師によつて拵らへられてあつた。晝食。

大横川を溯れば、野呂川の兩俣の小舎へ約二時間半。瀧を右に巻いて溯行して熊ノ平まで四時間半。面白いコースが考へられる。唐松峠を丸山各合流點に越す小徑は左岸にあつて、登り口に目印の石が積んであつた。三十分にして發、左へ、そして右へ、水量は少くなる。左、右、左、右、左溪の奥にひと時仙丈岳の頂稜を望むあたりは、漸時潤葉の中へ針葉樹を加へてくる。十二時二十分。小横川着。

更に左へ右へ數限りなく川瀬を縫ふて溯行する。左岸に崖が現れ、一丈弱の瀧が二つ、聽て午後一時柳澤が北東から斜めに注いでゐた。右手は崖壁とな

つて、元御料局の小屋跡へ出る。唐松峠への廢道が其處に通じてゐるとの事である。ゴゼンタチバナの赤い實、ツバメオモトの青い實、カツラ、ドロノキ、冬青、ミヤマハンノキイ、イワアザミ、樹蔭に、キツリフネ、トリアシシヨウマ、タケシマラン、ヨブスマ、ミソガハサウ、オガラバナ。河原の石間にピラシが咲いてゐる。太陽は益々うらゝかに照らした。戸臺谷、午後二時。岳澤、二時二十分。岳澤の方へ登つて岩に沿つた小屋場で休む。奥へ前仙丈（二九二〇m）の南の岩峰あたりがいかつく聳えてゐる。

岳澤からなほ進めば、狭くなつた河原の左手にドロノキの大木が立ち、樹皮を削つて樂書などがされてある。此處から岳澤越（二二二四m）の北鞍部を丸山谷小北澤へ入り、割芝へ通じるものは、三峰川奥から里への捷徑として、よく岩魚釣りの通ふ山徑である。岩魚は三軒小屋澤に到る高度約二千メートル以下の三峰川全溪には、小支流の中に迄もよく分布し、山民に水産の遺利を與へてゐる。昨日彼等の收穫を見るに、鮎は一匹もなく、それ等は總て、今

まで巫子岩の上流で見慣れなかつたやまめであつた事は、いさゝか不可解な現象であつた。三時十七分、二回目の晝食をしたためて二十分休む。其處に咲くタカネナデシコ、カセンサウの花が眼をひく。

河原には流木が倒れ伏して少しく歩行を鈍らせられる。そして所々左岸の木立の中を辿つた。溪は俄かに狭められ、薄暗い氣分のする峡谷となり、右手の低い岩壁からは數條の絲を垂れたやうに水が落ちてゐる。ダイモンデサウの白い花。この峡谷を過ぎると間もなく、本流は直角に右手に曲折し、直ちに仙丈岳の胸奥に突き當つてゐる。左手は陰濕な深林をなして殆んど溪流の形状はない。本流は三軒小屋澤となつて、少しく辿ると三軒小屋の岩壁であつた。午後四時半着。標高約二一〇〇m、兩岸より迫る岩壁に挟まれた峽澗の奥に、仙丈岳の頂稜は實に大きく高く聳えてゐる。野營地は岩壁の下底で、板状の岩塊が上からのしかゝる様に頭上を覆ふて、雨露を凌ぎ、廻りに石を並べ、恰かも燕の巢のやうな

渡しよりは十二度低かつた。

空は晴れて、午前六時二十分、三軒小屋を出發。極めて急勾配の而も雄大な峽谷を登つてゆくのである。間もなく、岩盤を落ちる二丈位の瀧（一ノ瀧）に遇ふ。右手に搔き上つて上に出ると、又一丈位のもの（二ノ瀧）が落ち、同じく右手の岩を這ひ登る。その先きには二丈位の瀧（三ノ瀧）が水を分散してゐるので、是も容易に避けて上ると、三丈位の瀧（四ノ瀧）が音高く狭い瀧壺へ落ちてゐる。これは一寸厄介だが左に取付き、岩や樹木に縋つて登り、岩角をこえて河原へ降りる。後はもう瀧はなく、累々と亂積する石を踏んで登行をつゞけるのである。

ナンキンコザクラの花は美しく、カセンサウ、ミヤマオダマキ、タカネナデシコ、イワオトギリ、ヒメシヤジン、ミヤマキンポーゲ、タカネフウロ、チシマギキヨウ、イワブクロ、トリカブトなどの草花は、右岸の岩壁に亂れ咲いてゐる。

九時、高度は延びて西の方に南駒岳の連嶺から漸時木會駒の本岳まで眺められる様になつた。脚下の

恰好をした小屋場である。三ヶ所並列して宿營出来るので、此處を三軒小屋と名付けてゐる。雨露はよし完全に凌ぐとしても、板状節理の裁断面にある傾斜した岩塊の下に身を托す事は、神經質でなくとも多少はぢくぢたらざるを得ないであらう。前面西には小北澤の頭（二四六〇m）から岳澤越の頭（二二三四m）への青黒い一線の山嶺がひかれてゐる。四、五月の候、此處を訪れたならば、恐らく氷河の景觀に彷彿たるものがありはしないか。八月初旬にさへ幾分残雪を見る。初夏の候、割芝から岳澤越の興趣深きコースを各位に向つてお奨めしたい。

夜、月夜、谷をかすめて蒼白い月光が明暗の夜色を作る。淋しい冷たい光だ。空には雲が多かつた。月は雲に隠れたり、又現はれたりしてゐる。

四 仙丈岳

四時半にはほの明るくなつたので朝食を炊く。味噌汁の飯盒をも火にかける。氣温Fの五六度、荒川

谷は深く低く落込んでゐる。十分にして溪水は絶え二十分後又少量の水流を見る。溪は左方に迂回して小規模な岩谷をなしてゐるので右に沿ふて登る。此の岩壁の邊は殊に高山植物の開花多く、最も眼に立つナンキンコザクラやコイワザクラの他に、ミヤマシヤジン、イワワウギ、ミヤマヒゴタイ、オヤマノエンドウ、イワベンケイ、アヲヤギサウ、トウヤクリンドウ、イブキボウフウ、タカネナデシコ、トリガブト、センジョウナズナ、ハクセンナズナ、タカネツメクサ、リンネサウ、ホソバベンケイ、バイケイサウ、ヒメシヤジン、イワオトギリ、ミヤマキンボウゲ、チシマギキヨウ、タウキ、シモツケサウ、ムカゴトラノヲ、イトキンズゲ、ムツノガリヤス等應接にいとまないほど多種多様の植物叢をなしてゐる斜面に登りに登る。

右手に少量の水の落ちる岩崖を見て、左手に登れば八時、偃松叢が現はれ、タケカンバ、ミヤマハンノキ、ミネザクラ、タカネナ、カマドが生え、シシウド、ミヤマオトコヨモギ、ウスユキサウ、センジ

足を石のガレに滑らせ乍ら、偃松群に沿ふて立て續けに登つて行く。

クロミノウグヒスカグラを檢べてゐると不意に岳鴉が啼くので、振り向くと中腹の偃松叢から翔け出した岳鴉は間近い岩稜の上に止まつて、偃松の實を啄み始めた。嘴の音までたて、まだ青く堅い若實を餓えた者のやうに突つく。果ては、彼れは全身を逆立ちさせて啄む。

岳鴉

(Nuchifaga Garyoctactes japonicus Hartert) 一

名星鴉、燕雀目、鴉科。留鳥、千島や北海道にも棲息し、かけす位の大きさ、羽毛は暗褐色で白い斑紋があり、翼と尾とは黒く、下腹部と尾の先端は白い。偃松の果實などを食物として、凡そ一定の場所へ運んでそれを食べる習性がある。ヴァーと皺枯聲を出して啼く。深山で怪鳥の叫びを聞くなど、云ふのは多くは此の鳥の聲である。

ヨウチドリ、センジョウナズナ、ハクサンイチゲ、ミヤマゼンコ、タカネツメグサ、リンネサウ、ヤチアザミ、コバイケイサウ、ミヤマコウリンカ、キバナノコマノツメ、クロバナヘウタンボク、アオバナヘウタンボクなどの生育する斜面を攀ぢる。

クロバナヘウタンボク (Tonica, Camisoi, Bun-
oo) 忍冬科落葉小灌木、一名チシマヘウタンボクとも稱し、高さは尺内外、葉は卵形、裏面粉白色。莖頂に二花梗を双生し、紺紫色の二花を着け、果實は赤く、二個接して稍々瓢状をなす。アヲバヘウタンボク (Tonica Vor Vridissima, Zigei) 忍冬科。落葉小灌木。小日影山で發見した稀品で、近時仙丈岳に於ても發見された。葉は縁を除けば毛なく、子房は合して下半部以上及び。

山腹は頂稜からなだれ落ちた石ガレとなり、右は岩稜、左は藍黒色に裝ふ廣大な偃松叢の面をひかへ

……山嶺のシラベやコメツガの梢をかすめて雲霧が山麓の方からフウ——、フウ——と息の如く昇つてくる周囲の情景は俄かにかくされて急に物淋しくなると、其の時、山の魔物にでも追はれて来たものゝやうに、何處からともなく飛んで来た岳鴉が、不意にヴァーと啼く。孤獨な登山者はひどく脅かされる。恨めし相に鳥を見詰める。かうした経験は決して少くはない。但し雷鳥など、共に此の鳥も、減數の傾向にあるのは惜しい事である

岳鴉に見惚れてゐると、左手上方の岩崖を、小石を蹴落し乍ら、する／＼と逃けて行く一頭の羚羊が眼に入つた。登山者として此の可憐な動物を目撃する事は、近年珍らしい位になつてゐる。

おそろしい小石のザレ地に困難な登高をつゞけて九時。尾勝谷と差挟む西馬ノ背の頂稜に到達する。市野瀬の登路は此處から山頂の北側の山懐ろに在る仙丈ノ小舎へ通じてゐる。小舎は脚下に建つてゐた

絶嶺（三〇三三m）へ約十五分。強い東南の風が吹く。三軒小屋を出てから三時間で優にこの山頂を訪れる事が出来た。市野瀬から早朝出立して熊澤以北に一泊すれば、翌日早發、仙丈ノ小舎に到達する事は決して不可能ではない。山頂からは、市野瀬、尾勝谷、ヤブ川、北澤、尾根、小仙丈澤、大仙丈澤、横川岳へと、孰れの方面へも降路を選ぶ事が出来る。空は薄曇り、但し眺望は素晴しく佳く、甲斐駒の白哲にして高貴の相貌は、最も崇嚴の男性美を發揮し、鋸岳はあらくれた不動明王の如く、白峰が高き長老の佛は更に尊く、鳳凰の危嶺、鹽見、荒川連嶺の深窈、山地を構成する起伏重疊の地貌、遙かに巡らす奥秩父、八ヶ岳、北アルプス、木曾駒の一聯、輪奐の美しい景觀は、登高者が眞に歡喜の一つ一つとして、其の胸中に満喫してゆかねばおかないものであつた。

ベルダノイル！都の詩人は歌ふ。

雪の御殿に氷の岩屋
瀧は千丈の逆おとし

さあさ火を焚け、ごろりとまゝよ
木の根枕に嶺の月。
併し、生來の山人には、子供の時から聞き覚えてゐる節をもつて、彼等の作り上げた地唄があるのだつた。

伊 那 節

天瀧下ればしぶきに濡れる
持たせやりたや檜笠
心細いよ、山路の旅は
笠に木ノ葉が舞ひかゝる
神坂越え來りやアケビの口に
つるべ落しの陽がのぞく
遙か向ひの赤石山に
雪が見えます初雪が
木曾ぢや御岳、甲州ぢやみたけ
諏訪ぢや立科、八ヶ岳。

黒川川

黒
川
川

仙丈岳の夕映えほど、世にも雄大な美しいものは他にそんなに多くは無さそうである。この一萬尺を超ゆる隆起した地殻の絶頂に立つて、遙かに日本海方面に沈んでゆく夕陽を送すれば、紺青の空を掩ふだんだら雲は、一面に佳麗な夕焼、小焼、明日の上天氣を保證してゐるものゝ如くである。

東方に毅然として屹立する、純白に崩れた高貴な風格の、甲斐駒は何時かほんのりと桃色に染まり、兎暴そのものゝやうな鋸岳の赭顔はまさに燃え上りさう。

高く、いかつい白峰の山容も、紫赤色に色どられ遠い南の赤石も、北に離れてゐる八ヶ岳も、藍紫色のえもいはれぬ美しき山の色に香ふ。

偉大な仙丈岳の灰褐色の山體すらが、赤褐色に變り、見合はす友の顔までも、山の鬼のやうに赭く映

えてゐるのは面白い。

ひと時、聽て太陽は遙かに加賀の白山の彼方に落ちてゆき、あたりは急に、蒼白に貧血して來る中を小舎へ降る。小舎の傍らからは、取り巡らす雄大な仙丈岳の頂稜に對して、雲霧の搖曳と、朝夕に變化する山の光線の攝理とを味得するに誠に恰好の宿營地であるが、但し、勢ひ附近の偃松を唯一の燃料とする關係上、乾燥と風雪には強いが、その生長は極めて遅々として、母指大の一本でも年輪を算すれば百年餘を経たものがあると云ふ程貴重な、又内地では、高山獨特の此の植物を絶対に保護しようとするば、そこに適當な方策が案出されなくてはならぬ。

高山植物生育上から見れば、仙丈岳は正に北の白馬岳や立山と比敵すべく、白峰と共にその大寶藏庫の觀を呈してゐる。小舎の附近を檢べた丈けでも、

タカネマンテマ、ミヤマタネツケバナ、タカネツメ
 グサ、ホソバイワベンケイ、キバナノコマノツメ、
 リンネサウ、キバナシヤクナゲ、クマコケモモ、ガ
 ノコウラン、アオノツガザクラ、イワウメ、コケモ
 モ、ミヤマハンシヨウズル、タカネヒゴタイ、セン
 ジヨウチドリ、ムツノガリヤス、イワオトギリ、ミ
 ヤマメシダ、ミヤマゼンコ、ミヤマミナグサ、シナ
 ノキンバイ、ハクサンイチゲ、ミヤマダイコンサウ、
 ミヤマキンポウゲ、イワスゲ、ヨツバシホガマ、チ
 ングルマ、ハクサンコザクラ、チシマギキヨウ、ム
 カゴトラノヲ、ハクサンオミナヘシ、ソバナ、其他
 なほ數多の名稱を擧げる事が出来る。

小舎の主は、このあたりまで登つて來てゐる野兎
 を捕へる爲めの艮傍を小舎の傍らに拵へて置いた。
 艮は、細い鐵線を、兎の頸の入る位の輪にして打込
 んだ杭に固く繫いだものだ。馬蹄形に石を積み並べ
 中に茄子、瓜などの餌を入れて入口にこの艮をかけ
 て置く。夜中忍び寄つた野兎は、頸を輪に突込んで
 自然とめめつけられ、容易く捕へられるのである。

その餘りな簡單さが、寧ろ吹き出し度くなる程面
 白い。

野 兎

野兎 (Lepus brachyurus, Temm) 齧齒目、兎科。
 體毛は暗灰褐色をなし、多くは春秋の二季に繁
 殖する。冬季はその肉は脂肪が少ないが、夏季は
 草木の飼料豊富新鮮な爲め、肉は脂肪が多くて
 別物のやうに美味である。夏は一萬餘尺の絶巔
 に於てもその姿を見受ける事は登山者の既に識
 る所である。但し此の高山に於ては、それが多
 くは越後兎(Lepus brachyurus eigo)である事に
 も注意を要する。

山の生活の面白さは、ものが總てあつさりと片づ
 いてゆく事である。

「捕れるかね」と爺さんに聞けば

「二、三日前には、一晩に二つも捕つたに」

と誇らかに云ふ。その夜の獲物は、明朝の食膳に上
 せられるのである。

薄暗い一個のランプに照らされた、登山小舎の爐
 端に寄つて、伽羅香木にも類ふ偃松の、甚だ贅澤な
 フアイヤに温まりながら、餘り寒さをも感ぜずに、
 山の泊りの一夜を明かす。

生枯れの偃松は脂が強いので、油煙で顔は忽ちに
 淡黒く燻つてしまふ。そうした恰好は、誰れでも一
 夜にして天晴れ山男のお仲間入りに及第するのであ
 る。

遅く、ラテルネを吊るし、歌を歌つて、威勢よく
 小舎へ着いた學生達は、いつかもう安らかな眠りに
 落ちてゐる。山の夢は何處をさ迷ふ事やら。

小舎番の爺さんが、小便に起き出て歸つて來た。

「兎はまだ捕れないかね。」

「まだ、まだ、これからだに。」

「毛布を冠つて、寝てしまふ。」

時計を見れば十一時を過ぎたばかりである。山の
 夜の漸時に迫りくる寂寞と共に、靜かに兎が寄つて
 來るのかな……など、想像してみる。そして、又い
 つか深い眠りに落ちてゆく。かうして遂に、仙丈の

小舎に一夜を明かし、貴重な偃松のフアイヤに暖を
 取り、山の夕焼け小焼けの美しさと、朝敵の神韻、
 極まりない崇巖さの感謝に打たれ、限りなき山旅の
 幸にめぐまれながら、飽かぬ別れに小舎を立つたの
 は朝の七時、ヤブ川下りの道を執つて下つたのであ
 る。

高い小仙丈(二八四〇m)と低い北馬ノ背(二七
 一六m)の山稜とに挟まれてゐるヤブ川源頭の凹地
 は、小舎の前から直ぐ北へ向つて低下してゐる。小
 舎で使用する湧水は、カールの第三石堤の邊で間も
 なく滲透してしまふ。

馬の背は、灰褐色に偃松を着けた平頂の山稜を北
 へ長く延してゐる。偃松叢で掩はれた窪地へ着く。
 石が積んで在つた。それは十數年前、落合海軍屬遭
 難の火葬地である。暫し黙禱を捧げて其處を過る。
 空澤は北東に向ひ、偃松叢を少しく分けてその空澤
 に入つて降れば、間もなく草地へ出て湧水の流れに
 遇ふ。二十分。この水は又伏流し、その先きに再び
 湧出してゐる。この溪沿ひの草叢は、コメス、キを

主として、イトキンスゲ、クロボスゲ、タカネフウロ、クルマユリ、クロユリ、タカネキンボウゲ、ミヤマオダマキ、バイケイサウ、オンタデ、ミヤマメシダ、アキノキリンサウ、ミヤマカラマツ、オタカラコウ、タウキ、シモツケサウ、トリカブトなど開花してゐるものが多く、クロバナヘウタンボク、クロマメノキ、オノヘヘウタンボク、ウスノキ等の小灌木をも見る。偃松、サウシカンバ、ナ、カマドが溪の両側を縁取つてゐる。

みやまおつねん、さかさはちもんじ、くもまべにひかけ、みやましるてふ、きまだらせり、ごまだらてふ等が飛翔してゐる。

東には純白に崩れた甲斐駒の峰頭が豪壯に屹立して眼界を捲席し、前に据座する小松峰(二七四〇m)の山稜は暗緑色をなして、雲閃花崗岩と古生層の岩石が示す山の色彩の甚しい相違に、却て景観の變化と適度の調和を見せてゐる。

ヤブ川の水温は三軒小屋澤に比較してずつと低温である。窪地を水は伏流し、右手の岩の割目からし

たゞり落ちる所もある。其處でコメス、キを褥として横臥し山の快い温氣に酔へば足元にヤナギランが咲いて、顔前にはヨツバシホガマ、アヲノツガザクラ、その下手に水は湧出し、流れは急に水量を加へる。

サウシカンバ、ミヤマハンノキなどはいづれも残雪の爲め曲げられて地に伏してゐる。一寸した瀧がかゞり左を避けて降る。八時半、鋸岳の兇暴な赭顔は恰も溪の眞正面に控える。間もなく下流に瀧のありそうな溪の相を現すので、右に徑のない草叢の中をへづつて針葉樹林の内へ入つた。その下にはヤブ川の大瀑が懸つてゐるのである。

コメツガ、シラビソ、トウヒの黒木立の中をヤブ川の右岸に近く、立て續けに降ると、小徑はよく踏まれて居ず、溪は見えず、ミズゴケ、スギゴケ、カニカウモリ、ヤマドリゼンマイなどを踏んで只ひた降り下るのである。聽て山の斜面は緩かとなり、平地の様な感がある東天平に出た。鈍目も踏跡も全く明瞭を缺き、深林中をたゞ眼當に邪魔な倒木を越

え乍ら、少し右寄りに進み午前九時半、細い乍らもよく踏まれてゐる小徑に遇ふ。北澤峠の道である。

峠上は此處から十分位のものだ。赤河原から峠上までは約二時間、北澤小舎へ三十分。美和村組合の標札に右仙丈岳道、左北澤峠道とある。北澤峠道は往時野呂川入りに大伐採の行はれた時代に馬で物資を運搬した道で、登山者の多い今日はなほよく踏み慣らされてゐる。が、ヤブ川の登路は入口だけ踏まれてゐて、北澤の登路とは比す可くもない。休憩後、赤河原へ向つて降る。

東大平の内は急になり、又緩やかとなり、左手に處々ヤブ川へ面して大崩壊がある。溪流の音が響く三度目のナギの縁からは、西、ヤブ川の上流に二段に懸かる大瀑が眺められた。二つで五十メートル位の高さはあるらしい。溪の上部は針葉樹、下部には潤葉樹を配置した、ヤブ川の森林も又美しいものと思はれる。

コメツガやシラベ林の急な勾配を二十分も降り續ければ、小流れを渡つてイタドリやタニタデの草叢

からヤブ川の右岸へ出る。そして戸臺川の赤河原へ着く。十時半。甲斐駒方面より押出した漠大な河原の砂礫には、三つ頭、不動山より崩落した暗褐色の岩石が夥しく雜り、河原一面に亂積してゐる。此のあたり一帯赤河原と名付けられてゐる所以である。これは鋸岳の山體をなす古生層の粘板岩、或は硅岩硬砂岩等が、甲斐駒の山體をなす火成深造岩に依つて接觸變化を與へられ、酸化變質岩を構成し、それは三つ頭邊より編笠岳(二六〇七m)に及び、一樣に戸臺川へ向つて赤褐色をした破片岩礫を崩落せしめ、河原一帯に流出散布してゐるのである。これ南アルプスの大部分を占有する古生層が、山地生成の際花崗深造岩の山岳との接合地に於ける化學的現象を物語るものであつて、駒岳の花崗岩が、小松峰(二七四〇m)仙水峠邊に於ける古生層との接觸變化、淺夜峰から高嶺の稜線を作る古生層が、鳳凰山の花崗岩とアカスケノ頭以北に於ける接觸變化などと共に著しい證例である。

河原を少しく下れば駒岳への登山道が岐れてゐる

六合目ノ石室まで、登り約三時間半、それから頂上へ一時間半の行程である。

戸臺の河原は廣く、勾配はさして急ではない。カワナギ、ヤマハンノキ、ドロノキ、カツラ、トチノキが石河原に生長し、ヤマハ、コ、カワラナデシコ、カワラヨモギ、ウスユキサウ、フジアザミ、ウヅミサウ、タニタデ、イタドリ等の分布を見る。赤河原とヤブ川の水は合流し、河原は赭岩が壘々として何處までも赭褐色に彩色されてゆく。

顧る、甲斐駒の純白な壯麗無比の峰頭は、惜しくも雲に隠れ、右手に見上げる鋸岳は、粗野な赭褐色の崩壊と、灰黒色の岩壁に、上部は針葉、下部は潤葉の樹林を纏ひ、何處までもいかめしく聳立してゐる。

二十分にして熊ノ穴澤合流點へ着。鋸岳特有の赭褐變質岩を多量に押出してゐる熊ノ穴澤は、平常は水なく上部は不動山から二高點、大ギヤツプ、中岳、小ギヤツプ一高點までを洗ひ、それは最も險惡な薄氣味悪い、山黴の猛牙を並べて立ててゐる。えたい

の知れぬ此の山の氣息が、谷間からフツと送られて来るやうに身震ひされる。

左、氷澤、十分にして角兵衛ノ澤となる。此の谷は、普通戸臺口から鋸登山者の執る登路となつてゐる。それは戸臺川から角兵衛澤に沿ふて左手の森林を登り、澤の石ガレを掻き登つて鋸岳一高點と編笠岳(二六〇m七)の鞍部まで約四時間。一高點へ二十分。大小裂罅を経て駒岳六合目石室まで四時間半の行程である。鋸岳の二高點を中心とし、大小ギヤツプ、一高點から不動山(二六二〇m)をつなぐ信州側の谷は、すべて熊ノ穴澤に合致してゐる。陸地測量部五萬分の一圖に、大小ギヤツプの谷が角兵衛ノ澤へ落ちてゐる様に現れて居るのは誤であらう。なほ進めば、左、ウタジク澤、十五分にしてネキゴヤ澤となる。十時五十分、横岳峠の登路がこの右岸を登つてゐる。峠上まで二時間、それから釜無川上流の河原を辿つて富士見驛まで約七時間の行程である。峠上の東に在る大絶壁と鞍部越えのたるみが仰がれる。溪谷がデルタの爲めに隠れて密林がこれを

覆ひ、溪口は一見混亂判別に苦しむ程である。一時間毎に十分或は十五分位づゝ休憩を取り乍ら行く。

三つ石と稱ぶ邊で、戸臺川の流は何時か河原の石に吸ひ込まれてしまひ、暫く行つて左手の荒倉(二〇一七m)から注流するニゴ澤の合流點邊より可成の水量で流れ出してゐる。アフリカの内地には恐ろしく大きな伏流の大河があると云ふが、妙な溪流の様式ではある。

正午、兩岸に大きな岩壁の屹つ處に着く。南側のものは殊に高く、ホラガイ澤と云ふ岩谷がそこに刻まれてゐた。晝食にして休息する。岩にはイテウシダなどが生えてゐた。

釜無川の上流邊から續く石灰岩は、白岩岳(二二六七m)幕岩を経て此の岩壁に到り、戸臺川を横斷して南へ走り、地藏(二三七一m)三峰川の巫子岩、小澁川小澁ノ湯附近等に露出してゐるのを見る。

人夫は此處で岩鹿を撃つた話をした。山腹で犬に追ひ詰められた羚羊は、つひに、人も犬も行かれぬ

この岩壁の中へ僅かに裂罅を傳はつて遁げ込む。犬が山上から監視的に吠えてゐるのを聞いて羚羊が岩に附いたと知つた獵師は、迂廻して河原に降り立ち岩壁を物色して羚羊を見付け、河原からそれを撃つのである。併し此の三、四十メートルの斷壁を河原へ落下した羚羊は、大概目茶目茶になつて物の役にも立たぬ事が多いと云ふ。

三十分の後此處を後にする。みやましろてふ、さかさはちもんぢ、すみながし、おほみすぢ、きまだらひかけてふ、などを追ふ。

桑畑が現れ、炭焼小屋に煙が立ち戸臺は近付く。點々と小石を積んで目標とした河原の小徑から、左岸に開かれた作場道へ出て、製板小屋の傍らを右へ河原を横切り、午後一時半、戸臺の部落へ着く。人家は、往時の水害で右岸の山腹へ移轉散在してしまひ、附近六戸の内、河原からは近くに建つ二軒の人家を見得るにすぎない。その一軒(小松傳彌)では登山者の爲め宿泊の便宜を計つてゐる。美和村案内者組合は、事務所を黒河内字平に置き

竹澤長衛以下十數人の組員を揃へて鋸、駒、仙丈の案内を引受けてゐる。冬の白峰を訪れるには此處より入るのが最も便利である。旅舎は平に福島屋、溝口に但島屋などがある。

駒の山頂は戸臺川の奥に、登山口の標識の如くV字谷を壓してゐる。

戸臺から小黒川の落合へは僅かである。河原から上つて小黒川入りへの里道へ出た。

小黒川を溯れば大久保、吉平から溪沿ひに清水屋を経て入笠山を越え、中央線青柳驛に到る六里餘、約七時間の行路がある。

落合の少しく奥には高遠電燈の小黒川發電所(約六百キロ)が見えてゐる。此處の電話を利用して高遠の貸切自動車と呼ばば、三十分にして黒川の部落まで出迎へるといふ便利がある。黒川川奥の孤村もかくして、漸時、昔日の邑僻な僻から遠ざかつてゆく。

小黒川の奥入り、約十町ほどの狸澤では、三角貝 *Trigonia* を採取する事が出来た。之れは、結晶片

岩の地帯に接し、古生層の中間に介在する中生代白堊紀の小地域の存在を語るもので、本邦産約九種の三角貝のうち、このものは、烏帽子形 *Trigonia* *Pociformis* と、丸形 *Trigonia* *Kikuchiana* とを存し北海道の白堊紀とは異り、四國白堊紀の系統に近いものである。

里道は、黒川川の右岸の高所を通じ、鋸岳の麓く巨齒を剥き出した岩峰、駒の尖頂、小松峰、北澤ノ頭が浪の如く續き、溪の奥をこめた山岳に對する思慕が、幾度も幾度も東方に視眸を向けさせる。

雲母片岩の蒼い大きな崩壊を過ぎ、河原を見下せば、其處の岩石はなほ大分褐色に色取られてゐる。地質上水成岩と火成岩の大接戦に依つて、黒川川の上流戸臺川に流した流血の名残りとも見られる。

道は溪に沿ふて、北より西に迂廻し、對岸から尾勝谷と穴澤が注ぐ。尾勝谷には、大きな仙丈岳と北馬ノ背の頂稜が眺められる。

道は漸時登りとなり、黒川に到るまで、川岸から餘程離れて鷹岩のすつと上を過ぎる。小さな谿を渡

る所に橋が懸り、水の少い瀧が二段に落ちてゐる。なほその邊からも背後には鋸の一高點が見える。

鷹岩は、その岩上に生えた老松に常に鷹が止り、此の鳥の白い糞は、岩壁から下の舊道にまで落ちてゐたが、老松は近年枯死し、鷹も來なくなり、そして里道は此の岩のすつと上を通ずるやうになつてしまつた。

杉林、赤松林に斧の音がひびく。西に戸倉山が見えて來た。

午後三時二十分、黒川着。戸數三十戸。道路はずつと廣くなつて、村端れには佛堂(十三佛)が建つてゐた。路傍へ植えた一本の彼岸櫻は、樹齡約百年。天神様の御祭だとして、一群れの兒童はあたりを掃除してゐる。

和泉原の手前で、市野瀬へ歸る人夫と雇傭契約を解き、残つた荷物は一切肩に、午後四時半、平の街道側にある美和村登山案内組合の事務所(宮下桔治)へ立寄り、そして高遠行自動車の通行するのを待ち受けた。

戶
中
川

戸中川

一和田

天龍川の河港、時又から下流の満島までは約三十
二キロ、毎朝定期の川舟が出てゐる。

中央線辰野驛から伊那電氣鐵道に依つて、時又に
昨夜の旅装を解いた私は、梅ノ家といふ、料理屋兼
業ではあるが、割合に質朴な旅舎を出て、前夜から
申込んで置いた便船に乗るため、朝早く天龍の河岸
へ歩みを運んだのである。

時又は小さな宿驛で、河港としての存在の意義が
そのすべてであるらしいが、伊那電鐵の天龍峽まで
延長され、聽て近く三信鐵道が三河川合に聯絡した
曉は、その繁榮に餘程影響を蒙るであらう事が推察
される。

但し漸時廢滅の運命を辿る河川の交通利用として
殊に勝景を誇る天龍川の舟行は、旅情を喜ばしむる
多大の興趣に満たされてゐる事を痛感せずにはゐれ
ない。富士川や大井川の舟運が、沿岸の鐵道に依つ
て殆んど終熄の現状にある際、天龍川のそれがひと
り取り残されてゐる事は、旅情にとつての惠福でも
ある。

午前七時四十五分、川舟は一杯に荷を積んで、時
又の川岸を離れた。客は他に小娘が一人乗つてゐる
ばかり。賃金満島まで金一圓五十錢。

舟は、長さ八間、幅六尺二寸（底四尺五寸）その
型によつて、さつばとうかひとあり、いづれも一枚
板から成る。一艘の建造費は約二百五十圓程を要し
て、使用期間は五、六年位のものであると云ふ。

天龍の流れは白濁を呈し、支流の三峰川や小澁川

の奥あたりに氷河でもあるのではないかとあやしまれる。

時又の下流に於てやゝ潤けた河原は、死人岩の岩壘を過ぎる頃から俄かに峽流となつて、僅かの時間で所謂天龍峽の岩峽に吸ひ込まれるやうになつてゐた。

兩岸は花崗岩質の絶壁を立て聯ね、水面よりも約七〇mも屹ち、高く懸る黒塗りの釣橋、姑射橋の下を一瞬にして過ぎる。

右岸には爛々潭、仙牀磬、樵庶洞、芙蓉洞、左岸には黒雲母片岩の龍角峰を見る。このあたりばかりは、急に洞穴のやうなうそ寒い空氣が流れる。

この地域は先行河の流路として知られ、現在より約四十五メートルの高所に數個の甌穴ポットホールが存在してゐる。

其處には天龍峽ホテルを始め、立派な旅舎や旗亭が建ち、近來景勝地としての名聲は噴々たるものがある。

舟は約十分間でそれらを後に、間もなく、三信鐵

道の鐵橋をくゞつた。天龍峽驛を起點とし、川畔に沿ふて三州川合の豊川線に聯絡する約七〇キロの鐵道は、目下工事中であるが、竣成は尙ほいさゝか將來があるやうに思ふ。

阿知川と米川の合流するあたりは、川浪が高く、舟の中へも飛沫がかかる。

天龍下れば……の歌詞をそこに實演してゐる。ドンと當る飛沫は左側が多い。

舟が河岸の停留所に近づく時は角棒を持つて舟子は舟端を叩く。その音は強く河岸に響いて傳はる。

迂餘曲折して行くゆるやかな水の流れの面白さ、音もなく走る輕舟の快さ。

峽谷は滿々たる水を湛へ、岸邊の潤葉樹は新緑の色美しく水と岩盤に反映してゐる。

岸邊の樹立で大瑠璃のチュリーくと啼く聲も快く聞えてくる。

大島の邊からは少しく磧が拓け、釣橋をくゞると樽瀧と稱する急瀬に出た。天龍第一の難所であると云ふが、浪は高く舟のへさきに突き當る。續いて尙

ほ二ヶ所ほど急瀬があつた。

川田の黒釣橋が九時。御供ノ磧から、南宮峽と稱する景勝地を過ぎる。

それは温田から御供への黒い釣橋や、狭く深い淵の崑岸に祀る南宮社の林叢、一寸眼を牽く配置である。

和知野川と萬古川の注流する美しい自然を眺め、處々急流を経て、又緩やかな峽流となる。

突當らんとして岸邊の崑角に突進する舟を、あわやと思ふ瞬間に於て、くるりと方向轉換させる舟子の手際のおざやかさ。

洗練されたそうした技巧を見物するだけでも、可成りの危険に直面しその興趣を覺える。

流れは何處までも濤と急流とが交互し、洋々として極まりもないやうである。

水速は一秒間一—五m。水量は此のほとりに於て平水約五千個、水棲魚の主なるものは、鮎、鮠、鮠等。

遠山川の藍青な清い流水が左岸に注げば、川は大

きく迂回して、遂に平岡村滿島の河港に着く。午前十時である。

滿島は、下伊那郡南端の一名邑で、天龍の流域を三里で遠州周知郡の舊奥山村（水窪町）に接し、河畔東岸の緩斜地を占めて戸數四百。旅舎にさゝやかな滿島館、綠屋、長野館、一橋、福住などがある。

過ぐる大正十四年の十月中旬、私は田代の瀧浪富士太郎を連れて、大無間山、光岳、鶏冠山を縦走し和田の宿を経て此處に泊つた事があつた。

その時の宿は橋本屋と云つて懐しい想ひ出はつきないが、今はそうした旅舎はなくなつてゐる。

やゝ拓けた河岸から細い坂道を上つて、滿島の宿場とも云ふ可き狭い通りを横切り、更に、石を敷いた坂を登れば、左に小學校や、村社滿島神社（諏訪社）の鎮座する峠上（四四二m）へ出て、急に耕地のある斜面を遠山川畔に降る。

支流小河内川の釣橋を渡り、左岸のやゝ細い日蔭道を行く。折立で右岸に移り、飯島から溪谷の奥に池口岳の山稜を遙かに望む。

名古山のはづれの八木橋澤には、路傍に信玄瀧といふのがかゝつてゐた。
旗亭などが在り、納涼の幽翠地として撰ばれてゐる。

再び左岸に移り、支流八重河内川を渡れば、今迄の里道から秋葉街道の縣道に出る。

この兩岸には、左岸に八幡社、右岸に諏訪神社が祀られてゐるが、いづれも杜に囲まれた社である。

下和田の街道を暫く北へ進めば、和田の宿であつた。午後二時。

潤い街道を挿んで人家が並び、遠山川の左岸に位して下流の満島へ十二キロ、上流の上町へ同じく。南信棹尾の名邑であるが、交通は極度にはゞまれてゐる。

南アルプス信州側の最南端に於ける登山口で、郵便局、警察署、旅舎に紺屋、大島屋、他一、二のささやかなものがあり、山案内者として高根六伊が居る。
此處から光岳へ登るには、上町への新道を、大島

の城砦を築き、永祿年間から甲州武田氏に屬した事もあつたが、その子土佐守景直に到つて徳川氏に従ひ全盛をなした。

その子嘉兵衛景重は病弱で實子がなくして歿すると、養子の小平次景信と弟の長九郎景盛とがその相續を争ひ、遂に家名は斷絶した。

俗説に依ると、土佐守は郷民に對し、苛斂誅求を事としたので暴動が起つて亡ぼされたとしてある。土佐守の弟の新助景道が江戸參勤の歸途、大河原に於て暴民の爲めに慘殺された事は明かであるから、それと混同して語り傳へてゐるのではあるまいか。

但し、和田の曹洞宗龍淵寺の遠山様（土佐守墓）の杉（四本）は、殿様が奥方と一緒に逐はれて落ち延びる時、此處で食事をしてハシを立てたのが生長したものであると謂はれ、その枝を折れば必ず死ぬと傳へてゐる。

遠山川西澤渡のほとりのタヨリヶ島は、山奥深く難を避けた遠山一家が、城下和田の便りを

から池口へ出て牛首（一二三四・九m）の山稜に登り、大利見、小白木、加加良銅山フキ屋の跡を、島木に辿つて、池口岳の北の肩に着き、順次に加加森山、鹿平、光岳へと進むのである。

赤石裂線（Akashi tectonic line）中に介在する遠山郷に於ける中心地としての和田は、古來の文化に左記の如きものがあつた。

遠山郷

鎌倉時代、南信のこの僻遠の山間は、江議遠山の郷と稱し、美濃の遠山と區別されてゐた。

範圍はその頃天龍川畔に及ぶ廣義なものに解されたが、漸次縮少して現時は遠山川（和田川）の流域の村里のみに限られるやうになつた。

戰國時代の末期頃、遠山郷の領主に遠山土佐守と云ふのがあつた。

藤原氏を遠祖とし、室町幕府の初期頃此の地に來住したのであるが、遠江守景廣の時代和田城に據つて大いに發展し、村落の各所に數ヶ所

待ち侘び乍ら暮らしてゐた所であると云ふ。

和田の北端に小池と云ふ沼地が在る。鯉が澤山棲息してゐるが、之を捕獲する者は何等か大きな不慮の祟を受けると云ひ、又、八重河内村此ノ田の上のオンタノ池と關連してゐて、一つが増水すれば、他が減水すると云ふ事である。

遠山郷は稀有の山村であるが故に、徳川時代は樽木を持つて納税に當てた慣習があつた。

それには大、中、短、雜の數種の別があり、大凡長さ四尺二寸、三方五寸、腹三寸（一挺につき米八合）から二尺二寸、三方三寸、腹二寸、（同米四合）位、又、長さ六尺五寸のものもあり、三ヶ年或は七ヶ年渡として山から伐り出して天龍川を鹿島まで筏に組んで流した。その量は、伊那郡内六十萬二挺程、内遠山分の満島渡場に於て三十四萬八千挺（享保十一年以後三分の一となる）など、記録されてゐる。

諸木改御番所は、満島や遠州口染の木島に設けられてゐて、森林の保護、運材の數量検査、

通行人の吟味にあつた。
 村内に彌宜様が多く、毎年十二月十三日その
 祭祀を施行せらるゝのも妙である。

和田は旅舎紺屋に泊る。此の家は女中と男の子が
 給仕に出て来て、農業兼營の如何にも田舎めいた素
 朴な應待ではあつたが、その裡に多分の親しみを印
 象されたのは事實である。夜は高根六伊が訪ねて來
 て、暫らくの間、南の開発について語つて行つた。

三 戸 中

翌早曉は家鶏と森山の雉の啼聲とで明け始める。
 仕度して午前七時二十分、和田を立つた。

坦々たる秋葉街道を南に向ふ。和田河畔の懐しい
 人煙を後に、下和田から八重河内川の右岸に沿ひ、
 梅平を過ぎて小嵐川との合流點に到る。そして八重
 河内川の釣橋を渡り、稻荷社の側らから、青崩峠へ
 の本道と岐れて、左に豹越しの道を登つた。

八重河内の溪には、部落の中に建つ小學校や、溪
 奥に、池口岳、鷄冠山の峰頭を望む。
 鷄冠山の西南のガレが鷄冠の形を備へてゐると云
 ふ。

點在する焼畑、林叢に鳴く鶯の聲。八時二十分、
 平ノ田の山の斜面にある村家に沿ふて、その右手の
 麥畑の細道をなほも登りつゞける。

急な苦しい登りで、栗林の畔りから、須澤に面し
 た尾根條に出る。遠山郷には特に栗の植林が多い。
 彼様な山の中腹に田が二枚、桑畑が三枚と散在す
 る。レンゲツ、ジの花は美しく、雉鳩の聲、頬白、
 目白、仙臺蟲喰などの小禽の唄が亂れる。

みどりの栗林、ついで杉林、田が數枚ならび、左
 草木道の道標一基、右手に青崩峠(一〇八五・八m)
 あたりの崩崖(角閃片麻岩)を眺める。

潤葉樹と草原の斜面を登り詰めて行けば九時半、
 ついに豹越の峠上(一一八〇m)に着いた。

其處は、信濃と遠江の境で、木立のない平な頂稜
 である。青崩と熊伏山を望み、遠山の溪澗をかへり

見る。

東は遠木澤の先端が黒倉山(一一三・七m)から水
 無山の方へ細く入つてゐる。峠を降ればすぐ小流れ
 があり、溪流の右岸の山腹を緩やかに降つて行く。
 遠州特有の杉檜の植林が眼をひく。人に會ふことの
 殆んどない小淋しい道ではあるが、新緑の候だけに
 ほととぎすが頻りに啼いてゐた。

小さなホツ(尾根)を捲き、急な下りをして又横
 にへづり、バイカウツギの咲く山小屋のほとりや、
 石ガレ、焼畑を見て溪流を左岸に渡り、十時二十分、
 麥、桑、茶畑をへて右岸に移り、更に左岸に渡ると
 遠木澤の人家がぼつり／＼と現はれた。此處から辰
 ノ戸山(一一五七・二m)の北を経て青崩峠上に通
 ずる小道がある。

遠木澤で右岸に越え、それから少しく山腹を登る
 やうに辿ると草木の里落である。十一時十分。

急斜な畑地の中に建つてゐる水窪小學校の草木分
 教場を訪ねると、義務教育の六學級の生徒數合せて
 五十一名を一人の教師が受持つてゐた。

水窪町が舊奥山村の山林を含む十七方里といふ廣
 大な面積を有し、而も交通極僻の山間に幾多の小部
 落を散在してゐる關係上、隨つて分教場が約九ヶ所
 に亘つて存在し、更に便法として、家庭教授所さへ
 も二ヶ所を數へる事も亦止むを得ない。

先生の金指正一氏は甚だ親切であつて、教員住宅
 の方へ招じ、有謂便宜を計る事を申出られたが、先
 を急いだため約四十分話ただけで惜しくも辭去し
 てしまつた。

小學校の公用の事柄に就いては、村人は何時でも
 約三里を隔てた水窪の宿やその本校まで、使ひ走り
 を厭はないと云ふ。質朴な山村の生活がなつかしま
 れる。

十一時五十分此處を後に有本へ向ふ。恰も晝休の
 時間を見送二人、白倉川まで案内されたことは無上
 の喜びであつた。後日東都から、金指氏宛てに兒童
 等へのさゝやかな土産を贈つた所、又實直な禮狀に
 接した。旅に於ける美しい一つの印象である。

牛首天皇と記された祠の前から、解りにくい難路

を白倉川の畔へ出る。十二時十五分、案内して呉れた児童と別れて有本に登る。溪は深く山は可成りに急峻である。有本の里落、三十分。小道は更に登りを続ける。潤葉樹の樹影が多く、高度はぐんぐんとしてゆく。

大寄の小部落は午後一時十五分。急斜面に在る屋根に石を乗せた乏しい人家、出揃つた麥の穂、村家を上へ突切つて山腹を横にへづる。

かくして高森(一一四〇m)から南に延びてゐるホツ(山稜)へ出る。五十分。

眺望はやゝ展けて、あたりをこめる緑の山々、根ノ上(一一六〇m)と高森との間に白倉川の溪谷は切れ込んで、有本を近く、草木の人家を遠くに見せ、熊代山と観音山の、一線に引く頂稜を背景としてゐる。

此處から少しく北へ進めば、東方には戸中川の溪を間に、麻布山が眼前に屹ち、溪の奥には黒澤山を左に、不動、鎌崩、丸盆岳等の黒法師連峰が聳えてゐる。それは藍黑色の針葉樹に掩はれてゐる山稜の

起伏である。

このホツからは北へ行つても、亦南へ行つても、根を経て戸中川に降る小道がある。それは急な山の中腹で約二十五度から三十度位の斜面に小麥大麥の畑は拓け、根の人家が散在してゐるのである。

畑の畦を縫つて、この急な小道をどしどし降つて行けば、無人の溪澗に別け入るのではないかと思はれるが、聽て釣橋を渡つて、戸中の湯場で、宿舎を兼ねた石本辰五郎方に辿り着いた。

杉木立の中の、甚だ鄙陋な暗く狭苦しい二階屋、鑛泉は宿舎の前に少量湧いて湛へるものを浴槽にくみ込んで沸かす、硫化水素の弱アルカリ性鑛泉である。

効顯は著しいと云ふが、湯ノ宿としての設備は何もなく、夜はランプをとぼして、薄暗い二階に就寝するのである。

戸中川の流れのほとりには、何處に人家が在るのかと怪しまれるが、中戸が九戸、根は十九戸、瀬戸尻が八戸、小又が五戸、雨久頭が十三戸、水窪町で

總計千二百餘戸と註されてゐる。

水窪の宿は遠州に於ける北邊の中心地、信遠をつなぐ秋葉街道の要衝として、水窪川に沿ひ、人家稠密して、警察署や郵便局が在り、旅舎に泉屋、雨久頭屋、鈴木屋外數軒を數へる。

平原地方への交通機關としては、天龍川畑の中部なかつべの宿へ徒歩約八キロ。中部から豊川鐵道の終點川合へ乗合自動車を通じてゐる。賃金一圓。三河川合驛は東海道線豊橋まで賃金九拾錢である。

水窪から遠州秋葉山まで徒歩約二十八キロ。そして、それから袋井驛に乗合自動車の便をかる事が出来る。

戸中は柄生とも書き、水窪町の第十區に指定されてゐるが、黒法師連峰の西側山麓に遍在する山間極僻の里落だ。

北は水窪川の支流翁川の沿道から青崩峠を越えて遠山川畔の和田へ約七里。水窪へは水窪川の本流を三里程下るのである。寸又川との分水嶺山脈への山案内者としては、根

に獵師の坂中藤治、瀬戸尻に山下徳重其他がある。

土地の傳説として残る話は、戸中川の溪の中島に見る長者屋敷跡と古墳らしきものであつた。塚は京塚と稱し、姫井戸、宮ノ坂、奈良城山の名稱も、何等か京畿の落人に暗示をもつてゐるやうである。下田の高橋藤平方と保存されてゐると云ふ開かずの箱は、古來貴重な遺物として近村に膾炙されてゐた。麻布山神社は無格社で、舊八月七日を祭典日とする。

二戸中川

戸中の夜は明けた。朝の内空は幾分雨模様であつたが、幸ひにも終日曇天だけに止まつてゐた。明け方の小鳥の聲は戸中川の瀬の音に紛れてしまふ。

午前六時半、石本五郎衛門と云ふ老人のやうな名の若い人夫を連れて戸中の湯場を出發する。

そして戸中川の左岸やゝ高所を通ずる御料林の細い林道を辿る。

麻布山から出る麻布澤のあたりは、新緑にこめた崖道となつてゐた。

麻布澤に住む獸類は、いづれも必ず耳がさけてゐる、などと云ひ傳へられてゐる。其處に懸る瀧を布瀧と云ひ、物凄しい深淵を蛇ヶ淵と云ふ。

カミの平の對岸は難場道の小屋場跡で、溪が東に屈折する邊で下ノホツ澤が注ぎ、道の下は中島と稱する小屋場で、古墳ではないかと疑はれてゐる京塚や姫ノ井戸をもつてゐる。

手前から夕日向澤、奈良代山からユバノ澤が注ぐ。道は高所から降つて下深澤の所で戸中川の流れに添ひ、直ぐ右手に少しく上つて上深澤を渡れば、此處に熊村愛林事務所の孤屋が建つてゐる。留守居の妻女から茶などを出されて二十分ほど休む。

八時發。それから十五分で中小屋に來た。左岸に椎茸小屋と林業の入夫小屋が在り、橋を渡れば、對岸に御料の事務所が孤在してゐる。いづれも無人だつた。

徑の岐れとなり。十一時十分、岩盤を落つる中俣の水源の小流れのもとで晝食をとつた。

そして此處からはジクザツクの登り三十分で正午遂に南アルプスの主稜の鞍部であるロクロバの峠上に着く事を得た。

ロクロバは北は黒澤山に連絡して、中ノ尾根山、池口岳へと續き、南は不動岳を控えて丸盆岳から奥黒法師岳へと連峯してゐる。

小徑は直ちに東へ向つて寸又川流域のアゲノ河内の溪へ降り、二俣を経て逆河内の左岸を辿り、アケビ澤に於て寸又川を渡り、上川根村の東側に通じてゐるのである。

此處でロクロバの頭（一七四七・四m）の東側を捲く御料の舊林道を辿る。それは古い伐採跡で木立は尠ないが、道は荒廢してゐて可成り歩き難い。

山稜の一帶に繁茂してゐる熊笹を分けて、僅かに踏跡の如きものを辿る。午後一時半、不動岳を分派する主稜の赤クズレの頭（二〇〇〇m）に着く。

二一七一・三mの三等三角標を有する黒法師連峰

の小徑を登り始めた。十五分で一ノ澤へ入る徑が別れてゐる。

ガレを過ぎて横へヅリに進む。山はモミ、ツガ、カラマツの針葉樹に色々な潤葉の新緑のあざやかな喬木が雜る。

駒鳥や慈悲心鳥が啼く。

九時四十分、大きなガレを横切る。十時、其所に一棟の山小屋（椎茸小屋）が在つた。此のあたりの道は、踏み行く小徑の落葉の蔭から、頻りに山蛭が發見されるのだつた。

焦茶色の醜怪な山蛭は、動物の足音を慕つて、盛んに活動を始め、血を求めて吹ひつかうとする。で二人以上が揃つて山路を歩く場合は——蛭は前道蛇は後道——と云はれてゐる。

寸又川、遠山川、水窪川等の各奥地には、殊に山蛭が多く棲息してゐる。その出現は梅雨期に最も多く、十月となつて氣温が寒冷に趣けば、殆んどその姿をひそめてしまふのである。

の最高點不動ヶ岳へは、此處から北へ約三十分の行程である。

不動ヶ岳の名稱は、山麓逆河内の支溪白澤に懸かる不動ノ瀧と、其處に建つ不動の石碑とに起因してゐると云ふ。但しその山嶺には小祠も何も祀つてない。一體に寸又溪澗を圍繞する連山の裡に、山靈を祀るものは僅かに大無間山頂の天祖三神の小さな木祠を見るに過ぎず、最も高距の優れてゐる二五九一mの光岳でも、甚だ顯著な不動ヶ岳でも、又は奥黒、前黒の兩山頂でも一向にそうした事の形跡を發見しない。

而も川根の山村にあつては、水蝕に依つてなされた圓形或は隋圓形の石を一定の樹下に積んで、それを大日如來と崇め、耳の病や齒の病の平癒を祈る風習が存してゐる。容易に醫療に接することの出來ぬ山間の住民等は、常にそうした信仰と、絶えざる勤勞に依つて彼等の健康を保持してゆくのであらう。赤クズレの頭は平な潤い頂稜で、シラベやコメツガやカラマツの樹立にサウシカンバが飛んで短少な

笹が覆ふてゐる。

東は寸又川上西河内の水源、西は戸中川本谷で、奥黒法師の山腹にかけて、青江澤、日影ノ澤など、山皺と溪谷は甚だ錯綜してゐる。

鎌崩岳へつゞく主稜は、少しくくびれてゐて笹が深く、苦しい登りであるが、笹の勢なような尾根筋を分けて行く。

鎌崩岳(二〇六〇m)の山頂は、シラベ、コメツガ、サウシカンバの樹が生え、樹下には短小な笹がある。二時十分、此處を過ぎ、十五分で鎌崩の險にかゝつた。

左右から崩壊して双のやうに成つてゐる山稜は、駒灰色の古生層の地肌を露出して、足を踏み手を觸れる岩石をもろくもガラ／＼と崩れ落すので、それを渡るには極度の緊張を覚える。

短かい間ではあるが二ヶ所程、此の危険な岩稜を超えた。数年前の通過の記憶が新しく又甦る。

三時、丸盆岳の下部あたりの瘦尾根は、ヤブが深くて甚だ煩はしい。シヤクナギ、ヒメコマツ、シラ

い山のうねりである。

丸盆を伏せたような丸盆岳の頂稜に立てば、東面には大井川最大の支流、寸又溪間の廣大な山皺と、六萬町歩を擁する千頭山御料林の大深林が展開してゐる。

北には光岳の残雪を眺め、信濃俣山と大根澤山の間には笹ヶ岳と布引山が窺き、大無間山の上には遠く美しい富士を仰ぐ。

西面には、小さな多くの山皺と水窪川の水源が、恐ろしく幽玄に入り組んでゐる。

滾々と湧く地脈への愛を満喫しながら、丸盆岳からその東山稜、天地へのホツを降る。

残雪を踏む。上西河内の溪にもそれを見た。

直ぐ針葉の巨木と笹の中へ分け入る。

ひどい熊笹の斜面をこぐ時は、方向を識るにさへ氣を付けねばならなかつた。

鶯や眼細が啼く。

五時二十分、山稜には踏跡が現れた。笹はなくなつて歩行はやうやくはかどる。

べ、コメツガ、オホカメノキなども藪を作つてゐる。無暗に掻き分けて前進した。

丸盆岳、三時三十五分。樹立はなく西面は草地にザレがあつて少しく高山相を見せ、随つて眺望も可成りに恵まれてゐる。

南西に大きな尾根を索いて、奥黒法師岳の山嶺は山高帽を抜き、其處から東西に根を張つた山のうねりは、左に大窪二ツ山から前黒法師岳を突出し、右には北側のヒカゲノ澤に残雪を着けたバラ谷山(二〇一六・五m)から戸中の前黒法師山へ續く小潤い山背を長く派出してゐる。熊笹がベツトリとそれを覆ふ。なか／＼に歩けたものではない。

バラ谷山から南へは、川上(一八六八・一m)タバネホツ(一六六〇m)、奥千石(一六七四m)、下西出二ツ山(一六四〇m)、三又(一五九四m)、高塚山(一六二二・一m)、龍馬ヶ岳へと、聯互し、遂には千メートルの高距をも失墜して低少な山脈に終るのである。

それは、北端は仙丈岳に始まる赤石主脈の長い長

六時、下西河内より通ずる、さらに良い山徑となつた。降りる急ぎ、ジャガレを後に天地と呼ぶ往古に住家でもあつたらしい遺蹟へも寄らず、そのまゝ寸又川畔に出て釣橋を渡り、急な登りをして、七時二十分、オサキに辿り着く。

山の斜面を拓いて人家二戸、高い方に在る大村すみ方へ泊る豫定であつたが、都合上其處を辭去し、もう暗くなつた山中の急な小道を登り二十分、上日向の大村氏重方へ泊る事とした。

その宵は佳い月の夜であつた。寸又川の溪谷は深く脚下に沈み、繞らす連峰の山の姿ははつきりと夜の空に浮んでゐる。

宿では質朴乍ら懇切なもてなしを受け、寸又川の鯿の燻製などをもつて夕食の膳を賑はして呉れた。

寸
又
川

寸 又 川

上 寸 又 川

寸又川の奥深い山村、東側の朝の気分は、この上なくすがくしい。

さきに、逆河内を溯つてロクロバ峠を超え、戸井に歸る人夫と別れ、撮影などをして午前七時半、上日向の大村方を出立した。

日向山の山腹を捲いた山道を行くに、十五分以下日向の東側分教場へ出た。

寸又溪谷の入り口に散在する人家、上日向が二戸、オサキが二戸、上閑藏が二戸、下閑藏が一戸の兒女計十二名（數年前に訪れた時は僅かに六名だつた）の爲めに、義務教育を授ける所である。此處は、山のオサキ、即ち山脚の突端に位してゐるので、その

眺望は甚だ恵まれてゐる。

新緑の色彩濃厚な寸又溪谷の奥に、青黒く潜在する不動ヶ岳は最も偉容があり、それに鎌崩、丸盆、奥黒法師が並んで屹ち、前黒法師は左翼に最も近く迫つてゐる。

朝陽に映えるこれら連峰の美しさ。それに投ける愛着の降はひとしほ深く何時までも索きつけられてゐた。

慈悲心鳥が啼く。

八時四十五分、上閑藏に着く。

此處は上日向など、等しく、急斜をなす山腹を拓いて、二戸の人家が在る。山案内をする望月勘一郎方は下の家で、その他に御料局の出張所があつた。

三十分休み、上閑藏から閑藏澤とその支流の黒ガレ澤とを渡つて、高い山腹から寸又川の流れに降り

をつゞける。濃緑りの色鮮やかな潤葉樹林の中を、道は迂餘曲折してゐる。四キロ程で、栗山澤の合流點附近に於て寸又川を渡つた。このあたりの寸又流域は、兩岸が斷崖をなしてゐて、そのまゝ、溯行する事は不可能であつた。

凡そ寸又川の流域の悪場を擧げると、到る處に存在するが、中にも、栗山澤、閑藏澤、平野澤の注流點前後、大地の釣橋より逆河内の上まで、シヨノ澤下の餓鬼屋、小根澤と大根澤との中間附近、赤澤の下の釜、リンチヨウ澤の瀧を懸けてゐるサツサの瀬戸などである。そして支流栗代川の鶴の天の瀧、トイノキ瀬戸なども無比の悪場である。栗山澤の高い釣橋から山腹を湯山のオサキ坂に出る。約二キロもあらう。十時五十分。

此處を登れば四十分にして湯山の部落に達し、三十分末滿で新築された山間の湯場湯山温泉に到る。大間川の溪澗へは、林道が奥の廣河原まで通じてゐた。

オサキ坂の釣橋で大間川を渡れば、第二富士水電

寸又川流域の木材は主産物の首位を占めてゐる。現今はすべて御料に編入されてゐるが、その伐採の歴史は可成り古いものがある。

千頭山の伐採

一、慶長十九年、始めて寸又川に於て駿府御本丸御用木を所の百姓に被仰付、槻、柏、檜、二萬五千本を出す。木印丸十。

一、元和四年、檜、槻を寸又川板澤川内（サカサ河内出合）にて杣取し、元和九年、檜、槻、御用木、大内手廻り（大間部落民有林）にて木數六千本を所の百姓杣取り出し方共に仕る。木印丸善。

一、寛永十年、伊勢屋作兵衛御用木杣取り、黒帽子、日向澤、上西川、西河内桶造河内（閑藏澤入）の五ヶ所にて川流し木數五萬本。

一、寛永十三年、淺間神社御伐木、人數千百餘人をして、槻、柏、檜、木數六萬本餘、木印は「淺間御用木」三ヶ年に出し、同十六年、江戸

寸又川發電所の立派な二間幅通路となつてゐた。

それは、大間川の取入口を黒松尾根附近に求めてオサキ坂に發電所を設け、本流は東側オサキの附近より取入れて栗山澤の附近に落差を作る設計であつて、爲めに寸又川と大間川は各々その右岸を取入口まで、彼様な立派な道路を開鑿するやうになつたのである。

斯くして、南アルプス南邊の山間に、秘奥の極僻地として素朴に營まれてゐた小さな山村は、恰も野呂川流域の新倉が水電の都となつたやうに、全く面目を一新されてしまふ機運に置かれてあつた。

此處の住民が専ら山林に依つて生活し、乏しい山島にはアワ、キビ、ムギ、ヒエ、ソバ、甘藷、それから茶樹などを栽培し、野猪や野兎の害を防ぐ爲めに、島の周圍に木柵を拵らへてゐるのを見受けるのなど、如何にも僻遠の原始らしさである。

山林や溪流にはシイタケやワサビを栽培する。モチを採集する事なども、生活資料としては他にない珍らしい仕事である。

本丸伐木、檜、梅、木數一萬二千本餘、廣河原、下西河内、日向澤山にて二ヶ年に出す。

一、正保元年、六江橋（六郷橋か？）伐木出し、木數五千本餘。

一、正保三年、江戸御用木商等人夫九百人、木數三萬餘本、寸又釜口まで切込、小川は草檜、諸ノ澤、黒帽子、黒松澤、日向澤山にて杣取り兩三ヶ年に出す。

一、萬治元年、江戸本丸御用材一萬二千餘本を二ヶ年に出す。本寸又檜澤、釜ノ口、桶造河内、板澤河内、上西河内、下西河内、大間川の内廣河原、青薙、黒松澤、栗代山、木羽澤、泉山の内、熊手山（深澤外五御料地の内）にて杣取す。

とあつて、大井川の山林伐採よりは、その記録は一層古いのである。傳説に依れば、元祿年間、江戸の紀之國屋文左衛門や駿府（静岡）の松木屋郷藏等が千頭山の幕府御用木として伐採せる木材は、大井川の流域に溢れて、駿河灣の川口にまで到つたと云ふ事である。

近年にあつても寸又川入りの山林伐採の數量は、一ヶ年六萬石に達した事が珍らしくない。

現今、寸又川の溪谷は水電が大規模に行はれてゐる。即ち第二富士水電の東側オサキから取入れたものと、大間川の黒松屋根邊より取入れた水量を、湯山のオサキに落し、更にそれを赤石ホツの東面に落す二つの發電設置は目下進行中で、東京電燈が、島和合から大井川本流を取入れ、關ノ澤や栗代川をも併せて、すべて暗渠により大間附近の寸又川（熊平澤合流點の南）に落す設計も着々進んでゐる。

その工作完成の曉は、此の溪流の水産として有名な鮎は大いにそこなはれるであらうが、上流に棲息するやまめ、いわなの漁獲には左程の影響はないものと認める。柴澤は時にいわなの多いので知られてゐる。

かくして、大間は寸又水電の本據として異常な發展の過程にある。

口碑に依れば、往時信濃俣河内の矢平に在つた人家が、四軒は田氏、四軒は大間に移住したと云ひ、

むやうになつた。

下接 岨 峽

溪澗は、奥泉以奥から俄に峽流をなして、井川村島和合に到るまで、兩岸は可成り急峻である。

奥泉の村端れに在る廢流路の池跡、赤石辻の南の小凹地、平ン田への沿道三ツ石附近に現れてゐる水蝕の大石、更に、上流島和合に及ぶ間に見る幾多の廢流路等が、現在の川底よりも約四〇乃至八〇メートルの高所に存在してゐる事は、尠からぬ興味である。

右岸は西三ツ峰（平ン田山、一二九三・六m）の山腹から左岸は谷畑山（大澤山、軍代、一代、一一一五・七m）にかけて潤葉樹の色濃く、溪の濁流は深く脚下を洗つてゐる。

此のあたりは、部落は河流の蛇行灣曲に依つて、駿遠の二州と、榛原、志太、安倍の三郡に股がり、村も上川根、東川根、井川村が各甚だしく入り組ん

明治の晩年にあつても、大間が十八戸、湯山が三戸と記されてゐるが、今日は既に五十戸を越えるであらう。

播鉢の底のやうな山間の凹地で、物賣る店が數軒旅舎に山文と稱する小宿がある。

オサキ坂からトンネルをくゞつて、新しい二間幅の道路を三十分で大間に着き、大日ホツのトンネルを過ぎると、千頭に通じてゐる約十八キロの立派な道と岐れ、大井川の沿岸に移る可く急な小徑を降つて、寸又川本流の細い釣橋を渡り、大井寸又兩溪澗の分水嶺である百枚畑（七一五・九m）の尾根に出て、井川沿岸の通路に當る赤石辻に出た。十二時十五分。

赤石辻は、千頭を北へ向つて、大井川沿ひの通路が奥泉から此處に登り、そして再び大井川と寸又川との兩溪谷へ分岐する三叉路の辻である。ラジオリヤ岩が現れてゐるので、赤石辻と呼ぶ。東面に天狗名山や七ツ峰を眺め乍ら約一時間ほど休憩。午後一時二十分。かくして今度は大井川右岸の里道を進

でゐる。

三時半、平ン田の小平地と乏しい人家と、それを取り巻く茶圃の間を辿り、七ツ峰を右手に眺め、大間を下底に覗き、少しく行くと道の左手に立つ素的に大きな縦の樹下に不動堂が祀られてあり、堂の裏には不動ノ瀧が約三丈ばかりの高さに落ちてゐた。道路の下方にも亦瀧が懸つてゐる。

午後四時、長島は四十戸、駿遠地方の山村に見る杉皮で葺いた家屋の農家が、平な河段丘にあつて、上川根村第三小學校も設けられてゐる。

細い釣橋で、遠州から駿河の東川根村梅地に聯絡する。

梅地はやゝ傾斜した土地で、耕地は狭いが二十三戸を算し、大井川上流の沿岸に散在する、いづれも人氣配の尠ない、恰も死のやうな閑寂な小里落の内、千頭、小長井、並びに井川の里のいづれへも約小半日の行程をもつて、その中繼所たるの位置を占めてゐる。

旅舎に佐藤館と云ふのが在り、金坑の廢趾を崇め

たらしい、郷社の銚鈴石神社と云ふのも祀られてゐる。

銚鈴石神社

神靈は石許理度賣命であると云ふが、神社の裏には鑛山の廢趾が在つて、それは此の近郷が往古甲州の武田信玄の勢力範圍であつた頃、金坑を發掘したものだと言はれてゐる。

其の後、暫らくしてこの鑛山には、廢坑となるべき原因をなした不思議の出來事が三度續いた。

初めは不意に坑道の大岩盤が墜落して、坑内の坑夫全部を生埋めにしてしまつたのである。

次ぎには、梅地の一人の老婆が幼い孫を、大井川の河畔で子守をしながら、鑛山の撰鑛された土塊の間に、自然金の微粒を搜してゐると、サツと何者かが背後をかすめたかと思ふと、一瞬にして彼の幼兒は其のまゝ何處ともなく姿を没してしまつたと云ふ。

最後には、村人の或者達が協議し、惜しくも廢坑たらんとしてゐるそれを復活しようとして手を染めると、坑道内にも恐ろしい大蛇が數匹、のろ／＼とのた打ち廻つてゐた。

梅地は、昔京師の梅津大納言の一家が故あつて落人となり、此處に定住したのに始まると云ふ。三代目の人は安倍川の水源梅ヶ島へ移住して同地日影澤の金坑を發掘した。然し乍ら安倍峠を超えて武田信玄を尋ねんとした時、大城で殺戮されてしまつた。後その後嗣は築地彌九郎重房と改名して郷土に榮えた土地の者は語る。

午後四時過ぎ、梅地は佐藤館に泊る。大きな造りの家だが、井川の川狩人夫の泊る十一月頃でない限りは閑散なものである。

六月初旬の今は川根地方は一帶に製茶の最盛期。海岸の漁村などから此の山間にまでも、茶師に連れられた若い女達が入込んでゐて、茶圃は摘茶に多忙だつた。

本邦産出茶の約四割、海外輸出額の約九割をもつ静岡縣（昭和五年頃の産出額千三百萬圓）に於ける川根銘茶の本場だからである。

静岡地方では、山奥の萎びた旅舎などでも、小さな茶筒を盆に出して客に奨めることが多い。大井川上流の山小屋に於てさへも、静岡の人夫達は、平常各々自慢の茶筒を持参してゐて賞味する。

淡泊な味と香氣とは何としても緑茶の誇り、そして營養の上からは、保健長壽の素として知られてゐる。

翌日、天候は幸ひに晴れが續いた。梅地を午前七時に出發する。

茶圃の間から背後の小さなツドノ坂の道で、村家を瞰下し乍ら登り詰めると、七ツ峰から北に引く山稜の一端を超えて海久保に降る。

この降りて、北を眺めると、支溪關澤川の奥を擁し、大無間山を中に、右、狼平山、小無間山、左、鶴の天山（カザイラズ山、一九九〇・三m）が、針葉樹深く黒々として聳えてゐる。

路傍を飾る新緑の内には、ミツバツ、ジの紫花が美しく、鶯が頻りに鳴いてゐる。

梅久保澤を渡れば梅久保の三戸の人家が小淋しく存在する。此處から對岸の井川村閑藏へ通ずる道が岐れてゐるが、梅地から暫らく道と離れた溪谷は、その間人を寄せ付けぬ險惡な峽流をなして、地名も四人の川狩人夫が立往生をしたと云ふ四人立、青い頭巾を冠つた組頭の慘死した青頭巾、おちん落し、青崩、關ノ澤落しなどと稱した難所を秘めてゐる。

大井川の兩岸に繁芽する新緑の色鮮やかな潤葉樹の間に懸け渡されてゐる、高く細長い簡單な釣橋の風趣は、正にこの溪谷に於ける勝景の大なるものであつた。

志太郡東川根村の海久保から閑藏へ、そして又栗尾へと蛇行する本流に、細長い一本の釣橋は、目もくらむやうな高さをもつて、虹の如く懸つてゐる。

安倍郡井川村の閑藏は僅かに十戸、それでも井川村小學校の分教場があつて、七、八名の生徒を收容する。村家はU字形に蛇行する川岸の半島上に在つ

て、其處は河段丘と、それを巻くやゝ低い廢河川より構成されてゐることは、この溪谷が若返つて、盛んに水蝕が行はれてゐる點を如實に物語るものである。

大井川流域に於ける井川村島和合から、東川根村奥泉に到る約二十キロの間は、現在の河底よりも、甚だ高所に多くの廢流路が存し、井川、島和合、閑藏等に二段、或は三段の河段丘を見ることに徴すれば、此の流路に地殻の隆起作用が行はれて、河蝕はいよゝ／＼深く刻まれたもの、即ち、先行河 Ancecect River であると考へられぬ。

土地の者は、古來瀬早と稱し、近來接岨峽の宛字をして、大井川唯一の名勝地區に指定せんとしてゐる。但し、黝灰色の古生層を深く穿つその峽谷は通路なく、又容易に人を寄せ付けず、道は高く山腹に拓かれてゐる故、恰も布巾に包まれた玉を眺める感がないでもない。

井川村閑藏の里から東川根村栗尾への高い釣橋に立つて上流を窺ふと、右へ曲流するあたりの左手に

彼女は平常よく唄ひ、そしてよく働いたが、又かうして慕ひ寄る幾多の騎士に對しても心置きなく Decameron を發揮してゐた。

五月雨のそぼ降る或る日の夕景である。彼女は梅地のボンナミを袖にして、井川の彼れに會つての歸るさ。

今は廢道となつた大井川右岸の大崩壊を横切らんとして、懸けられた棧道に足を踏むと、俄然橋木は崩れて眞さかさま、河流に墜ちて哀れにも其の儘あえなくなつてしまつた。

橋木の崩れたのは、雨で地盤の弛んだ爲めだとも、又戀の葛藤に原因してゐるとも云ふ。

それからと云ふものは、怨恨は深いお花崩れを五月雨の降る日に通行すれば、哀しい彼女の小唄の聲が、川瀬の音に雜つてかすかに、何處からともなく聞えて來ると云ふ。

六七七mの山脚を捲いて、七ツ峰から出る栗尾澤の合流點の上流に源兵衛落しの難所を望む。昔川狩

お花崩れと呼ぶ大きな崩崖が見える。

お花

お花は、鄙には珍らしく縹緞良しの娘であつた。併しその縹緞よりも更に彼女を引き立たしたむるものは、その美しい聲であつたと云ふ。

あの小作りなやさしい身體の何處から、あゝした美音が生れるのだらうと、村の人々は噂し合つた。

麥刈りに、茶摘みに、山の畠で彼女の唄の聲を聴く事は、例へ村の若い衆でなくても、此の上なく愉しい思ひに誘はれる。

——閑藏お花女が來ないなんて云へば、川根七村眞の闇——など、云ふ小唄が梅地の方面では唄はれた位である。

彼女の可憐な姿と聲は、勢ひ村家の若い男の強い憧憬の種となつた。

そして遠近を問はず、そうした男からは誘惑の手は降るやうに來る。

の人夫頭源兵衛が、此處の岩頭に立つて流れ來る木材をばづしてゐた時、誤つてアツト云ふ間に奔騰する激流へ吸ひ込まれてしまつた所である。河中には岩礁が多く、爲めに舟行は、上流は井川まで、下流は梅地よりやうやく許されてゐる。

本道は閑藏に到らずして、其のまゝ左岸の高所を里落を縫つて海久保から、栗尾澤の公德橋を渡つて栗尾に通じ、栗樹の多い二戸の乏しい里にも、茶を摘む人が三、四人働いてゐる。九時五分、鷄鳴さへ、此處に來ては何となく物珍らしく聞える。

杉檜の植林が處々に多い。一寸した尾根を超えて金東(一三〇九・七m)から出る靖雍澤を渡り、遙るかの下に深く沈む峽流の水勢の轟きを耳にして、楢の林や、焼畑を過ぎる。

青葉若葉の山路に不圖、ほととぎすの聲がする。高い道から樹梢の間に流れを瞰下すれば、峽谷は迂餘曲折してゐて、川水はいづれの方角に流動するものやら一寸解らないやうに見へる。山腹のひだを出入する山道は、尾根の切開きをす

ぎると、上手に島和合の里を望んで、漸時大井川の河畔に降り、前面の對岸に注ぐ西山澤に七ツ瀧の懸るを眺める。樹影に窺く七段の瀧は高さ百メートルもあるであらうか。井川の一名勝であらう。

十時、急な降路から、釣橋の接岨橋を渡つて山の鼻を捲くと島和合の里落である。峽流は俄かに展げて廣い積を有し、それは井川から田代邊にまで及んでゐる。

水色は著しく藍青さを加へ、接岨峽の下部である奥泉あたりの灰色の濁水と對比すれば、其處に行はれてゐる河蝕の態様を明らかに偲ぶ事が出来る。

島和合は十七戸、低平な山の根に在つて、茶圃と麥畑の間を右手に執れば、大井川畔の上等な新道が通じてゐた。

中山澤を渡ると、對岸に懸る釣橋は、三ツ峰から出るスネ澤の左尾根を、安倍川流域の玉川村に到る通路である。

積は潤く、左方に井川の里落の一部が現れてくる。耕地の間に散在する人家には、端午の節句であると

ゐる。主人の麥竹君は、實子を持たぬ孤獨な老人であるが、東海紙料山林部の猪瀬主任の指導の下に、活潑な活動を計劃されてゐる事は、南アルプス開發の爲め、如何にも喜ばしい事である。

井川釣橋を渡つて大日峠に登る。

十五分で水場に着き、晝食をとつた。空は佳く晴れて暑苦しい。三十五分休憩して亦登る。上落合井川間の物資は全て人夫の背に依つて運搬されてゐるが、その歸りの人夫等と同道して四方山の話聞く。焼畑や潤葉林のほつりを辿るに、鶯や頬白の歌が頻りである。

峠上に近く、落葉松の植林のあたりで南アルプスの雄峰、北から、東、荒川、赤石、聖、上河内、茶臼、それから大無間山の聯亘を觀望する。幽玄な残雪多き山の姿の魅惑。

午後一時、峠上に着き、大日堂を右に見て降りにかゝる。十分で水呑茶屋。暫時休憩して、十六番の休所はそのまま、潤葉樹と杉檜の若木の山腹を一氣に口坂本に降つた。二時十分。

見えて數本の鯉轆りが立つてゐる。

村家を縫つて井川の大釣橋々畔に着く。十一時。井川は駿河安倍郡に屬し、大井川上流に於ける里落の中心地で、中流の千頭、小長井に比敵し、右岸の大きな二段の河段丘の上に、約二百戸の聚落をなしてゐる。

彼様な顯著なテレースは、島和合や、大島、田代等の各地に於ても見る事が出来る。

近時、接岨峽の入門、西山澤の邊に於て、大井川の本流を堰止め、貯水は田代にも及ぶダムを作り、之を寸又川の大間附近に導いて、約十一萬キロワットの發電計劃が東京電燈の手に劃策されてゐるが、これは、往古或る時代の地形的状態は、河流を還元するものであると考へる。

井川村の交通と物資の運搬は、大井川流域の山道に依らず、専ら大日峠を越えてゐる。

峠への登り口の釣橋々畔に在る旅舎橋本屋は、奥上流の樵島と二軒小屋に、支店を設けて、特に、南アルプスの登山者に對しては、密接な關係を結んで

大井川から安倍川の支流、中河内川の流域となつて、口坂本の端れ、旅舎口本屋を後に、溪澗の小廣い道を進めば、君岳澤や白井澤の合流點や、岳澤路傍に在る人家を経て朽木澤の注流點を過ぎ、井川村から玉川村に入つて、井戸澤を渡り上落合に到る。三時十分。

先きを急ぐまゝに中河内川の流域を下落合へ、そしてバスを利用して牛妻へ、更に、安倍鐵道で静岡へと向つて行つたのである。

別後

今、再びこの峠路を辿つてゐる彼れは、その時の追憶を懐しく呼び覺まして、尠からぬ焦燥の思ひにひたされた。

殊によると、不圖遇ふやうな事があるかも知れないぞ——そんな氣儘な想像にかられては、氣恥かしくも心がときめく。

彼れは先き程、この峠を通ふ擔荷夫から、それとはなしに、過ぎし日に、あの山の小屋で遇

つた彼女の消息を窺ひ知つたのである。

そして「今日あたりは、茶摘みの手傳ひに、茶圃へ出てゐるに違ひない」とまで聞かされては、此の場合どうしても無關心で過ごしてしまふ事が、彼れの歸らぬ生命にとつて、堪えられない淋しさであり、そして、それは矢張り貴い人生の一つのながれであるやうに考へられてならなかつた。

あの時の彼女のほの白い顔が、彼れの胸奥には、今もはつきりと映つてくる。それから……そして……

そして彼女のあの眼の裡に語られた若き生命のひらめきと、無限な情けのうるほひとは、彼れの心に何時までも決して忘れ得ぬ強い魅惑と哀しい悩みとをもたらしたものだつた。

ルユツクサツクをゆり上げて路傍の石に腰を下した彼れは、ホツと微かな吐息をもらした。

其處は通路の下方が緩勾配をなして、整然とした茶圃を形成し、路よりはやゝ離れてゐる下

方に一段と大きな茶圃があつて、丁度其處では三人の若い女達が茶を摘んでゐるのである。そして茶摘唄がかすかに漏れてくる。

あの内の一人は、確かにいつぞやの彼女であるらしい……そう思つて彼れは、一人ぢつと耳を傾けた。

茲に唄聲を聞く人ありとも知らず彼女等は、誰れに遠慮もなさそうに、極めて奔放に、自由に興の趣くまゝに唄ひ續けてゐるらしい。

「想ふまい……單に不測の機會が作る運命の戯れに過ぎないのだ……それは路傍につまづく石ではないか」

彼れはそう自己反省を取り戻すと、自分の意外にやさしくなつてゐる弱い心をいたわり乍ら勢ひよく、但し歸らぬ日のどうしようもない大きな壓迫と魅力に打ちひしがれた重い氣分と足取りを引摺つて、豫定の行程を果すべく其の儘歩みを運んで行つた……。

冬の大井川

冬の大井川

冬の大井川上流を訪れる山旅は、一月の十日に始まる。白鳳會の人夫依田を加へて同行三名。携帶品は極めて簡素を心懸けたが、それでも大體左の如き品々が數へ擧げられる。

- スキー (フィットフェルト式の着脱に便利なもの)
- 登高用アザラシの皮
- リュックサック、シュタイグ・アイゼン
- ピッケル、ザイル(三十メートル)一本
- 飯盒二個、コップ一個
- テルモス二個、メタとセローズ
- スキー用コテとワックス、靴用スキ油
- ランタン、懐中電燈、懐爐、磁石
- 藥品 胃腸、解熱、外傷、包帯、ガーゼ、清涼劑
- 實彈銃 彈藥(狩獵免許)、日用小物品

防寒具

- 毛布二枚續き一枚、スエータア三枚
 - 毛製ズボン下三枚、靴下三枚
 - 毛手袋三枚、スキー帽
 - 雪眼鏡、ラシヤ巻ゲートル
 - 食料品としては――
 - 白米三升(樺島、或は二軒小屋補給の豫定)
 - 味噌二百匁、豚肉二百匁、特に脂肪肉
 - パン二斤、ビスケット百匁
 - ウイスキー二つ、コナカツヲ
 - コナミルク、砂糖、鹽、キヤラメル等。
- 常に山中に於ては粗食に慣れてゐる故、大げさな道具だての必要もなく、荷は比較的輕量で濟んだ。たゞ愛玩のアルペンスキーが、主人のきやしやな肩に乗せられて山へ入り、約一週日の間、山奥の積

雪の上を主人を乗せて滑り歩き、また再び彼れが主人の細い肩にしがみ付いて山から出て来たのは、取り止めもない愛嬌であつた。

一 雨畑まで

一月十日の早朝、寝過ごしてはいけないと懸念したので、前夜は大體の身仕度をする、其の儘居間の炬燵の中へもぐり込んで夜の明けるのを待つた。

うたゝねから不圖眼を醒ませば、時計の針はチクタクと時を刻んでゐるが、戸外はまだ暗く凍つてゐるらしい。静かだ。が、其の時突然、裏の鶏舎から、ときを作る雄鶏の鳴聲が聞えた。それは妙に律呂の正しく整はない、尻切れのやうな、かすれた聲だ。聞く者は誰れもそれを「何んてまづい鳴聲だらう」と云ふであらう。併し、それは雛鶏の初鳴の聲だつた。

昨年六月、名古屋の養鶏園から態々取り寄せた百羽のアトキンソン初生雛の内、無事に成長した彼

等が、田園生活者の家庭の一員に加はつて、今や物的生活への名乗りの一聲を擧げた所である。

汽車から積み降されて、箱の中でびよ／＼と叫んだ彼れらは、可愛い雛の一つであつた。今始めて聞かせる鶏鳴は未だ心元ないものではあるが、それが聽て世に正しく呼びかける時、彼れは鶏群の間を昂然と王者の如く闊歩する事であらう。

午前四時、氷のやうな夜風をきつて、居宅を後に停車場へと向ふ。

甲府平原はやうやく明け初めて、日本南アルプス一帯の雪の連峰はうす赤く輝いて来た。美しい山國の朝、幸福のモルゲンロート。

午前九時、甲府驛着。直ちに自動車をかつて猷澤町に向ふ。此處で乗り換へ、更に富士川の右岸沿道を、飯富まで走らせた。

途中、呼平の先きの切通し邊で、山から街道へ降りて来た一匹の野兎を、小犬のやうに自動車で追つ駈けたのは、思ひも寄らぬ餘興であつた。

飯富へ十一時着。晝食を済まして同四十分此處を

出かける。大釣橋から右手に早川左岸を辿る。富士身延鐵道、波高島驛から此の大釣橋まで約一里。釣橋に近く、トロロイ馬車の便が新倉まで通つてゐたが、それには乗らなかつた。

小原島、樽坪發電所、羽鹿島からトンネルをくゞつて七面山下より流出する春木川を過ぎ、雨畑川に懸る大島の橋を渡つて、午後二時二十分、大島に着き、其處から早川の沿道と岐れ、雨畑川の溪に拓かれた新道を進めば、四時半にはもう雨畑の村家へ達してゐた。

登山團體の赤心會（望月直胤）を訪ね、次いで鶴屋、大内仁市方へ肩の荷を卸して休む。此の家は雨畑に於ける旅舎の一つで、質朴ではあるが懇篤にもてなし、その安價（一泊辨當付の金七拾錢）には一寸驚かされた。山村に入れば今時でも、どうかするとかうした非世間的な朴訥な旅宿に遇ふ事がある。

家の前の庭の端には、竹樋より落ちる清水が四角な水槽に溢れ、小石雜りのか細い村道を隔て、肥料場、便所、風呂場を兼ねた板葺の一棟が建つてゐ

る。宿の亭主がそ／＼と、五衛門風呂に火を焚きつけた時、白濁の煙りがもくもくと、裏面を觀せてゐる七面山の山背より高く尾を引いた。

二 西澤峠

穏やかな朝だ。午前五時起床、気温はCの零度。午前七時に出發、板葺に石を乗せた屋根の、峽間に沈む雨畑の村家を後に、急な小徑を西面の山腹へ攀ぢ登つてゆく。

蒼い氷柱を懸けてゐる、不動瀧を、左方に瞰下すると、直ぐ西澤峠の本道へ出た。三十分。それは稲又谷の北面した山腹をうね／＼と大井川へ超える通路である。上下や凸凹のない樂な道だ。

見渡す四圍の山々には、白い粉を振つたやうに雪が積り、針葉樹の梢にも氷雪が懸つてゐたが、道沿ひには未だ案外雪が無く、山の東面にあたる所々へ白く残つてゐる所もあつたが、大體、南或は西に當る山腹には雪を見ず、つひに兵部澤までは、スキー

を肩から卸す事が出来なかつた。
九時過ぎ、稻又谷の谿底に一、二軒稻又の人家を眺める。

有名な雨畑硯の原石は、此處から産出され、また高貴な褐色の硯石は、それより約半里の奥に在る室草里に産し、いづれも赤間關以上の好評を博してゐるが、現今の産額は極めて少い。その他、奥澤や遠澤の金鑛、長畑の石綿、稻又谷の蠟石等山間に於ける天然の遺物を擧げて數へる事が出来る。

南に望む雨畑川の水源は、小谿が繁く入り組み、かへりみる七面山の山麓は、頂稜の樹立まではつきりと刻んで、雨畑より約四時間ほどの山道を、その背稜へ印し、また、辿り行く稻又谿の奥は、バクチ平(二二二四m)、八汐崩(一九二〇・三三m)、青枯山(二二九八・八m)、青薙山、參亦山(二四〇六・三三m)の山稜がめぐつてゐる。大きな兵部澤の谿ふところへ入つて行つたのは十一時四十分。

あまり雪の状態は良くなかつたが、始めてスキーを着けた。但し此處で山崩れの爲めに道の全く壞れ

てゐる所が三ヶ所程あつて、スキーを着脱したり、足場を切つたりして其處をすぎる。本谿の奥は雪が白い。気温C二度、正午流れの邊で晝食をとる。

兵部澤を出て、又望月澤に入る。水流の落ちる凍つた中に、大きなはこねさんしやうをを一匹捕へてルユツクサツクの中に納めた。

漸く高度の増すに連れて、山腹の樹木も潤葉から針葉樹林に變り、積雪量も加つて來た。

午後一時五十分、最後の支流、西澤の谿へ入る。二時四十分、氷結した谿流の際に、戸を堅く閉じた二棟の小屋が在る。東海紙料會社の中繼所である。うす暗い樹立の下は、三尺餘の積雪だ。

此處からいよいよ峠上へ急な登りを始めねばならぬ。スキーへ登行用アザランの皮を着けた。

空は何時かドンヨリと曇つて風なく、此の登りが易しくなかつた。三尺からの雪では、どうしても人夫がスキーに續いて來る事が出来ない。夕暗迫る小淋しい雪の峠路に續くポータを待合せつゝ、夏季は三十分の登路が約三時間程を要し、五時半、雪明

りの暗を迎へて、やうやく西澤峠の上に着いた。

此處は、北東に布引山(二五八三・七m)、南微西は參亦山(二四〇五・三三m)を連亘する鞍部(二二〇〇・〇m)に位して、白峰山脈の横斷路中、最も高い標高を有し、北アルプスの徳本峠に比較す可きものであるが、展景の點に到つても亦、彼れが梓川の谿を隔て、穂高連峰の雄渾に直面してゐるのに對しこれは、大井川の深谿を俯瞰して赤石群嶺の偉容に接してゐる。

通路は可成り整つてゐるが、紙料會社が毎年初夏の頃修理を加へてから、晩秋の候までの外は、往々各所の山腹に崩壊を起して、道路を痛める事が少なくないので相當に危険を伴ひ、冬季の如きは、未だ會つて踏査した人のある話を聞かないとは、雨畑に於ける一般の説であつた。

峠路三里の登降中、雪崩の形跡は殆んど見なかつたが、山腹の土砂と雪の崩壊箇所は頗る多く、大井川面に於て殊に甚しかつた。

布引山は、南面に布引の大崩が在つて、別名千挺

木とも稱されてゐる。それは、昔此の山中に天然の杉の原木があつて伐採し、それから角材千挺歩を採つたと云ふのが山名の起りである。この切株の一端が、現在雨畑の望月六太郎方に保存されてゐると云ふ。三尺峠の地名の起因に似てゐた。

峠上へ出ると、大井川方面より凜冽な颯風が粉雪を強く吹きつけて、唯々天地は全く晦冥し、夜のとばりと共に、遺憾なく冬の暴威をたくましくしてゐる。眞つ白く吹き溜つた雪の下り路を、十分にシヨノ澤の小屋へ到達する。

南の窓から中へ飛び込むと、小屋は四間に八間もあらうか。紙料會社の物資の中繼所であつて、安全な山の宿營地である。

其の夜は終始、戸外は大荒れに荒れ狂つたが、気温はさして低下せず、燃料も小屋の内に貯藏されてあつたので、割合に暖く休眠する事の出來たのは何より幸であつた。

西澤峠に於ける積雪の状態は、二月より三月下旬にかけて最も多く、約四、五尺に達することは常で

ある。

四月下旬より雪は著しく消え、五月中旬頃となれば峠の小屋附近には全く残雪を認めない様になり、東海紙料會社では、四月末より人夫が入つて先づ道路を修理したり小屋を整へたり、五月になつて物資の運搬を始めるのである。

今後、伐採事務所が、樺島から二軒小屋へ移つても、今までの如く毎年修理されて、登山路としての重要な使命に任じ得るかどうか心もとなく思ふ。切に赤心會の活動を期待したい。

峠の様子を調べる爲め、四月二十日頃に、雨畑より人夫の越えた事は珍らしくないが、年に依つては其の頃積雪なほ四、五尺を下らない事もあると云ふのである。

三 大井川へ

朝の内は、屋外はまだ荒れ狂つてゐた。気温はCの零下四度。伐採跡の粗雑に立つ樹々に、樹氷が眞

白くこびりついてゐる。午前六時半頃より漸次明るくなつた。

薄濁りの空はやがて晴れてきた。仕度もそこ／＼に、十時、シヨノ澤の小屋を出立する。

布引山から西へ派出された山脚の、シヨノ澤に南面した山腹を捲いて行く。雪は多いが、道は判明しない程ではない。傾斜は大凡五度から十五度位。スキーにはワックスを塗らない。幅の廣くない曲折激しく、懸崖に沿ふた道であるから、急速な滑走は駄目で、それに道の崩れ落ちてゐる所が非常に多い。

高さ數千丈の崩壊に行き當つては、先づスキーを脱して、靴にアイゼンを着け、ピッケルを振るつてステツプを切る。かうした所が大井川畔に到るまで十ヶ所もある。

十一時、上シヨノ澤の小さな釣橋を渡る。その谿は雪と氷で埋められてゐた。

道を横切る急な崩壊に出遇ふ。薙は、雪雜りの土砂が固く凍つてゐる。

先づ先きに渡つて注意してかへり見ると、後に續

肌を覆ふ積雪面が、すべ／＼と白く艶やかに光つてゐる。

降路は河畔へ出るまでは積雪量が格別に減ぜず、

山陰は常に三尺位は溜つてゐた。

北方に東岳と荒川岳の峰頭を望む様になると、道は山稜の黒松峠を超え、山の北斜面を降つてゐる。

午後二時半、そして又、山稜の一端、赤松峠へ出て再びシヨノ澤に面し、險惡な斷崖に沿つて再度山の北面に迂廻し、其のまゝ降りを續けて大井川の東岸に到つてゐる。

山稜邊から、脚下に、赤石澤合流點の釜ノ和田や流域の道路を瞰下し、鳥森山を眺め、連続する雪の山々の美しさに暫くは陶然とする。

雪道はやゝ急に降つて、カンバ澤を越えようと、すつと雪は少くなり、道は大井川左岸の少しく高所を殆んど平に通じてゐる。三時二十五分。

此處ではじめて、西澤峠の執拗な險路から遁がれることが出来た。樺島はもう近い。かう識つて、大分安易さの思ひに浸つて行くと、忽ち思ひも寄らぬ

くパートナアの金カンジキが次第に少しづゝ滑り出す。脚下は實に數千丈の谿底である。

はつと感じて、助けに行く爲め、其の上に横臥する倒木に縋つて近付かうとすれば、思はず靴はスリツプして、倒木にしがみ付いた儘、足は宙に吊り下つてしまふ。

止むなく倒木を傳はつて引返し、人夫にザイルを投げさせ、かくしてやうやく危機を除く事を得た所もあつた。

空は晴れたが、寒い風が吹く。山の南面は陽當り良く、粉雪から融けて濕雪となり、スキーは粘り着いて滑らない。

行く手には、大井川の谿谷を隔て、雪白に輝く赤石岳の素晴らしいサンミツトを始め、聖岳、上河内岳が剛壯に聳えてゐる。聖の山頂には、猛烈な雪煙が舞ひあがる。

十二時二十分、途中の山腹に在る壊れかけた伐採小屋へ寄つて晝食をとり、そして一時間休憩した。日向は気温C四度、日陰は三度。強い風が吹く。山

一つの難關に突き當つた。それは、幅十間程もある大きな崩壊が、深く切れ込んで道路を遮断し、薙の底は崩れた土砂が凍つてゐて、渡る事もどうする事も出来そうに見えなかつた。

やむを得ず、スキーを肩にして、苦しい勤務を続け、雪の斜面を逼り上り、薙の上部で横切らうとしたが、其處は意地悪く數條の薙に分岐して居て、雪雜りの土砂は凍結し、萬一の危難を顧慮する時は、無分別の決行は斷然慎まねばならなかつた。

依つて、徒勞の登路を降り、今度は、道を薙に沿ふて、大井川の河原へ降る事を試みた。それは案外に易しく、わけも無く、雪をまぢえ小石を敷いた河原に降り立つ事が出来た。

陽は暮れて、東の山の端から、丸い大きな月が覗く。そして茶色の淡い光りが、黒い流れを配した灰色の小石河原を無碍に染め、靜かな深山の夜氣は、只だ瀬の音のみを解かしてゐる。

河原を少しく溯ると、蛇行する流れに遮ぎられて其處は其の儘は進めなかつた。夏季に較べるとズツ

ト少ない水量ではあつたがそれでも一寸渡り掛けた人夫が足を踏み入れると、もう震え上る程寒冷な水は臍までも届く程である。依つて、右手に積から道への登路を詮鑿する。

幸ひ川狩人夫の歩む徑が、曲流する端の岩岸から通じてゐたので、間もなく西澤峠からの通路へ出る事が出来た。

崩壊の爲めに蹉跌して、大切な夕刻の二時間位を此處に徒費し、悪天候の爲めに出立の遅延した事と加へて、今日は樫島へ早目に着く可き筈の豫定は、こゝに美事にはづれてしまつた。

いま／＼しいが仕方がない。おかげで、空に凍つく大井川の灰白い月を飽かず眺めた。

路を急ぐ。倉澤を越えようと、伐採小屋がまだ壊れずに建つてゐたが、目も呉れずに前進する。スキーは肩から離れなかつた。

午後五時四十五分。大井川の東岸から西岸へ、やすでのやうな一枚板を渡した長い釣橋がかゝつてゐる。この釣橋を渡つて少しく登ると、鳥森山の東山

脚、川の西岸を通ずる樫島田代間の本道へ出た。月の光りは充分に明るく、幾曲りか、岸の斷崖に開かれた山道を、始めて雪の上に印されてゐる人の足跡を踏んで歩行を續けた。

山の端を巡ると、樫島が見える。小平地に、冬季は無人の建物が幾棟か並び、河原の奥に、燈火が一つ光つてゐる。

六時半、樫島へ入つて、あたり約一尺程の積雪に記されてゐる人の足跡を辿り、事務所の建物の間を出外れて、河原の端に建つ一軒屋、樫島の冬季番小屋へ着く。既知の妻君に迎へられて、太い流木の燃えてゐる暖かい圍爐裡の端に、心易く旅装をとるのであつた。

四 樫島の日

西澤峠の處女雪に、スキーのシュプールを印して冬季登山のレコードを作り、さらに南アルプスの巨豪東岳へ登らんとして、英氣を養ふ爲め、樫島に一

日滞在と決まれば、人家に寝て寒さも知らず氣樂に過ごす。

翌日の朝の床はなかなか離れられなかつた。そして午前七時にやうやく起きる。氣温はCの零下七度。朝食は、妻君が、味噌に雑じへて貯藏しておいた鹿の肉をすき焼きにして呉れた。

此處の主人は、三日前、獲つた男鹿を背負つて賣りに田代の里へ行つて、まだ歸つて來ないと云ふ。外に伐採人夫が老若共二人居て、彼等は晝間は山の仕事に従事し、夜は夜鳥（につかうむさび）などを撃つて、のんきに暮らしてゐる。

樫島の番小屋は、東海紙料會社より囑托されて、冬季間（十二月より四月まで）會社の事務所を始め多くの建物や倉庫の警戒に任じてゐるのである。

伐採人夫は、小屋番が請負つた地面の材積に對し採伐して自己の生活費を稼いでゐる。

老いた人夫は、齡ひ既に五十を超えてゐた。彼れは、人生の幾多の波を潜つて來た人らしい。そして手頼り無く、恵まれること無きその生活は、彼れを

して冬季に於いてさへ、かうして深山の人外境に寂しく沈倫させてゐるのである。
積雪に埋もれた山林は、さなきだに彼れの活動を拘束して、辛うじてその生計の道を得るのに過ぎないらしい。深山の秘境に、なほ且つ斯くの如く彼れが敗残の餘生を、見る事は、人をして心元なく限らない寂しさを抱かしめる。

冬の大井川上流は如實に社會遠離の幽境であり、人外秘境の別天地であつた。直接的には何等の社會的煩瑣や疾ひは無いのである。

冬期に於ける樺島の氣温は可成り低下することがあるらしい。適確な統計は、識る便宜を得なかつたが、最高攝氏八度から、最低は零下十五度、時によつては二十四度に達する場合もあると云ふ。

河流の水量は夏季に比して著しく減少し、奥西河内合流點以奥は、冬季もその徒渉は自由であるのが例である。そして寒氣の厳しい時は、流れは下底より漸次眞白く凍結し、水は河原に幅廣く溢れる様な事も、毎冬珍らしくはないと云ふ。

それはもとより、流動する爲めに氷の表面が凍らずして、却つて冷却されてゐる河底の岩礫に接する流動の比較的緩漫な水より速く凍結する自然の現象である。

樺島に於ける積雪期は十二月より翌年の三月下旬までとする。

二月下旬頃を積雪の極度とし、毎季に依つて相違はあるが、平均約六寸位の少量の冬もあり、又四、五尺に達し、一回の降雪量二尺六寸五分といふやうな事もあつた。

そして四月に入ると、溪谷の雪はやうやく消え去り、伐採人夫は上流指して入り込んで来る。道路は修理され、山小屋には炊煙が上り、溪澗の樹々は若々しい新緑に萌えて、山の鳥の歌が賑やかに聞えるやうになる。

朝食後、暫く事務所のある邊で、スキーを練習した他は、忠實なポーターが、大井川の清流をくんで沸かしてくれる風呂のできるまで、此處の小屋に備へられてあつた蓄音器に依り、静岡民謡などを聞いて

て、いさゝか山中の無聊をなぐさめた。

狐音頭

狐十七ヨウ千手の寺に ぼんぼん

今宵願明けもちの月

ほいのほいのほういほうい

もひとつおまけにほういほい

秋は白菊ヨウ豊年祭 ぼんぼん

どこの笛やら太鼓やら

ほいのほいのほういほうい

もひとつおまけにほういほい

太鼓またいこヨウ狐ヶ崎に ぼんぼん

あれは稻荷の鼓阪

ほいのほいのほういほうい

もひとつおまけにほういほい

聴て清冽な澄んだ風呂を浴びる。浴槽は、箱の底へトタン板を釜の代りに張つたもので、山中の住居によく見受ける風呂の様式である。

湯に飛び込んで、様子が妙であると感じた處、また敷板が入れてなかつたのは滑稽であつた。

それは如何にも、むさくるしい不器用な山小屋の風呂場である。然し乍ら、山の湯!! 若し、山中秘奥の僻地にあつて、極めて閑靜な又朴訥なこの山の湯を、幾分でも愛好する性格の者があつたならば、その人は必ず、此の大井川上流の無人境、樺島に於ける冬の番小屋の小さな箱風呂に、一種の強い愛着を覺えずにはおかぬであらう。

箱根、伊香保、那須等の山の湯の情調などとは全く隔絶し、それは南アルプス山中に湧く、あの原始的野趣横溢せる湯山温泉や、小瀬戸冷泉等と共に、如何にも清純な、閑雅な興趣を心ゆくまで満喫する事が出来るものである。

ふんだんに有る山の薪を持つて、大井川の清流を沸した風呂に、ゆつたりと浸り、遙かに東岳の峰頭に擧がる壯烈な雪煙りを想像してゐる。そのひと時は、確かに山の王者の誇りでなくして何であらう。天候は良く、氣温は割合に暖かく、樺島の一日は

惜しくも暮れんとする。
 夕景小屋を出て、再び赤石澤の頂稜へ駆け上り、
 むさぼるやうに、その奥に屹つ赤石の雪白に輝く
 山頂を眺めあかした。
 夕空に劃然と映える雪の赤石！ それは空間に創
 り出された、紺青と純白の最も崇高な山の藝術その
 ものであらねばならぬ。

五 蕨段の小屋へ

午前四時、少しく暗い内から起きて出発の仕度をする。気温はC零下四度。四、五日來割合に暖かな日が続くと云ふ話であつた。

六時四十分に、樵島の番小屋を立つた。二軒小屋への道を進むと、河流の右に迂曲する所で、本道への釣橋を渡らず、左手に小流れの蒼白く凍つた氷にピツケルを振るつてステップを切り、それを横切つて、西河内に懸かる釣橋を渡り、いよゝゝ、東岳から南微東の方角へ向つて派出されてゐる山稜、蕨段

(二〇七三・三m)の登路についた。

七時。登路には雪が一呎ほど積つてゐる。奥西河内の溪潤に高く東岳の雪峰が聳えて、朝陽は白々と輝いてゐる。

登るに連れて、顧みれば、大井川上流の溪谷に狭む山々は、北側面に殊に多くの雪を着けて、黒い木立と繩雜ぜに織られ、上河内岳の白塔と伊谷山(二四三八m)の黒塔がひときわいかつて屹つて見える。

八時五分、ハルキ峠の上に着く。此處から路は右手に降つて、東木賊の少しく北の河畔へ通じ、東岳の登山路は、左手になほ山稜を傳はつて、急な登りとなつてゐる。

横に枕木を置いて階段を拵らへてある所もある。夏の登路としては結構な山道である。

一五八六・四mの標高點の前からスキーをはく。勿論登行用のアザランは着けてあつた。雪量は漸次深度を増して、〇・五m位から一m位に達する。

雪質はやゝ軟雪の部類に屬してゐたが、スキーの登高には悪いコンディションではない。この山稜は

シヤクナギ、ツガ、シラベ、サウシカンバなどが密に生えて、登路は狭かつたが、勾配の度は極めてゆるやかであつて、スキー登山のコースとしては、他に比較されない程の容易さを感じた。

階段登りをする場所も四、五ヶ所はあつたが、短い間で何等の困難はない。天候は良く晴れて、陽光に反映する雪面は、只だ銀砂のやうに眼瞼を射る。汗はスキー帽の下から流れ落ちた。

登路の左手奥に、東岳と荒川岳の雪の山嶺が白々と映えて招く。

赤石岳も小赤石の北東側が、眞白く山巒を隈取つて聳えてゐる。

十時半頃より空は少しく曇る。気温六度。樹蔭の雪は薄いクラストをなしてゐる。

十一時、二〇七三・五m邊に近く、晝食をとる。これから先きは、スキーのない人夫の足は非常に遅延を來して、どうしても従いて來られなかつた。

蕨段の池を過ぎて、西蛇澤を右手に取り、下千枚澤の尾根にまで登ると、高度はずつと進んで、大井

川の谿流から、その四邊に遠く圍む山々まで眺望に事缺く筈はなかつたのであるが、口惜しくもこの時雪雲は陰慘に赤石の嶺から漲り亘つて空を掩ひ、加へて、粉雪は、嵐と共に物凄く西の山嶺あたりから襲つてきた。

全く雪に埋れた小淋しい山稜を、一人行きつ戻りつ、後に従ふポータ等を待つ。

かくして、ともかくも、約二五〇〇mの奥西河内支溪カンバ澤の水源に臨み、偃松と喬木の植物塚の邊に在る蕨段の登山小舎に避難したのは、夕景の午後五時を過ぎてゐた。

小舎は二間半の三間、粗雑な作りで、雪に埋まり内へは雪が吹き込んで溜つてゐる。その片隅を整頓して、一夜の宿營を張る。薪は積雪の中に生樹を伐り、水は雪を融解して炊爨に用ゐる。

吹雪の山上で、疲勞した身體をあつかひ乍ら、約一時間餘も此のつらい勤勞を續ける。

積雪に埋もれてゐる小舎の内に、零下八度の外氣の寒さを避けて、小さな焚火を守り、暖かいさゝや

かな夕食に元氣を出して、うつら／＼と一夜を明かす。
此の夜、何となく終夜心細い感じを否なむ事が出来なかつた。

六 東 岳

天候は回復した。只だ観るもの白皚々たる雪の世界である。樹立もすっかり雪の鎧を着て、純白の妖怪のやうに立つてゐる。

気温は昨夜と變りはなく、高温の變調さを思はせる。

朝食に手間取つて、小舎を出たのは午前八時であつた。

新しい紛雪の處女雪に、スキートのシユプールを印する緊張した快さ。

山稜に出ると、眺望は潤然と開けて、新雪に粧飾された南アルプスの山嶺や溪谷が、飽くまで活々とした新生面の銀光を一時に映發してゐる。秀麗と云

とを感じたのみにすぎない。

暫らくして、「おお、これは大いに歡喜すべき事だつた」と考へる。

そして右の脚を高く上げた。亂舞するつもりである。と、アイゼンの間に付いた紛雪がサラ／＼と落ちて、ふはつと煙のやうに舞ひ上つた。風が出てきたのである。

「さらば！」ぐるりと最後の一瞥を残して、きままりよく、満溢の彼方に山頂を降り始めた。足はどしどしと樂に進む。山上の強風に蹴立てる紛雪は煙りと舞ふ。

千枚澤邊に小さく黒く見えてゐた人夫達の處へ、デポットからスキーを着けて、シユテムフアーレンで千枚澤まで、それからこの山頂を越えて、ブルーグフアーレン、或はボーゲンを雜ぢえ乍ら降る。岩骨の現はれた岩崖に接し、多少の危険の場所は注意を加へて、そして徐降してゆく。十二時半、葎段ノ小舎へ歸り着き、休養をとつて荷物を纏め、下山の途についたのは午後一時であつた。

はうか、崇巖と云はうか、文字で形容するには餘りに輝かし過ぎる展景である。

千枚岳(二八七九・八m)は間近い。紛雪を潜つて登行する。

岩塊は所々少しく現れてゐるが、偃松は全く雪にかくれ、新雪は約五寸程も積つて、その下部の舊雪がなすやゝ堅いクラストを覆ふてゐる。

直行から、時には角付、開脚、擲付をしたりして多くは斜向登りをつゞけた。

千枚岳、九時。此處を越えて、東岳の登りにかかる所に於て始めてスキーを脱ぎ、アイゼンを着けて堅雪の上を一萬四百呎の山頂指して攀ぢる。

十一時、つひに東岳の雪面に、冬季の最初の登山である。足跡を印し得た。

山上たゞ／＼皎々と輝き満ちた雪華に射すくめられて、一種の淡い眩暈を覚え、足下には南アルプスの俊剛東岳もなく、間近き荒川岳、又赤石岳や鹽見岳等々の周圍の山々も無く、測り識られぬ多量の清純な雪の白と、其處に一人ぼつんと佇む自己の存在

降りには人夫の脚も速かつた。二時には二〇七三・

二m邊も過ぎ、一五八六・四m邊でスキーを脱して三時五十分にはハルキ峠に歸り着いた。

それから、大井川河畔に向つて道を辿り、西木賊邊の川岸へ出て、小橋を東岸に渡り、河原を少しく戻れば、河原より上つた所に、東木賊の小屋が建つてゐた。午後五時。

荒廢してはゐるが、大きな一棟である。

遠慮なく浸入して、今宵の宿營地を其處に求める。薪にも水にも少しの手敷を要せず、その夜は、暖かい平易な休眠を得る事が出来た。

七 轉 付 峠

朝、五時に起きて仕度したが、出立したのは七時五十分になつた。気温はC二度、妙に高温である。

東木賊から河原を進んで、そして東岸の小徑を辿れば、臆て一旦は河原に降り立ち、その河原を少しく歩いて、東へビ澤から右手に登つて、東岸の山腹

を通ずる二軒小屋への大井川本道へ出た。九時半。そして人跡の更に無い約〇・五mからの雪に埋れた道を急ぐ。

樹々は白い樹氷をつけてゐる。そして蒼く晴れた空に輝く冬の陽光に、キラ／＼と寶玉の如くきらめくものもある。

兎のトラップが路上の積雪面に何處までも無數に点在してゐる。

妙な足跡を發見して不審に思つてゐると、野猿の群が逃げ出した。

少しく大形な菊形の足跡は、此の大井川の奥山に今もなほ棲息すると云ふ、現今内地に於いては珍しい動物、山犬のそれであるらしい。路傍に、毛を雜ちえた此の動物の新しい糞が發見される。

やまいぬ

(*Canis lupus coreanus*) 食肉目、犬科豺狼の一

亞種で、日本犬よりは大きく、瘦せて肋骨を現はし、毛は灰色で粗剛に生え、夜間、彷徨して

食を求む。暗中にも、その眼は青く光ると云ふ。北方より移動して來たものらしいが、現今は殆んど絶滅して、僅かに中部の大深林中にその形跡を認むるのみ。

送り犬

武州三峰神社の御神體は、俗に山犬であるなどと謂はれてゐた。甲州御岳金櫻神社の奥宮である金峰神社に於ても、神札には山犬の姿を記して、倉庫の守護神としてよく戸前などに貼られたものである。

三峰さんの送り犬は有名であつた。十文字峠、或は雁坂峠などを超えて、はるばる三峰に參詣した昔の道者は、あの淋しい山道を辿るに、一匹の山犬が後になり先きになり、見えかくれして送つたものであると云ふ。

道者は、この山犬の見送りを、道中安全の縁起として喜び、彼れが山村の吾が家へ歸り着いた時は、必ず山犬の爲めに謝禮の意味で應分の食

物を提供するのが例であつた。それは今より約四十年程も以前までの話である。

其の頃は到る所の山中に、この怪獣が横行してゐたものらしい。

若し廣く山犬に關する傳説の彙集を試みたならば、それは興味ある大部の記事となることであらう。

山犬は、自分の食物として、兎や其他の小動物から、羚羊、鹿などを襲ひ、牛馬の死肉を喰ひ、時としては死人の肉までも遠慮なく欲求する。新墓地を掘つた實例はいくつもあった。彼れは、一、二間隔てた所から、前肢をもつて土を掘り、後肢でその土を巧みに搔いてゆく。

山村に於ては、現今もなほ、死人を土葬した地の上に、若竹を持つて半圓を形作り、中央に一箇の石を繩にて吊して置くのを見ることが多い。これ即ち、狼除けの一形式であると云ふ。

こんな話もあつた。

或る時、彼れの戀人を訪ねて、楽しく歸途につ

いた村の若い衆が、或る山路にかゝつた時であつた。行く手に當つてかすかに鈴の音が聞えた。

彼れはそれを耳にすると、不圖數日前、彼れの村へ入つて來た、可憐な若い比丘尼(女乞食)の事を思ひ出した。そして、何んとはなしの徒ら氣から、波女をいたくおどしてやらうと考へて、其處の路傍に隠れて待ち伏せしてゐた。

鈴の音は近付いた。

彼れは危く、別の意味で、も少しで奇聲をあける所であつた。と云ふのは、それを注視すれば驚くべし、一匹大きな山犬が、行き倒れになつて假埋葬して置いた彼の可憐な比丘尼を背に乗せて山奥へ、食料として今や運搬して來る所であつたのである。

血氣にはやる彼の若い衆の血液は、氷のやうに一時に冷却して逆流し、聲さへのどを通らなかつた。

科學肥料のまだ山村に普及しない時分だ。

山村の農民には、入會山の草を刈り乾して置い

て、數日後それを積み上げて火を放ち、その熱灰を集めて背負つて歸る風習があつた。こんな場合、とかくその仕事は手間取つて、歸りは暗くなる事がある。そしてかうした山の夜道を一人とぼとぼと家路へ迎ふ時、行く手の道にふさがつて、山犬が一、二匹、灰色の氣味悪い姿を横たへてゐることがあつた。と、いやな恐ろしい氣持ちに、彼れの身の毛はザワ／＼と彌立つた。

「シイツ、シイツ」と威嚇して、辛じて追ひ拂ふと、一小部落を越えた十町餘も先きの山路に又その山犬は先き廻りをして待ち伏せてゐる。

馬は一町も離れてゐても、なほ山犬の氣はひを感じれば怖毛を振るひ、嘶いて立止まつて歩かないと云ふ。

かうした山犬の消息が、今日殆んど山間から影を没したのは、どうした譯であらうかと、懐古の老人は物語るのである。

スキーにワックスを塗らなかつた爲め、此の日の

滑行はあまり調子が良くはなかつた。

オギス澤、ツバクラ澤を経て、車屋澤に入ると、大瀑は、物凄く蒼白く凍結して、たゞ少量の水が落ちてゐる。

道も大分痛んでゐる箇所があつた。下千石澤や、上千石澤の迂廻した山腹の南面は、正午に近い陽に融けて、雪はいたく粘着し、スキーの底面にベツトリ附着して、まるで歩かれぬ事もあつた。

雪面はギラ／＼と反射して、雪の輝きの美しい溪谷とその山道の情趣は飽く事なく味得するに遺憾がない。かくして二軒小屋の建物が見前に現れ、十二時半、東海紙料會社の探伐事務所に到達した。

此處は、冬季は無人の家屋であつたが、少しく離れた東電の田代川發電所取入口の事務所には、常に電工其他の四、五人の人々が住まつてゐた。

其處を尋ねて晝食をとり、午後一時五十分、二軒小屋を後にして、轉付峠の登りにかゝつた。

白峰山脈を横斷する雪に埋れた冬のデンツク峠、但し二軒小屋と、早川の溪谷にある新倉方面とは、

絶えず電工や人夫の往來があつて、峠上までの行程も約三時間半と聞き、今朝も一人新倉へ峠を越えたとの話であつた。

紙料會社の小屋から、直ぐ峠路に取りつく。此の道は、溪澗から左手の尾根に出て、そのまゝ山腹を辿り、ナガレ澤の上あたりを登つて山脈を超えてゐるのであるが、尾根を眞直ぐに登り、木立の急勾配を遮二無二登り詰めると、電話線の伐り開けを右手にして、午後四時半山脈の頂稜に着いた。雪は一メートル餘もあるらしく、途中スキーを着けたが、軟雪で可成りめり込んでしまふ。

頂稜に出てこの山稜を、北に峠道まで辿つた。所がスキーを持たぬ人夫等は、腰までも没する深雪に、どうしても動きがとれなかつた。そして頻りに悲鳴を上げてゐる。

スキーでさへ困難の軟雪である。三、四町の距離であつたが、人夫達か峠路に出るまでに約一時間を費してしまつた。午後五時半。峠路は、それでも人の足跡明らかに可成り雪を踏み付けてある。

針葉樹に圍ふ、標高二一〇〇の峠路に陽は暮れて保利澤への降りには、月もない暗路を辿るより他には致し方もなかつた。

急勾配な下降路である。スキーを脱いで右手に引づり、左手に杖を持つて支へとし、雪の光りに路をさぐり、人夫と相呼應して一步一步降つて行く。

やゝもすれば道を失ひ、斷崖から雪と共に崩れ落ちる憂ひが多分にあつたので、それは極めて緊張した行程であつた。

六時半、嬉しや峠路の難苦からゆるされて、内河内水源の河畔、ヨムギ島に降り立つた。この溪谷も全く雪の中に埋れてゐる。が、溪流の音は懐しく響いてゐた。

疲労困憊したらしいポータアを勞りつゝ、溪澗を下流に進んで行く。

デンツク峠の隧道の出口も過ぎて、保利澤の小屋に近付けば、雪の白皚々たる山路に、提燈の光りが一つ明るく動いて來た。それは、二軒小屋の事務所から、電話の報知に依つて、デンツク峠を越えた一

行の遅いのを氣遣ひ、わざ／＼保利澤事務所から、電工が迎へに来て呉れたのである。共に喜び迎へられて保利澤の事務所に着く。七時十分。

小屋は大きな二階建である。皎々として電燈は照り輝き、電熱爐、電熱釜があり、風呂さへ既に熱く沸いてゐた。

到らざるなき歡待を得て、布團に暖かくくるまり手の裏を反すが如く、先程までのデンツク峠の苦難は何時の間にか忘れて、山住ひには不似合ひな、贅澤な山旅の最終の夜を過ごした。

八 飯 富 山

午前四時半起床。

乾燥室には昨夜の濡れ物は皆よく乾いてゐる。

小屋番に親切な待遇を謝して、七時、保利澤事務所を出立する。

もう雪は少い、道も極めてよい。

八丁峠を降り、廣河原の田代川第二發電所に三木主任を訪れて昨夜の厚意を謝し此處では直ちに電話をもつて、新倉發トロロイの出發を制肘してくれた。八時。

廣河原は、大規模な發電所の設けられた爲めに、山間のもの淋しかつた溪澗の面目を全く一變せしめてゐた。

なほ先きを急ぐ。道には全く雪は消え去り、顧みれば、溪奥の雪の山がたゞ白々と背後に屹えてゐるばかりである。四十分、早川河畔の田代川第一發電所を経て、新倉の村家へ入る。

新倉は發電所、變電所、取入口等の大工事の爲めに舊態を一變し、今や山間稀有の文化小都邑たる面影をもつてゐた。

發電課に石井主任を訪ね、そして午前九時發の飯富行乗用トロロイにあわたくしと飛び乗る。

トロロイは、吾等スキー客の一行其の他を乗せたまゝ、早川の大釣橋に近い終點まで約四時間、馬に索かれて滑るが如く早川河畔を走つて行つた。

大井川の下流

大井川の下流

一 島 田

大井川下流の最も重要な河港、向谷むかやの櫻がほつほつ綻び始める頃である。

水源をなす日本南アルプスの春の雪解けの水はかさ増して、流れも豊かに、瀬の音も涼々と響くそれに、しんみりと耳をかたむけ度く、それからまた河津の奥を擁す前山の肩にかくれて、それでもなほ且つ、ちらつと白顔を覗かせて呉れる吾が赤石連峰の一瞥に、高鳴る胸を抑へ難く、何か大きな仕事でも持つてゐるかのやうな心持ちで、そよくと島田の驛に下車したのは、その日も暮方れに近かつた。

島田は、大井川の東岸に位し、古來東海道に於ける要衝の驛路として名高く、現在は人口二萬餘、街

區また整然として四通し、昔日の面影へ更に現代の繁榮を添へてゐる。

驛を出て、西に長い町家を出抜けると、川原町から直ぐ大井川の堤防へ出た。此處には、昭和三年四月に竣工した國道の大鐵橋が、一線に、魔物の如く對岸へ向つて架けられてあつた。廣々とした河原は西岸の金谷方面に展開してゐる。上流も、下流も、只だ灰白い砂礫の廣茫たる一帯である。薄濁りの水が、網狀に大きく縞を描き、低い山なみが、ある限りの視界を限つて、川尻の方面のみ遙かに駿河灣の海波を見せてゐる。ゾーツと底重たい流れの音が湧いてくる。何となく氣分のもみくちやになるやうな豫感に襲はれ乍ら、暫らく橋欄にもたれて水の行衛に見入つた。

あの、熊ノ平に湧き出す水も、三伏小舎で汲む水

も、赤石岳のカルルの雪も、なほ又その秘奥の密林にかゝる霧の雫も、すべてそれ等は凝集されて此處に流れ下つてゐる。千古の歴史と萬象の實在を語り顔に、否、川浪の音もどうやら、その千萬言を一時にさゝやいてゐるとすら思はれなかつた。

併し乍らそれは、もはやあの水源の溪流に見るやうな原始の素朴な趣は全く無く、固より國道鐵橋の下走る、やゝ嬌慢なる對世間的の水である。

往古に溯つて、此處に大井川に關する文献を少しく繙けば、河名の現れた最初の記文としては日本紀に、仁徳天皇六十二年夏五月、遠江國司表上言、有_二大樹_一自_二大井川_一流之停_二河曲_一。其大十圍。本_一以未兩。特遣_二倭直吾子籠_一令_レ造_レ船、面自_二南海_一運_レ之。將_二來_一于難波津_一以充_二御船_一也。とあり、降つて續日本紀に、光仁帝寶龜十年辛巳駿河國言。以去七月十四日大雨汎濫決_二三郡堤防_一壞_二百姓廬舍_一又口田流亡其數居多。應_レ役_二軍功六萬三千二百餘人_一者給_レ糧修_二築之_一。とも見え、なほ其他としては、
更科日記——大井川と云ふわたりあり、水の色世

の常ならず、磨粉などをこして流したらむやうに白き水早く流れたり。

仁治東關紀行——すこし打上るやうなる奥より大井川を見渡したれば、はるばると廣き河原の中に一筋ならず流れ別れたる河瀬どもとかく入違ひたるに似たり。中々に渡りて見んよりもよそめ面白く覺ゆ。

掛川志稿——大井河は河尻、飯淵_{はぶち}の間に到つて海に入る。白根ヶ岳の源より八日路、人家無く詳かならず。河尻まで凡九十里と稱す。下流は沿革多し。古は横岡と牛毛山の間を流れ、今の金谷驛河原町を経て、東南島田驛の南を流れ、本州小杉と駿河一色の間を経て田尻濱に到つて海に入りたり。天正中より牛尾山と駿河相賀の間を流れ、又何れの時にか其下流大日村より一筋西南に流れて、上吉田、小山の邊を経て川崎に至つて海に入り、又一條寛永十年の頃、色尾より下、川尻飯淵_{はぶち}の間を流れて海に入る。今の川條是なり。夫より後東西に大堤を築かれ、小杉一色間の一流と、川崎に到りし一流は絶えたり。

この他、駿河風土記、遠江風土記、遠州一統志、駿河記等その記録文献は盡きない程である。

大井川を島田の宿より横斷しての交通は、桓武天皇の箱根山道開設以來の沿革を有つてゐるらしく、東鑑に建久元年十一月、源頼朝が島田に宿し、嘉貞四年には頼經も通行した事が載せてある。

徳川幕府の時代となつては、交通益々股賑を來して、切に渡舟、或は橋渠架設の要に迫まられ、幕府に向つて幾度かそのことが上奏歎願せられたが、關東の要害としてわざと之れを許さず、島田、金谷の住人亦これを喜び、ついに明治四年の架橋渡船の解禁に到るまで、人馬は不便極まる渡渉を強要せられてゐたのである。河流の深淺を熟知せぬ海道の旅人は、いづれも川越人夫の肩車に凭り、或は蓮臺などに乗つて川を渡つた。諸侯が江戸へ參勤交代の往來などには、金谷島田の本陣(宿舎)に塗物欄干付の蓮臺などを豫め備へて置き、駕籠のまゝ是に乗せて人夫二、三十人で擔ぐのであつた。

川越人夫は兩岸各驛合せて約六百五十人、川會所

を兩驛に設けて、取締、川庄屋、年行事、小頭、口取の役員をもつて階級をなし、各々相應の給料を取り、人夫は一日の雇料七十八文乃至百文を取つてゐた。

川越賃金は正徳年間の制定では、脇通水の川越一人に付八十四文以上九十四文まで、馬越の瀬に於て三十八文より七十八文まで、としてあつた。

「東海道名所圖會」に此の大井川は東海道第一の急流にして南風にはみかさを増し穴師吹きぬれば水落る。古へより舟なく舁無く橋無くして、往來の人は島田、金谷の川越所に立寄りて何錢川の定めを聞き、其賃を渡し、割符を取つて渡丁に越さしむ。蓮臺肩車などの兩品あり……諸侯は駕を臺に据へて多くの役夫をもつて早渡す、水堰の傭夫は前後を圍ひ、急流に足を揃へ聲を合せて渉す。紅葉散り時雨する頃は水落ちて冬川の寂しきに渡丁は弱り、みかさ増す夏川を質に入れかしかりの沙汰羅山子いへる如く、己が草の戸は流るけれども首だけの借錢を納して五月雨の水に威を増し、下り酒の菰を解て所々

に宴す。島田金谷の渡丁はすべて七百人なり。霖雨降り止まずして水量ましぬれば、河止とて東西の驛中所せくまでふたかり、一驛二宿も後へ戻りて水の落つるを待もあり。又色尾より涉りて藤枝へ出るもあり、なを此の行先に安倍、富士、酒匂、馬入、六郷などいふ川々あり、みな之に淮ふべし……。とあつてそゞろに當時の情景を彷彿せしめる。馬方節に箱根八里は馬でも越すがヨウ

越すに越されぬ大井川

それが明治の初年に到り、夏季水量の多い時は渡船に依り、冬季減水の際は川瀬に假橋をかけて通行するようになり。明治八年十一月、民間に架橋を出願する者があつて、始めてよく人馬通行の利便を開き、十五年九月、假橋より本橋となり、一展安全を保つたが、昭和三年四年に到り、つひに四ヶ年の期間と國庫地方費總豫算貳百貳拾餘萬圓を費して、國道大井川の大鐵橋は竣工を告げた。

それは全長五百六十一間、幅四間、砥の如く木煉瓦を敷き詰めた、鐵骨ブラツト式一大橋梁である。

で、一同打揃つて、金谷方面に歩を進めた。

先づ縣社大井神社に參詣する。鳥居をくぐると正門あり、拜殿神殿等、境内は古木多く、祭神は岡象女命外二神を祀つたと云ふが、固より民草をうるほす恩惠の大井川そのものを御神體とみたためものであらう。建治二年の創立と云はれ、四個の末社が添えられてある。

此の例祭は毎年十月十三、四、五の三日間之を行ひ、大祭は滿三ヶ年毎に之を行ふ。その大祭は御旅所へ神輿の往復があり、供奉の大名行列は可なり大袈裟のものであつて、中にも大奴が大きな兩刀の下け緒に、女の廣帯を吊して踊る奇觀があるので、一名帯祭なども云はれてゐる。島田の一名物として頗る賑やかなものだそうである。

なほ島田の名物として、未婚婦人が結髪むすぶの名稱に島田鬘むすぶと云ふのがある。

島田鬘

島田鬘、高島田、投げ島田、つぶし島田など

對岸は牧ノ原の高臺に金谷の町が續き、巡らす山々は青くかすんで、流れは洋々ときはまりもない。

淨瑠璃「朝題目記」の深雪が、悲戀の泪に寫つた眼開きの松は、堤上の並木の中に嶄然と、橋の鐵架のひまより望まれたが、數間毎に照明燈を取り付けて街區を歩むが如き大井鐵橋の美しい歩道は、露のひぬ間の朝顔よりもお陽様輝く眞赤な色に、チューリップの花の夢のみ多く、現代文化の尖端を行く、行進曲の足取りを歩み勝ちであつた。たそがれる山の色に名残りを惜しみ乍ら、島田の町に引返し、先きに指定されてあつた旅舎兼料理屋の萬露亭といふのへ泊る。夜は島田保勝會の人々が來訪されて暫く物語つた。

二 金 谷

朝、旅宿を出て、東海紙料會社を訪れると、猪瀬重役の好意で、深澤社員が案内役を引受け、それに保勝會の渡邊、齋藤、井上の三氏も參加せられたの

と種別され、それぞれ上品、或は清楚、又は嬌艶な形式を備へてゐる。

歴世女裝考（弘化四年山東京山）や、近世風俗志（嘉永六年喜田川守貞）には島田町の名を取り、土地の遊女から流行したものであると説かれてゐるが、これは、建久年間、美姫大磯の虎が島田附近の出生であつて、一時遊君となり此の形式の警鬘と麗容を以つて廣く世に名をなしたのに始まる、と云ふ傳説に聯絡するものである。郊外野田の鵜田寺には虎の父越場郡司の墓といふのが在り、虎は曾我十郎に嫁するに際し、大磯長者之姫（曾我物語）となつたのである。と云ふ考證があるが、眞疑の程は明らかでない。

御勅使川の安通にも、虎の傳説があるのは妙だ。

併し乍ら、此の土地に出生した遊君、虎が美しい島田鬘に結髪して……後、その反動として（？）祐成が復仇に死んだ故、惜し氣もなく黒

髪を落してはしまつたが……關東荒武者をあく
迄艶殺し盡した當時の凄腕は、蓋し推察するに
餘あり、天下嬪娘靡然として之に倣ふ……うつか
り薙髪まで真似たなら社會は無事には濟まなか
つたらうが……と云ふ傳説は、少くとも、喜多
村信節が締多輪（嬉遊笑覧）の義であるとか、
柳亭種彦のシメタガネルの略したもので、シメ
タがシマダとなつたのだ（足薪翁記）の字義註
釋よりも、よほど興味深く思はれるのである。

大井神社を去つて西に向へば、新道を左に岐れて
入り、松並木の整然たる舊東海道を歩んで、路傍に
芭蕉翁の眞筆の句碑「馬方はしらじしぐれの大井川」
を見、朝顔目開きの松を街道の左手に仰ぐ、大井川
畔の堤防の上に立てば、河原は舊蓮臺渡しの遺跡で
遙か西岸の金谷の町に對し、堤防の上は延々と美し
く松の並木が続いた歩道をなし、北方の向谷まで約
二十町も、大井川公園と稱されてゐる。
河原は飽く迄も廣潤として、牧ノ原の高臺から、

栗ヶ岳、白光山（八三二m）を望み、雲煙模糊とし
て井川の上流をこめてゐる。

國道大井川の美事な長い鐵橋を渡れば、田圃を經
て直ぐ金谷の町となつた。

金谷は、牧ノ原に開析された谷間から河畔に向つ
た傾斜地に發達した宿驛で、人口約一萬。島田と共
に東海道の要衝である。

大井川上流との交通は、明治四年に舟筏の便を許
されてから、島田の北端、向谷を河港として、上流
千頭まで高瀬舟を通じ、後、飛航艇を用ゐるやうに
なつたが、現今は、大井川鐵道株式會社が、省線の
金谷驛を起點として上流へ敷設され、溪谷を縫つて
上川根村千頭まで到る運命を持つやうになつた。

この延長二十六哩。それは眞に大井川の屈折蛇行
する景勝地に沿ふ本邦有数の溪谷鐵道でなければな
らぬ。

この鐵道の開設に依つて利便を受くるものは、木
材、薪炭、茶、鑛物其他、川根地方の主要物産の搬
出であるが、今日まで比較的世間に秘められて識ら

れなかつた大井川の水源地が抱く廣大な自然界の開
發である。天然美の發露である。金谷、千頭間の徒
歩に依る約二日路は、鐵路に托すれば僅かに三時間
にしか過ぎない。

かくして、井川、寸又の兩溪谷は、恰も黒部峡谷
が水電計劃と俟つて立派な歩道が作られつゝあるや
うに、洗濯峠や大日峠の登降を捨て、流域に依る開
發進展の日は、そんなに遠き將來でない事を充分豫
想して間違ひはない。

千頭より大井川の上流は、峡谷益々深くして、河
津は迂餘曲折はけしく、山間鄙奥の里落が散點し、
歩道も上下登降常なく、そして梅地邊に到つて、溪
谷は一層險惡壯絶の態様を構へ、所謂「接岨峡」と
なつて、井川村島和合に續いてゐる。

斷崖絶壁は迫り、巨巖、深淵、急湍、激瀨の奔流
の錯綜に密林の幽翠を配し、それは、確かに大井川
の大溪谷が抱懐する、他に得難い一景勝の秘境であ
る。
まだ世すれのしない、何處となく朴訥な粗野な里

落のたゞすまひと、その住民は今の世に於て限りな
く懐しく尊敬すべきものであつた。それは金谷町か
ら、家山、千頭を經て井川まで、そして更に更にそ
の上流まで、長い長い溪谷の旅が、何處までも盡き
る事なく、恰も地殻の胸底に喰ひ込んでゐるかのや
うな想ひがする。

金谷町が、島田と相對して要津となつた事は、文
明十二年、太田道灌の「平安紀行」の内に見えるを
最初とする。東海道の舊道の狭い坂路をさしはさん
だ小さな町ではあるが、牧ノ原三千町歩の遠州銘茶
の大生産地を控え、大井川鐵道の開設に依つて、こ
の流域との交通も益々こまやかに、相當の殷盛を加
へんとしてゐる。

旗亭で晝餐をとり、町を出抜けて、わざと舊道の
敷石道を、牧ノ原の高臺へ登る。

低平な丘陵地は、大井川が作つた古いデルタであ
る。此處に立つて、東方を顧みれば、脚下に金谷の
町家が密集して、その前に、大井川の廣大な河原は

白く横たはつて、兩岸の松並木美しく、對岸には島田の人家も望むべく、上流に聯立する山々の峰頭は數限りもなく重疊し、その奥の奥に、毅然として一頭地を抜く峻峰が、雪白々と聳えてゐる。おゝ！光岳、上河内、聖、赤石！！南の山の逸物は、春がすみ棚引く彼方に、キラ／＼とプラチナ色に輝いてゐる。

大井川の下流をおとれて、此處に歩みを運んだのは、實にこの景觀に憧れてであつた。此の大川のゆるい流れは、實に彼の高峰の白い雪に同じ脈搏を傳へてゐる。息苦るしいやうな素晴らしさだ。

なほ駿遠信豆相の諸山も起伏し、富士の靈峰は又ひととき雄大に、駿河灣の蒼波と對照し、左眇右顧すべて双眸の中に聚つてゐる。

明治大帝、十一年の北陸より御還幸の折鳳輦を此處に駐めさせられ、先年今上陛下行幸遊ばされ、また古戰場城山の跡でもあつて、よく開拓された牧ノ原茶圃は、銘茶の産額、全國一の折紙が付けられてゐる。

晩春の候、この茶圃は何處も此處も、茶摘み唄でうづめられてしまふ。それは古來駿遠地方の俚諺として有名な歌曲であつた。

茶・摘唄

お茶を摘むなら根葉からお摘み
下手なお方はうらばしる
お茶はなくなる茶摘みは歸る
後へ残るはビクと笠
お茶はよれずからだがよれた
お茶とからだとかはりやよい

白い手拭ひを姉さん冠りにしたね、え、ね、達茶の新芽を指先で摘みながら、日ねもす唄ひくらすのである。

それが、いつかせち辛い社會の浪にテンポを早めて、若葉は鋏で刈り取られるやうになり、唄も純真な鄙の氣分は没却され、只だ小器用な都の職業歌作家の手に新作され、不見識にも無邪氣に可憐に唄つ

てゐる。

チャツキリ節

茶山茶所茶縁どころ

ねえねゆかすかやアレ行かすかお茶摘みに
チャツキリ／＼／＼よきやアるが啼くから雨
すらよ

夏ぢや五月ぢや新茶ぢや粉茶ぢや

やアレえれえれやアレえれえれごせつぽい
チャツキリ／＼／＼よきやアるが啼くから雨
づらよ

やつさもつさよお茶屋の前で

まつちやおまつちやあつちやおまつちやはり
こんぼ
チャツキリ／＼／＼よきやアるが啼くから雨
づらよ

(地方語) えれ／＼は、あ／＼の意。ごせつぽいは、安堵した心。やつさもつさは多人數の揉み合ふ事。まつちや云々は待ちなお前と人たちをのけ合ふ

形。はりこんぼ、頭と頭の鉢合せの事。きやアる、蛙。雨づらよ、雨だらうよ、である。

牧ノ原の高臺を越えて、西に降ると菊川の里である。溪流を挟んで乏しく人家が並ぶ。

掛川志稿に、昔白菊と云ふ女、大鹿の菊淵に身を沈めたり、因つて川の名とすとある、大井川と小夜ノ中山と二つの難所の間介在して、昔の旅人達にとつては、聊か慰安を刻まれた宿驛であつた。

建久元年には、源頼朝上洛の途次此處に泊り、彼の承久ノ亂には、破れて北條氏に捕はれた中納言藤原行卿は、

昔南陽縣菊水、 汲下流而延齡
今東海道菊水、 宿西岸而亡命

と、宿舎の柱に記して。後世行客の袖をぬらさしめ、元弘元年七月、後醍醐天皇の謀臣藤原俊基朝臣は

古もかゝるためしをきく川の
同じ流れに身をや沈めむ

と、詠まれて青史に斷腹の思ひを残された。

また尊海僧正の天文紀行の中には

谷かれの山路のくさもうつろへる

霜の下ゆく菊川の水

の詠がある。今、此處に宗行卿の塚と云ふのが在るが、卿は承久三年七月十四日、三島のほとりで殺されてゐるので、其の方に在る墓が正確なのである。

徳川幕府の始め頃から、金谷の宿の榮えるにつれて、菊川は漸次衰微してしまつたらしい。山里らしい竹垣の根に、桃の花がもう咲き始めてゐた。其處も彼處も茶のかほりが高い。菊川の里から左へ岐れて、舊東海道の路を登つて行くと、小夜の中山である。

道も廢れ、家も廢れたらしい屋敷跡が峠の中途に見られた。池水や築山の配置などが相當に整つてゐる。昔、旅人の泊つた宿舎、本陣などといふものであつたかも知れぬ。

本陣は徳川時代に於ける大名の宿泊所であつて、寛永十年此の制を布き、慶應四年の廢藩まで、各宿

驛多くは六戸より少きは一戸を置かれた。本陣の主人は手代數名を使ひ、問屋役（即ち旅客や荷物の運搬、飛脚定便の世話をなす問屋場の役員）とは別格であるが、等しく權威があつて、驛政に容喙する事もあつた。

星移り、人變り、草芒うもれゆく驛路の傍らに、たゞ一つ春蘭の花が薫つてゐる。

人間生活の根據を定むる創業の苦難、生地を離れゆく惜別の悲哀、遊牧の人種には解からない、眞實な血と泪そのものである。峠を登り詰めた所は小夜の中山で、子育觀音堂を守るさゝわかな久延寺と云ふのが建つてゐた。金谷から一里餘の距離である。門前の茶屋では名物の飴を賣つてゐる。

夜泣石は、遠州七不思議の一として可成り世に聞えた傳説である。寺の寶物を拜觀すれば、すつかり曲節をつけて面白く、無間山の鐘の破片と共にやゝこしい説明を聞かされる。

併し乍ら、この傳説は、或る子持ち女が山賊に襲はれて連れて行かれ、後に残された幼児が一人、夜

の路傍の石のほとりで泣いてゐた。といふ位のことから釋出された無稽の説ではないだらうか。若しそれであつたとしても、あれ程名を成した夜泣石の興味を多分に削がれはしない。

舊道は此處から降りとなり、日坂を経て掛川へ通じてゐる。

久延寺の裏に廻り、小さなすぐ路を新道へ降らんとすれば、こゝは北方の眺望よく展げ、無間山（粟ヶ岳）は眞近く、その背後に遠く遙かに南アルプス連山の白頭を眺める。

古近集 大歌所御歌

かひがねをさやにも見しかけられなく

よこほりふせる小夜の中山

續後撰集 蓮生法師

神無月の頃、あづまの方へまもりけるに

さやの中山にて時雨のしければ詠る

甲斐かねははや雪白し神無月

しぐれてすぐるさやの中山

新拾遺集 寂眞法師

甲斐ヶ根はなをいかばかりつもるらん

はや雪白し小夜の中山

新千載集 大江義重

旅の歌として詠める

雪つもるかひの白峰をよそに見て

はるかに越ゆるさやの中山

此の甲斐ヶ根は、白峰ではなく赤石連峰のことであつて、手越、静岡邊より「北に遠ざかりて雪白き山あり、問へば甲斐の白峰と云ふ」のも同じである。但し、富士、鈴川の附近からは、鳳凰、白峰三山、東岳の偉容が立派に觀望されてゐた。

急な小道を新道へ降り、峽間を金谷へ向ふと、休茶屋があつて路傍の北側に夜泣石がころがつてゐた。徑三尺位、水蝕に依つて作られたらしい楕圓形の滑らかな堅い砂岩である。元は峠上から日坂へ降りかけた道の中に在つたものであるが、明治初年頃の博覽會に出品すると心無くも運び出し、失敗して東京から此處まで返送して來たと云ふのである。茶屋では子育飴を賣つてゐる。その収入は仲々侮れ

ず、一家の経済位は保證されてゐるといふ。妻女は慣れた口調で、すら／＼と夜泣石の因縁を話して呉れた。

條書は可成り複雑に捏造されてゐる。そして江戸稗史小説には復讐奇談として曲亭主人が事も細かに作り上げてあつた。

膝栗毛の文中にある「此處は名におふ餡の餅の名物にて白き餅に水飴をくるみて出す」と云ふのは、平常は賣つてゐないらしい。

新しく拓かれた街道は、こゝから菊川の里を見下す高所を過ぎ、牧ノ原の高臺を越え、金谷町の北部を下つて大井川河畔へ通じてゐた。

金谷へ歸着したのはもう夕景であつた。金谷河原から、自動車に投じて島田の驛に走り、同行された人々の好意を喜び乍ら袂別して、驛前から乗合自動車に身を托し、遠州南端の川崎、相良方面に到る街道を吉田に向つた。此の街道は、島田町から、間も無く大井川左岸の土手上に出で、大きな積に沿ふて直ぐ五百十間の木橋の谷口橋へかゝる。此處からは

川尻まで約三里、如何にも大河の下流らしい、實に優れた眺めである。大井川のファンである沖積層の上にある。色尾、神戸、上吉田などの村落を過ぎ、駿河灣に近き海村、住吉の村に着いて、その夜は其處のさゝやかな旅舎に宿を求めた。

三河 口

海村の小宿に夜を明かして、翌朝、浪の打ち寄する釘ヶ浦の岸邊に、白砂青松そのまゝの、山と異なる情趣をめで、更に大井川の東岸に歩を運ぶ可く、引返して富士見橋まで自動車に乗つた。橋は、横須賀街道の幹線をなし、鐵橋と木橋をつないで長さ四百九十間、一線に潤い河原を横切つてゐる。東岸の橋の袂に立てば、先づ女神の如く氣高い雪の芙蓉峰が展望され、日本南アルプスの群巒も、轟々と雪の峰頭を掲げてゐる。

長く遠く、土手に續く松並木は、川風に松籟と河川の音とを合奏し、春の麗陽は暖かく照して、河原

の砂礫に燦々と輝いてゐる。生え繁る土手の巨大な黒松の樹影より、南へ駿河灣の波濤が覗かれる。繪よりも美しい眺めである。

川瀬の端に、鴨やせぐろ、せきれいなどが飛び渡る。松並木の土手は、何處までも延々と長く續いてゐた。

潤い河原の對岸は吉田のあたり、左の土手下は吉永村の飯淵の部落である。底濕の耕地、畷多くして畔にはブナの並木を植ゑてある。川の上流奥地が薪炭に困却しないかはり、下流はその不自由を蒙る事夥しいらしい。飯淵に於ける畷の樹々は、多く薪炭の材であると云ふから驚く。畑には菜種の花が黄色に咲き盛り、麥の穂も既に青く延びて雲雀さへ空に高くさえづつてゐる。

飯淵からは焼津行きの乗合自動車の便があり、相川村からは藤枝驛へ、藤相鐵道と、乗合自動車との便があつた。

長い、長い大井川の土手であつた。富士見橋から、一時間餘も歩いたと思ふと、やうやく土手は狭

まり、松も若木となつて海岸は近接し、つひに土手は盡きて、只だ荒れ果てた草叢の積の一端に到着する。

對岸の川尻方面は遠く、廣い廣い河原である。川楊の矮樹や荊棘草叢の間の砂地を辿ると、いよ／＼海岸に接して、右は本流、左は浸出した小流れが東岸の砂丘を隔てゝゐた。そしてこの小流れは、どうしても徒渉しなければならなかつた。

小流の水は脛の上まで届いた。冷たい春の水である。が、併し、おゝ！ それは赤石の水だ。雪解けの流れた。その時、不圖上流に畔を放てば、淡蒼い空の彼方藍黒く起伏した連山の奥に、高く雄々しく雪白の小さな山なみがちらと聳えてゐる。それは、赤石、聖、上河内、光!! それは、それは正に大井川の水の脈搏を傳へる心臓なのだ。赤石の流れ、白峰の水、足にしみ入る感觸の快さ。

手を舉げ、脚を上げ、小躍りしたり、絶叫したりして徒渉を終る。

一寸とした砂丘から、下れば駿河灣の浪打ち際で

ある。

海波は岸邊に、長く遠く白沫を見せて、左は焼津西は相良の濱に續き、前は蒼漠たる海を控え、陸は地藏森の松林を負ふて、漁家を隠顯せしめ、漁舟を二、三砂濱に引き上げてあたりはとて閑寂であつた。

南アルプスのおとづれを持つて來た、懐しい大井川の河流はギラ／＼と笑つて、海水の浪と交遊してゐる。

陽炎もゆる春の濱邊に立つて、遙かに想ひを彼方の雪峰に投げかける時、白沫をかむ遠州灘の浪の音は、悠久より永遠にと、不斷の海の潮音をかなでてゐた。

身延山の鳥類

——小鳥の鳴き聲を聽く——

身延山の鳥類

——小鳥の鳴き聲を聴く——

玄妙な小鳥の鳴き聲を聴いてそれに親しみ、且つその土地に棲息する鳥類を調査しようと思ふ一舉兩得の自然研究「小鳥を聴く會」は、梅雨期の明けぬ内にと、六月下旬の或る日、甲州は日蓮宗の靈跡、身延山に於て催された。

祖山學院の松木師の斡旋に依つて、萬事好都合に終始した事は感謝に堪へない。前七面山主小松海淨師も深く好意を寄せられ、僧院の泊りも、同師の武井坊に當てられて、厚き供應にあづかつた。

會する者、農林省囑託の中村幸雄氏、身延中學の中河教諭、主唱者の余等計八名。各々熱心な多大の興趣をもつてこれに臨む。以下其の時の紀行と、鳥類の分類、並びにその鳴聲を掲記して、大方の御参考に供しようと思ふ。

富身鐵道身延驛から、自動車は暮れ行くうす暗い道を走つて、身延町の車庫に着くと、宿坊よりは二人の小僧さんが、提燈をさけて丁重に出迎へて呉れた。新聞社の通信員や中河、鈴木兩教諭の顔も見えらる。一同打ち揃つて東谷の坂路を辿り、休茶屋や賣店の傍らを過ぎて、約五、六町も行くと、鬱蒼とした杉と潤葉樹の茂る高地に建つ今宮の宿舎、武井坊に着く。

小松院主や、松木師に心から迎へられて、新築された立派な座敷に通された一行は、山の小鳥に親しむ可く山小屋の泊りまで覺悟してゐた丈に、少々恐縮であつたが、内心確かに嬉しかつた。

清い山の水を湧かした結構な風呂に汗拭ふて、浴衣がけにくつろげば、窓外の杉の木立のほとりで

頻りにあをばづくが鳴いてゐる。

あをばづく (佛法僧目、梟鴞科)

ホウホウ ホウホウ ホウホウ

中形の木兎で、色彩は黒味勝ち、各地に最も多く樹々が青葉に賑ふ頃、森林によく普通にその鳴聲を聞く。

ふくろふ (同上)

テレスクホウホウ テレスクホウホウ

夕食も済んで、偕て杜鵑の高聲もがな、と思つてゐる時、曇つた空は月を隠して暗く、そして、よたかの鳴き渡るのが聴えた。

よたか (佛法僧目、蚊母鳥科)

キヨ キヨ キヨ キヨ

竹を割るやうな鋭く響く聲で鳴く。

附近は人家が割合に多いので、あの骨に喰ひ入るやうな淋しい鳩(虎鶉)の聲や、むささび、ももんが等の獸類の啼聲を望む事は無理だつたから、少しく山の方へ出歩く考へも抱いては來たが、もう時刻が遅かつたので取り止め、それでも雑談に花を咲か

ある。午前四時、そこそこに顔を洗つて、朝食を待つ。窓外は南へ、樹立の繁る東谷のギヤツプが低く瞰下された。雲霧が薄く纏ふてゐる。殷々と低く明けの鐘が鳴る。太鼓の音も本山から響いてくる。あをばづくがまだ鳴いてゐる。四時十分、お、三光鳥の聲だ。

さんこうちやう (燕雀目、ひたき科)

四十七里 ホイ ホイ ホイ

庭先きの樺の樹にゐるらしい。夏鳥で鴨位の大きさ、羽色は紺赤紫色を彩り、雄は特に細長い尾を持つた美しい鳥だ。ホイホイホイが星月日とも聴えるので、三光鳥の名が出てゐる。

遠く鴉の鳴聲が聞える。中村氏は、あれは子鴉だと云ふ。大瑠璃、黄ひたき、鴨、赤しようびん、縮眼兒、山椒喰、小けら、鶯などが一度に鳴き出して、あたりは恰も小鳥の交響樂の音樂堂と化してしまつた。

おほるり (燕雀目、ひたき科)

チュリー チュリー ペエ ペエ

鴨位の大きさ、雄の背は瑠璃色で胸は黒、腹は白

せ乍ら、耳を屋外へも敬てゝゐたので、思はずも時を過ごして、就床したのは午前一時。此の時突然誰れか、佛法僧が鳴いてゐると云ふ。

それツ、と一同は跳ね起きて、窓からちつと屋外に耳を澄ませる。成る程遠くその聲が聴えてくる。

ぶつぽうそう (佛法僧目、佛法僧科)

ブツポウ ソウ ブツポウ ソウ

ブツポウをやゝ強く、間を置いてソウと弱く鳴くので、單にブツポウ或はブツパンと云ふやうにも聴える。燕より遅れて南洋から渡來し、英彦山、高野山、比叡山、風來寺山、木曾山林、日光、身延、其他の各地に分布して蕃殖し、八、九月頃には去つてしまふ。大きさは九官鳥位羽色は緑青色で太い嘴と脚は赤く美しい。三寶鳥とも稱ばれ、古來靈鳥として有名である。これで今宵のプログラムは大體都合よく終了したので、明朝を期待して佛證の傘下に、心の貧しき者も安らかな眠りに就く事が出來た。

間も無く中村君に揺り起されて眼を覺ませば、もう室外は薄明るく、但し曇つてゐるので甚だ陰鬱で

くて美しい。雌は茶褐色で雄と全くその色彩を異にし、山中の神殿の梁や樹梢に水蘚などを以つて巢を作る。鳴聲も極めて麗はしい。

きびたき (同上)

ヒイ ヒイ キュインジ キュインジ

黄色を帯びた極めて美しい小鳥で、籠鳥としても愛玩され、駒鳥、大瑠璃、深山頬白と合せて和品四鳥と稱ばれてゐる。

ひよどり (燕雀目、鴨科)

ビー ビー ビイビイ ビイーツ

雀よりずつと大きく、灰色めいた空色で、冬季はよく竹籜などに群れて喧しく鳴く。

あかせうびん (佛法僧目、翡翠科)

キヨロ、ウ キヨロ、ウ

或はミットロ、ウ、鋭く能く徹る聲で、毎年梅雨期の頃に鳴く。雀よりずつと大きく、羽色は紫を帯びた赤褐色で、大きな嘴と脚は赤色を呈し、山間溪流附近に棲息して、蝸牛其他を餌とする。みやませうびん、又は蕃淑鳥、水乞鳥などの稱がある。

めじろ (燕雀目、縮眼兒科)

ビイ ビイ ビー キヨロ キヨロ
雀よりも小形で眼のふちが白く、羽色は草綠色をした美しい小鳥だ。籠雀としてよく識られてゐる。

さんせうくひ (燕雀目、山椒喰科)

ビリ ビリ ビリ ビリ
ヒリヒリン ヒリヒリン

形は鴉に似て細長く、尾も長い。頭は黒と白、背は灰鼠色を帯びてゐる。冬季は沖繩以南の暖地へ渡つて冬越しする。

こげら (佛法僧目、啄木鳥科)

ギイ ギイ ギイ

雀位の大きさ、羽色は黒白の縞をなすので縞けらの名もある。啄木鳥科の最も小形の鳥で、四十雀、日雀などの群と共に見る事が少くない。

うぐひす (燕雀目、鶯科)

ホ、ホ、ホ、ホケキヨ ケキヨ ケキヨ ケキヨ
ケケケケ
餘りに有名だ。籠鳥としても第一位を占めてゐる

キリ キリ キリ キン キン

雀に似て、但し羽色は灰褐色に黄色を帯び、翼に黄色斑が有るので、飛翔の際の観察から蛇の目ひはの名がある。

黄ひたきのキユインジ、キユインジが聞える。

波木井公銅像の傍ら、即ち山門を入つて解脱橋を渡り、正に菩提梯の高い石段を昇らうとする左側に一本の杉が立つてゐる。この梢に本山で設置した巢箱(杉の木をくり抜いた物)があつて佛法僧が営巣してゐる。数日前鳥類の寫眞に巧みな下山兼二氏、啼き聲の觀察に妙を得てゐる高田氏等がフィルムにその生態を収めて歸られたと云ふ。そんな事で威かされたらしい彼は、一向に姿を見せなかつたが、此處と、深敬病院の裏の縦の大木と、大林坊前の二又杉には、確かに営巣してゐるらしかつた。

參道を横切つて、竹之坊の裏手を、西谷の方へ進む。垣根に止まつて頬白が鳴いてゐる。

ほほじろ (燕雀目、雀科)

一筆啓上仕候 (或は) 源平躑躅白躑躅

が、その美しい鳴聲に似合はず、形姿は褐鶯色の地味な小さい鳥だ。樹林や竹籜を好み、枯れた萱草で筒を横にしたやうな巢を作り、中に紅色の卵を五、六個生む。

晝夜の分界の中をホウホウとあを、は、づ、くの聲も雑ちる。山は一時に混然として、小鳥達の唄の聲で賑ふ。

朝食後、仕度もそこ〜に、五時、武井坊を出發する。直ぐ西に向つて、祖小學院の前から、大客殿の横を通り、甘露門から女坂を降つて波木井公銅像の前へ出た。

三光鳥の口笛を吹くやうな、ホイ、ホイ、ホイが聽える。

きせきれい (燕雀目、鶺鴒科)

チイ チイ チエチエン チエチエン
背は灰色で腹部は黄色を帯び、細長い尾を上下に動かして、人家に近く棲み、庭園の樹梢や石垣の間などに巢を營む。

こかわらひわ (燕雀目、雀科)

チヨツパイ チヤ チリリン チチ

チリリンは轉りの鈴鳴きで、聲の美しいのから評價して、金鈴、銀鈴、泥鈴の區別がある。雀によく似た原野に多い小鳥だ。

龍潜橋を渡ると、身延川の對岸に在る深敬病院の裏手のすつと高いところに、大きな縦の木が立つてゐて、其の樹幹に巢箱が一個取付けてあるのがよく見える。一昨年設けたものだが、今年には佛法僧が有難いとも何とも謂はずに借用してゐると云ふ。

御草庵の舊跡、宗祖の廟所に參拜して、七面山への道を辿り、身延發電所の傍らから橋を渡つて妙石坊に到る。

此のほとりは、西谷の田代と稱し、文永十一年五月、日蓮上人が領主波木井實長の後援に依つて草庵を營み、宗派の總本地を創めた所である。庭前に高座石が在る。

妙石坊の裏手から、松樹庵や千本杉を経て追分に到る本道と別れ、左に小道へ入り、橋を渡ると、橋の袂から河鳥が鳴いて溪流を奥に飛んで行つた。

かわがらす (燕雀目、河鳥科)

ジイツ ジイツ

鷓鴣に似た所のある全身黒褐色の鷓鴣位の大きさの鳥だ。山間の溪流を好み、水中に巧みに潜入して、河中の小蟲類を餌としてゐる。

六時十五分、此處からジクザツクの登り道となつた。

「静かに……」中村氏が注意する。樹蔭に蟬のやうな鳴聲がする。やぶさめだ。

やぶさめ (燕雀目、鷺科)

ギヂギヂギヂギヂギヂ

濃い茶褐色と緑の鷺よりも小さな小鳥で、少しく鷓鴣に似てゐるので、一名しほさどいとも云ふ。藪の中や地面に近く棲んでゐる。

ひがら (燕雀目、四十雀科)

ツツピン ツツピン ツツピン

四十雀より小形でその緑色を缺き、背は灰青色、頭は紺色で後頭部に冠状の長い羽毛がある。四十雀、小雀、柄長など、群れて旅行するのを見る。

ポウポウ ポウポウ

ポポポポポポ ポウポウ ポウポウ

杜鵑科の鳥はすべて夏鳥で、四月に渡來して十月には南方へ歸つてしまふ。山の高い樹上に止まつて鳴く。此の日は、筒鳥の聲を充分耳にすることが出来た。

かけす (燕雀目、鴉科)

ギヤア ギヤア ギヤア

ギヤウロ ニヤウロ

鳩よりは小形、嘴は大きくて黒く、頭は黒と白のかすり、背は赤褐色、翼は黒に藍色の縞があつて美しい。特に他の鳥や猫などの啼聲をも真似る習性がある。深山で営巢し、秋に里近く渡來群棲する。檀鳥又はがつち等の別稱がある。

路傍で簾雨の秋蟲の啼くやうな聲がする。この山には殊に多いやうだ。

せんだいむしくひ (燕雀目、鷺科)

チビツツ チビツツ チー

チチブ チチブ ジュイー

こがら (同上)

チ チ テ チ チョツキン チョツキン

日雀に似てゐるが、やう大きく、頭から頸は黒、背は灰色、本州にのみ棲み、数は日雀より尠い。

やまがら (同上)

ピン ピン チチ ピン ピン

人に馴れ易いので籠鳥として知られてゐる。

しじゅうがら (同上)

ツピン ツピン ツピン

四十 カラ カラ カラ カラ

舉姿は活潑で、山林から時に都會地の庭園の内にまで浸入して來る事がある。頭は黒、背は黄緑から灰青色、翼は黒に白を混じ、白い腹部には喉から黒い一條が通つてゐる。

空は益々陰慘に曇り、小雨の模様さへあつて、杉の美事な植林や、樺、梅の原生林に雲霧が頻りに揺曳してゐる。何處からともなく栗の花の香りがツイと鼻をかすめる。筒鳥が鳴く。

ついどり (杜鵑目、杜鵑科)

或はチヨットキテミーと云ふ風にも聞える。本州中部の春の山では、此の水鳥の聲を到る處で聽く。

愛嬌のある懐しい鳴聲だ。

くろつぐみ (燕雀目、鶉科)

キヨコ キヨコ キヨコ

キイーツ ペー ペー

鷓鴣の大きさ、羽色は黒、喉も黒く腹へかけて白に黒斑がある。水蘚などで樹上に営巢して淡青色に淡褐色の斑の有る卵を五、六個生む。その鳴き聲は恰も、清子、清子、と呼ぶ。……彼れには嘗つて身も心も捧け盡くした相愛の女があつた……などと云ふわけ柄かも知れない。

鳴禽類には、鳴聲に多くは地聲と轉りとがあつて其の音色と調子とは全く相違してゐる。平常は極めて地味な、或は喉がつぶれたやうな聲で鳴く鳥も、春の営巢期になると、驚くやうな美しい妙音をもつて轉るものだ。

例へば鷓鴣、頬白、四十雀、駒鳥、大瑠璃、小瑠璃などはその中でも著しい。そして其の鳴聲は聽く

人に依つて大分相違し、又地方に依つては、鳴聲に幾分は訛りと云つた風な少しの違ひも有るかも知れない。

大瑠璃などは音曲も複雑で物真似もうまく、時々、オキク、ニジュウシと鳴くやうにも聞える。

身延の靈山に、鶯は妙經を唱へ、佛法僧が三寶を説くかと思ふと、鳥界の保名——彼の黒鷯氏は、清子、清子、来い……と狂ひ叫び、三界の自然兒、吾が大瑠璃君は常に、お菊二十四……の成熟し切つた豊艶な彼女を讚美し續けて歇まない。

妙石坊より、約十町を登つて、洗足に着いたのが七時。民家が一軒在つて休む。其處には願滿稻荷を祀る堂が在つた。耕作された畑に、大麥が實のり、頬白が頻りに鳴いてゐる。

この高地から眺める、身延川の溪を隔てた鷹取山（一〇三六m）の山腹は、美事な深林が立ちこめる雲霧に明滅して、南畫の山水を見るやうに美しかつた。

右手の山で筒鳥が鳴く。雉鳩の聲も聞える。青げ

あをはと（鷓鴣目、鳩鴿科）

ウワオオ ウワオオ

頭と頸は黄緑、背と胸は赤味があり、下面は緑、腹は白く、本邦特産の華麗な鳩だ。

身延の山中に多い野生の南天は、此處まで登つてくればもう少くなり、右手に溪を隔て、千本杉の藍黑色の木立を低く望む。

仰ぎ見る奥ノ院の山稜は、一面に雲が捲いて崇巖な景觀を呈する。

小瑠璃が鳴く。道に長さ三〇〇耗もあるみ、すや、同じ大いさの馬蛭を見る。

とるり（燕雀目、鶉科）

チツチ チツチ カラ カラ カラ カラ

チヨ チヨ チヨ チヨ チヨ

小形で雄の頭は空色、背は暗青色、腹部は純白、雌は橄欖褐色をなし、駒鳥によく似た鳴聲を出すので、往々それと誤認され易い。南方へ渡つて冬越しする。
八時五十分、追分、感井坊へ出た。七面山への本

道も此處へ登つてゐる。

左に行けば、十萬部寺や宗説坊を経て本建村の赤澤の宿から七面山（一九八二m）へ通じ、右に執れば、身延山頂（一一四八m）の奥ノ院へ辿る道である。

右を執る。追分から奥ノ院までは山稜傳ひに十八町と云ふ。何時かあたりは小雨が煙るやうに降つてゐた。

この時突如杜鵑の聲が聞える。思はず歡聲が一行の中にあがつた。ほう、郭公も鳴く。左右の深い溪谷を瞰下する思親橋のほとりに來た時は、慈悲心鳥の聲も聞えてきた。

ほととぎす（杜鵑目、杜鵑科）

キヤツ キヤツ キヤツ キヤツ

鷓鴣位の大さ、背は暗灰青色で、腹は白に黒の横斑があり、翼は鷹の如く強大である。

キヤツ、キヤツといふむせるやうな鳴聲が、テツペンカケタカ、又はホンゾンカケタカなどといふ風に聞えるのだ。夏鳥で四月頃南洋より渡來し、鶯の

らもゐるらしい。

きじはと（鷓鴣目、鳩鴿科）

デデエツポツポウ テデエツポツポウ

あをげら（佛法僧目、木啄鳥科）

キヨッ キヨッ キヨッ

頭は赤く、背は黄緑で、本州、四國、九州に特有の鳥だ。

洗足に約一時間程休み、又出懸ける。雨乞の瀧は左の溪澗に入るのであるが、割愛して追分に向ふ。

こさめひたき（燕雀目、ひかき科）

ダイーツ ダイーツ デツ デツ

形姿の優しい小鳥だ。淡褐色で、下面は灰白色。時には人家に近く、柿、梅、杏の老木に地衣類を綴つた椀形の巢を営む事がある。

あかげら（佛法僧目、啄木鳥科）

コッ コッ コッ コッ

黒、赤、白の色彩を有する本邦特有の種類で、やや大形のもを大赤げらと云ふ。枯木の穴に嘴を入れて、コロコロコロといふ音を響かせる事がある。

巢を見付けて、それに真似た大形の紅い卵を一個生み、卵は早く孵化して雛は本能的に鶯の卵或は雛を巢より排斥し、鶯の親に育てられて、成長すれば勝手に巢立ちしてしまふ。彼れは毛蟲の類を好んで喰べ、人家の近傍へも平氣で飛んでくる。

かつこう (同上)

古來文人墨客の間に著名であるが、血を吐くと謂はれてゐる程よく徹る鋭い鳴聲は、彼れが激しい愛慾の世界にあつて、根限り痴態を發露してゐるのだからあきれてしまふ。この鳥に關する文献は可成りに多い。

クワツコウ クワツカウ

何時も自分の名を呼び續ける彼氏。一見はいた、かか鳩の如くで、而も甚だ杜鵑に似てゐるが、杜鵑よりは遙かに大きく、又鳴聲も全く違つてゐる。郭公は、鶇、頬白、よしきりの巢に、同じ仲間の筒鳥は鶇、縮眼兒、仙臺蟲喰、慈悲心鳥は大瑠璃などの巢に素ばしこく一個の卵を生み落してその親に孵化させ且つ育てさせる事は杜鵑と同じである。そ

して面白い事に、形は稍々大きい、時にそれ／＼其の巢の卵に似た色彩の卵を生み付ける事である。例へば同じ郭公が、頬白の巢へは底の方に毛を丸めたやうな褐色の縞のある白い卵を、そして鶇の巢へは淡褐色の多くの斑點の有る卵を生む事がある。そして自らは決して營巢せず、又卵も暖めて孵化させることをしない。

じひしんてう (同上)

ジヒシン ジヒシン ジヒシン
ジウイチ ジウイチ

鴨位の大さで全羽毛は黒い程の藍青だ。名はその鳴聲から出たが、ジウイチとも聞えるので十一鳥の別稱がある。ジヒシンジヒシンと、始めは遅く終りは突詰めたやうに激しく鳴く。彼は窺かに大瑠璃などの巢に卵を生み込み、その雛はいち早く孵化して大瑠璃の卵や雛を蹴落して、此の不具戴天の親鳥に平氣で育てさせる。文字の上からは正に無慈悲心鳥である。又も杜鵑が鳴く。

キヤツ キヤツ キヤツ キヤツ
左手に本建村夏秋の小里落が見えて、山腹の畑の麥はもう黄ばんでゐる。山は見る限り青葉、目の覺めるやうな緑青で掩はれてゐる。遠方は霧に包まれて、七面山も早川對岸の山も濛々とした乳色の彼方に隠れ、その中から、群青の山々が時々隠顯する。若い檜林の山路はおぼろに霞んで、何とも謂はれぬ靜かな、なごやかな風情である。此の濃い乳色の霧の中から、梢を震るはせるやうな勇ましい小鳥の聲が聞えて來た。

こまどり (燕雀目、鶇科)

ピヤラ、、、、、
チ カラカラカラカラカラ (地聲)
ヒンギ ヒンギ ヒンギ

サイ サイ サイ サイ
ヒイ チヨウ チヨウ チヨウ (轉聲)

駒の嘶くやうに高い謂子で鳴くのでその名があり古來銘鳥として愛玩されてゐるので餘りによく識られ過ぎてゐる。但し彼れは何處迄も山の鳥であり、

幽溪を好む優秀な山のテナーである。

えなが (燕雀目、四十雀科)

よく日雀など群れて旅行する。形姿は背黒鶴鴝に似た所があるがずつと小形で可愛い小鳥だ。營巢は地衣類を蜘蛛の糸で綴つた美事な球状のもので、横に小さな穴があつて中に白い豌豆位の卵を十二、三個も生む。

大きな梅の樹で眼細が鳴く。

めぼそ (燕雀目、鶇科)

デンヂリ デンヂリ デンヂリ
鳴聲に依つてゼニ鳥の別名がある。鶇に似てゐるが尾は短く、背面はオリブ色で、黄味がかつてゐる。亞高山帯の針葉樹の中などで、秋でも小淋しくこの鳥の鳴くのを聞く。

日郎上人の腰掛石と云ふのを過ぎると、路上に黒鶇の雛が落ちてゐた。どうした事かと四邊の檜の若木を上げば、果して水蘚で作られた其の巢を發見した。雛は他にも二羽を拾ひ上げたが、可哀さうに死

んでゐる。何か外敵に襲はれたのであらう。

小瑠璃が駒鳥のやうに鳴く。

チイ カラ カラ カラ カラ

四十雀が剽軽な調子で囀る。

ツツピヤア ツツピヤア

九時半、奥ノ院に着く。二王門をくゞり、思親閣の本堂に参拜する。境内に、鶴鶴の囀りが美しく響く。

みそとざい (燕雀目、鷓鴣科)

チビツチ チビツチ チユルチルチユン

チユン ビイチヤクチイチイ

チユン チユン

本邦内地の小鳥としては菊戴と共に最小の種類であらう。焦茶色で尾は短かく、多くは陰濕な溪流を好み敏捷に活動する。平常はたゞ、チャツ、チャツと地味に鳴くばかりであるが、春から夏へかけては美しい聲で高く囀る。

黒鷓の聲も、雲霧にぼかされた蒼蔚たる杉の大木の間から響き互る。

キヨコ キヨコ キヨコ キイーツ

四十雀も鳴く。

ツツピヤア ツツピヤア

別當所に休み、まだ早い、茶を貰つて晝食を済ます。

十時十分、奥ノ院を辭去して廣い本道を降る。總本山祖師堂の前庭まで五十町と云ふ。

高祖六百五十年遠忌の春の會式も過ぎた今は、参詣の信徒の姿も無く、山内は極め静寂である。それに杉の古木の立ち並ぶ参道は、霧の海に浸されて限りない神韻の氣分をこめてゐる。

富士を遠く望む眺めの佳い高い斷崖の縁を通り、東照宮のまわりに降つて行けば、右手の杉の巨木に穴があつて、蜜蜂が群れ通つてゐる。更らに下手の二本の杉には、數ヶ所に穴があつて、もゝんが(哺乳類、齧齒目、栗鼠科、本州もゝんが)が棲息してゐるといふ。月の明るい夜は、間々山坊の近くの樹立で、

キチ キチ キチ キチ

と鳴く事がある。静かな夏の眞晝には、その穴から可愛い顔を出してゐるのを見る事もあるそうだ。

東照宮から法明坊跡の水屋を過ぎ、富士見岩を経て三光堂へと降る。

左方は富士川の蛇行網流する流域を瞰下し、對岸の板代山の峭壁と相對して、その右肩に當つて富士山を望見する。大きな杉並木の梢で大瑠璃が鳴く。枝にあの愛らしい瑠璃色の雄が止まつてゐると、全く羽色の異つた茶褐色の雌が其處へ飛んで来て二羽は仲よくたわむれる。向ひの梢には美しい黄ひたきが休んでゐる。

きくいだき (燕雀目、菊戴科)

チチ チチ

形は最も小さく、頭に黄と橙と黒條があつて恰も菊花を戴いたやうで、背は橄欖色の極めて可憐な美しい小鳥だ。

いかる (燕雀目、雀科)

ケケ ケケ

キコキ キコキ キコキ

雀科の中では最も大形で、頭と尾は黒く、背は淡灰褐色、嘴は黄色で大きい。本邦の特産である。

きばしり (燕雀目、木走科)

ジイイイ ジイイイ

最も小形の鳥で、羽色は黄褐と焦茶に白の斑があり、嘴は細く、啄木鳥に似た習性があつて、樹皮に寄生する小虫をあさる。その数は甚だ尠い。

十一時、三光堂に着いた。双輪塔、大佛、大黒天堂、別當所大光坊などの建物がある。

更に降つて、丈六堂の前から道を右に執り、鬼子母神、八幡宮、上行堂などを経て、十一時半、遂に總本山祖師堂の庭前に降り着く。

丹塗りの結構壯麗な祖師堂、西に續いて御眞骨堂と其の拜殿、新築の大きな納牌堂、山主の居られる水鳴樓、大客殿、方丈などの伽藍が建ち並び、輪奐の美、妙法の大道場、正に清淨な寂光の都を偲ばせる。

雀は墓の上で平和に囀り、廣庭の四季咲櫻の梢には、巢離れた鶉の子が、鳴き乍ら親に餌をせがむで

る。

ちごもず (燕雀目、鴟科)

ジャツ ジャツ ギチ ギチ

鴟に似てゐるが小形で背は美しい灰青色から赤褐色に移り、黒の横斑があつて腹部は白い。鴟に比べると数は尠く、山間に棲む。

祖師堂に参拜し、それから中河教諭の案内で、もう一度佛法僧鳥に敬意を表する爲め、裏門を出て武井坊の下を過ぎ、身延町への坂を少しく降ると、左手に大林坊と云ふ僧院が在る。茲の庭から直ぐ下の休茶屋の背後に立つ大きな二又杉の木を眺めると、太い幹の中途に、徑約四寸位の穴があいてゐる。それが即ち、彼氏のお宿である。

元來佛法僧は、蕃殖期となれば、南洋の暖地から遙々と群集して渡來するが、その棲息の適地へ分布してしまへば、他の鳥類も多くがそうである如く、一定のテリトリス(縄張り)が有つて、一ヶ所にのみ澤山は群棲してゐない。仲よく渡來した彼等が目的地に到着すると、戀の

競争が行はれて、結局同じ土地の山林には二、三番ひの營巢が始められる。交尾期には此の巢の近くで早曉からギヤア、ギヤアと喧しく騒ぐ。そして彼女は接近して來る彼氏の嘴を恰も接吻でもするかのやうに啄ばむ所などは中々モダンである。六月上旬、五、六個の白い卵を生む。育雛には雌雄交互に餌(昆虫類)を運び、他の歸らないうちは穴の中からあの赤い嘴を出して、ぼんやりと何時迄も待つてゐる。中河氏は「おばさん、此の頃もよく鳴きますか。」などと茶屋の主婦に呼びかける。「今日は何處かへ出かけてゐるですよ」などと、主婦は恰も彼等のお宿を賭つてでもゐるかやうな事を云ふ。折から何處からかゲエ ゲエ ザエビ ゲエと云ふ鳴き聲が聞えてきた。「それ、三寶鳥の御歸りだ」と云ふので四邊を物色する。あわて、双眼鏡を眼に當てて見廻す人もある。その時小さくギヤアツ

と呼んで、今迄まで窺かに巢の中に潜んでゐた彼女が穴から半身を出した。うわつと、一同から歡聲があがる。

彼女と彼氏は連れ立つて、彼方の杉木立の方へ飛んで行つた。

其處で一行は武井坊へ引きあけて休息し、今まで觀察した鳥類を整理する。

燕雀目

一五科

二九種

其他

七科

一四種

此のほかに、今日の行程で一行が確實に觀察し得たものは

鷲鷹目

鷲鷹科

とび、はやぶさ、つみ

鶴型目

鷲科

ごゐさぎ、みぞごゐ

鶉鷄目

雉科

きじ、やまどり、うづら

佛法僧目

雨燕科

あまつばめ、はりをあまつばめ

燕雀目

鶉科

とらつぐみ、のびたき、いわひばり

雀科

すゞめ、いすか、うそ、おほじゆり

ん

連雀科

ひれんじやく、きれんじやく

燕科

つばめ、いわつばめ

鶉鷄科

せぐろせきれい

雲雀科

ひばり

鶉科

もす

鷲科

おほよしきり、こよしきり

五十雀科

ごじゆうから

鶉科

はしほとがらす、はしほそがらす、をなが

以上、一四科——三〇種である。

右に依つて、春季身延山に棲息渡來する鳥類を擧げて見るならば、總計、三〇科、七三種を計上する事が出来る。

但し、夜から翌日の僅かに半日を費しての調査であるから、元より粗漏と杜撰はまぬがれない。例へ

ば、秋季に渡來する鳥類の、その内の多くが當然この地に於て觀察されるであらうが、春夏の候故に不可能とするもの、約三〇種。

次に、海も湖沼も無い山地故、迷鳥としての外は、海鳥、水禽類、涉禽類の殆んどすべてを缺かねばならないので、種類の多寡といふ點に於ては、富士山麓の一七〇種や、日光の一四〇種（黒田博士）に到底及ばないであらう事も止むを得ない。

然し乍ら、なほ七面山にかけて調査を密かに進めたならば、必ず發見されるであらうと推測するものも約二五種位は存する故、之に秋季の鳥類を加へたならば、鳥類棲息地としての靈峰身延山は、他の山地に比較して優るとも引けを取るやうな筈はないと信ずるのである。

かくして一行は、身延山に小鳥を聴く會が意外な收穫と、和氣霽々裡に圓滿に終りを告げた事を喜び、本山方の厚意とその勞を謝して、午後二時、目出度く茲に解散し、各々無盡の家苞を抱いて楽しく歸路に急ぐのであつた。

索引

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------------|------------|-----------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|
| 山嶽 | 間ノ岳……………一五 | 農鳥岳……………四 | 白剝山……………三 | 三伏嶺……………三 | 兎岳……………三 | 赤石岳……………三 | 聖岳……………三 | 駒岳……………二七 | 淺夜峰……………二二 | 高嶺……………二五 | 地藏岳……………二五 | 鳳凰山……………二六 | | |
| 登山口 | 鹽見岳……………一九 | 仙丈岳……………三〇 | 鋸岳……………三〇 | 鎌崩岳……………三六 | 丸盆岳……………三六 | 奧黑法師……………三六 | 大日峠……………三六 | 西澤峠……………三六 | 千枚岳……………三六 | 東岳……………三六 | 轉付峠……………三六 | | | |
| | 静岡市……………一 | 上落合……………八 | 井川……………九 | 田代……………二〇 | 樺島……………三 | 二軒小屋……………三 | 鹿鹽……………六 | 大河原……………六 | 大島……………六 | 台ヶ原……………一〇 | 菲崎町……………一〇 | 柳澤……………一五 | 圓井……………一四 | 甲府市……………一六 |

索引

芦倉 一四〇
 奈良田 一三六
 湯島 一八三
 新倉 一八四
 伊那町 一八九
 高遠町 一八〇
 市之瀬 一八〇
 戸台 三〇〇
 黒河内 三二一
 満島 三二九

山の自然界

温泉鑛泉

和田 三三
 戸中 三三
 東側 三三
 大間 三三
 島田町 三六
 金谷町 三七
 千頭 三三
 身延町 三五
 鹿鹽ノ湯 六
 大釜鑛泉 二六
 駒岳鑛泉 二六
 青木鑛泉 一九
 御座石鑛泉 一四〇
 桃ノ木鑛泉 一五
 西山温泉 一七一
 小瀬戸ノ湯 一九三
 戸中ノ湯 三三
 湯山温泉 三三

哺乳類

いのしし 七
 縞栗鼠 三
 ももんが 三

鳥類


柄長 三
 菊戴 三
 こげら 三

| | | | | | |
|-------|-----|-------|-----|--------|-----|
| 雷鳥 | 三〇 | 赤しよびん | 二七 | 雉鳩 | 二九三 |
| こまどり | 三〇 | めじろ | 二八 | あをげら | 二九三 |
| 雨燕 | 六〇 | 山椒喰 | 二八 | こさめひたき | 二九三 |
| やませみ | 六〇 | こげら | 二八 | 青鳩 | 二九三 |
| 佛法僧 | 九 | うぐひす | 二八 | こるり | 二九三 |
| みそさとい | 一〇四 | 黄鶴鴿 | 二八 | ほととぎす | 二九三 |
| めぼそ | 一三 | 小河原ひわ | 二八 | かつこう | 二九四 |
| 河鳥 | 一三 | 頬白 | 二九 | じひしんてう | 二九四 |
| 犬鷺 | 一七 | 河鳥 | 二九〇 | こまどり | 二九五 |
| 岳鳥 | 二〇一 | やぶさめ | 二九〇 | えなが | 二九五 |
| あをばづく | 二六六 | ひがら | 二九〇 | めぼそ | 二九五 |
| ふくろう | 二六六 | こがら | 二九〇 | みそさとい | 二九六 |
| よたか | 二六六 | やまがら | 二九〇 | きくいたゞき | 二九七 |
| 佛法僧 | 二六六 | 四十雀 | 二九〇 | いかる | 二九七 |
| 三光鳥 | 二六七 | つゝどり | 二九〇 | きばしり | 二九七 |
| 大瑠璃 | 二六七 | かけす | 二九 | ちごもず | 二九八 |
| きびたき | 二六七 | 仙臺虫喰 | 二九 | | |
| ひよどり | 二六七 | 黒鶉 | 二九 | 爬虫類 | |

索引

| | | | | | | |
|---------|-----|-----|-----------|----|------------|----|
| しまへび | 六 | 甲穀類 | さわがに | 六 | タカネツメグサ | 二〇 |
| 箱根山椒魚 | 一六 | 植物 | アラカワワウギ | 七 | ニヨホウチドリ | 二〇 |
| 河鹿 | 一六 | | タカネイチゴツナギ | 七 | カイヒゴダイ | 二二 |
| 魚類 | | | タカネソモソロ | 七 | ハクロバイ | 二二 |
| やまめ | 一五 | | イワタケ | 八 | サウシカンバ | 二二 |
| 昆虫類 | | | ヤマブドウ | 八 | クロバナヘウタンボク | 二二 |
| まるはなばち | 二七 | | 白花石楠 | 九 | アオバヘウタンボク | 二〇 |
| おほやまとんぼ | 二六 | | 黄花石楠 | 九 | ハヒマツ | 二八 |
| みやまあかね | 二六 | | コゴメヘウタンボク | 九 | | |
| 小柴 | 三〇 | | クロユリ | 一〇 | | |
| たまむし | 一〇四 | | ピランジ | 一〇 | | |
| 蜘蛛形類 | | | オホピランジ | 一〇 | | |
| じよろうくも | 三 | | ヒメシヤジン | 一〇 | | |
| | | | ホウオウシヤジン | 一〇 | | |

版 権 所 有



昭和八年六月十七日印刷
昭和八年六月二十日發行

著者 平賀文男
發行所 昭文堂印刷所
印刷所 昭文堂印刷所

東京市神田區宮本町七
東京市小石川區柳町二六

發行所 隆章閣
振替口座 東京六七一七六

赤石溪谷 奥附
定價壹圓貳拾錢

今井徹郎著 一好評三版 一 定價壹圓五拾錢
送料書留十五錢

山は生きる

四六判四一〇頁 上製函入 寫眞七葉入

ヒマラヤ、ロツキ、ピレネー、アルペンに日本アルプスは——日本の山々は比較にならぬ程小さいかも知れない。そして山の風貌や性質も亦自ら違ふであらう。併し乍ら山の有つ心、その聲、性格、力、美、恐ろしさは一つである筈だ。それらを、科學的記録と貴き體驗と得難き文献及び資料とに依つて、本書ほど強く我々に語つてくれるものはないであらう。斯くて山は本當に我々に生き、我々は山に生きることを知る。山岳書多しと雖も珍らしき文献であり、本當の意味の日本最初の山岳文學であり、深き感激と興味との裡に貫き示教を含んでゐる。

目 概 要 主

▲中村徳助の靈書 ▲山に入る（山の持つ危険と南アルプスの小屋、銅ノ小屋峠の魅力、登山日數と食糧問題、山男、合流點の深夜 珍しい焼畑と彼等の生活、奈良田と奈良田王、嵐、雨……） ▲山想篇（山をみる心の態度、山の湯、峠の霧、溪流、山頂、山雨 野呂川溪谷、大菩薩峠……） ▲山の物語（悲戀想「琴次の涯」由来記、地藏岳子安靈驗記、甲武信岳悲壯曲荒書 ▲山小屋に関する諸問題 ▲その後の水石春吉を語る ▲石倉初男君遺囑末記。

●平賀文男 著

四六判 美裝 上製 一定價壹圓貳拾錢
寫眞二十面 地圖附 送料書留拾五錢

八ヶ岳火山群

一百二十日の山と
高原温泉旅費

最新刊

八ヶ岳火山群は、言ふ迄もなく、山容、標高、スケール、いづれの點より見ても、まさに日本アルプスの亞に位し、八ヶ岳本峰より、蓼科山、霧ヶ峰、美ヶ原、武石峰を経て川中島に接する冠省山に到るまで約百料米突に及び、幾多の嶺峯を擁し、登路や交通は整備し、寂然たる原始林、懐然たる山湖と牧歌流るゝ茫漠たる裾野の高原等を有し、又多くの温泉、噴泉を擁し、恵まれたる本邦第一流の山岳である。然るに今日まで其の纏つた専門とする案内書の世に求められなかつた事は寧ろ不思議な位である。本書は此の遺憾を除くべく、蓼科山麓に住む山岳界の耆宿平賀氏が、十數年間實地踏査研究の上執筆されたもので内容は、八ヶ岳火山群に於ける山麓を數項に分ち、總論と各總説に、位置、山名、地形、構造、地質、動物、植物の一般を詳述し、各山岳に就いては、その總ての登山口と登路、交通、登降時間等の一切を記載し、更にその山麓に散在する三十餘の温泉、噴泉を紹介し、なほ未だ秘められたる奇異な山の傳説、考證二十八篇を挿入し、加へて登山用大地圖を附録とし、かくて八ヶ岳並びにその火山群に関する限り、最初にして又現在唯一の理想的研究兼案内書として生まれたものである。

長田 進著

菅林 佐藤百喜序
局長 麻生武治序

定價 壹圓
送料 六錢

隆章閣

實用スキー術

四六判二百頁

寫眞十二葉

カット十個入

最新アールベルグスキー術の最高指導書!

麻生武治氏曰く「スキーは行ふ者の心も亦技術も出来るだけシンプルフアイすることだ。そのスタイルの美醜問題にあらず、要はその實用化にある。斯くてこの書が『實用スキー術』なる所以である。幸ひ長田君の著は僕のスキー・イデオロギーと基調を同じうし、且つ僕が最も稱揚したいのは、君自身が立派なテクニクを體得したトウレンロイフェルである事だ。實力のない者が言つたり書いたりしたものに何程の權威があるか。この點長田君及びその著書に折紙をつける故である。教へる人、教はる人の心境にまで觸れて注意を集注してゐるのもうれしいし、卷末に英、獨、佛、諸と四ヶ國ものスキー用語を集めてあるのも機宜の企てと思ふ。本書に依つてコーチを受ける人もコーチをする人も、スキーをよりブラクテイッシュなものにされることを望んで已まぬ。』

藤木九三著

四六倍大判美裝函入 高級アート二度刷
精巧寫眞版九十個 凸版解圖三十五個入

定價 貳圓八拾錢
送料 十八錢

槍・穂高・山岩登り

好評忽ち
再版

全日本アルピニスト待望の名著!

日本アルプスの心臓とも呼ばれる槍・穂高の山域が表明する豪岩雄偉な山岳景觀を、能ふ限り精細に、印象的に寫眞と記事とのコンビネーションに依つて紹介しつゝ、最もスポーツ的な魅力をもつ新興登山技術を、用意、材料、態度凡てを併せて、「動く岩登り」と云つた見地から、多年の實踐と研究とに依つて、初心者を中心として説いたところ、最も信頼し得る無二の指導であり、一寸諸外國にも未だ類のない名著である。

目次内容

近代登山の特質、岩登りの眞價、其の發達、技術の變遷、服裝と用意、綱の結方と使用法、紐と人數、同編成、練習法、確保法、槍・穂の岩場、一枚岩、連續、隔時登攀、ホールドの扱方、リータ、グリセーディング、トラヴス、アレート、クラツク、チムニー、ガリー等登攀技術、下降法、補助綱使用法、懸垂法、北穂のチムニー等々……

冠 松次郎著 一四六三倍大判美裝上製函入 定價參圓七拾錢
寫真七十八葉、解説、地圖附 送料書留 二十八錢

日本アルプス大觀後立山

特價提供 七月中 貳圓五拾錢

日本アルプスの大寫眞集いよく出づ!

『山旅と寫眞、それは私には離すことの出来ない楯の両面である。山谷を見て寫眞をとる。寫眞を見て山谷を想ふ。寫眞によつて現はれる山岳溪谷の美はしきことよ。懐しきことよ。それは私の日常生活にどれだけ慰安と生彩とを與へることか……』と著者は言ふ。斯くてこの同じ心持ちの人々の爲めに本書は贈られるのだ。

本書は横一尺八寸、從四寸三分見開きの北アルプス連嶺諸巨峰の大展望、横一尺二寸五分、縱五寸二分見開きの深雪に輝く五龍岳の壯觀を始めとし、日本山岳美の極致たる黒部溪谷を中心として、著者が多年踏破探勝せる際に撮影せるものより最も代表的なもののみを選び、細心の注意の下に編まれたる北アルプスの山岳美—雪・岩・溪の大寫眞集である。精巧無比の製版と相俟つて畫面が凡てを語るであらう。

各務良治 編著 特價貳圓

四六倍大判 美裝 上製函入 定價貳圓八拾錢(送料十八錢)

山岳大觀 雪・岩・氷河

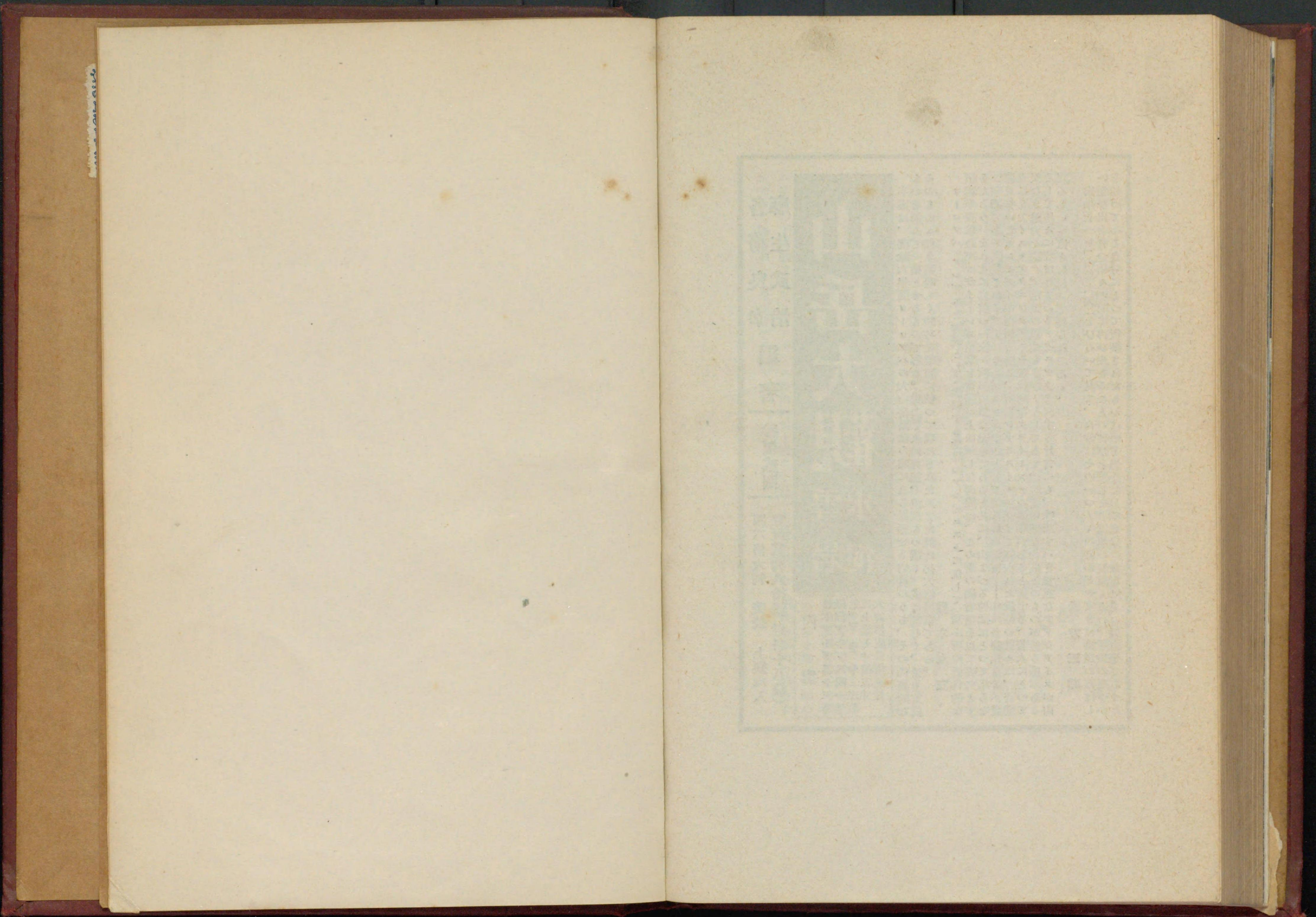
日本アルプス四十三葉
歐洲アルプス三十三葉
以上縱七寸横五寸
大寫眞各解説付

本書は、遊歐六年間ヨーロッパの大山岳踏破の際に自ら撮影せる寫眞のうち、その代表的なものを選んで一集とせるものである。雪・岩・氷河百態、或はもの凄く、或は美しく、恰も寫眞そのものゝ如き素晴しく精巧な製版に依つて現はされた生きた純山岳大寫眞集である。

ヨーロッパアルプスを舞臺として活躍する世界のアルピニストに伍して、謂ふ所の近代的な積雪季登攀乃至はガイドレス登攀を實踐の上で示した同胞は、この著の編者達を以て嚆矢とする。誘惑あり潮載である。更にモンブランを中心として撮られた畫面—殊に各務氏自身登攀したる路を拓いたモンデイの南面に始め、所謂シャモスイ・エグイで知られた鋭峯の数々は、岩登りに又アイス・テクニクにこそ近代のクライミングの精華があると思ふ。若人は、岩登り又なき魅力を聳く。解説の章文もきびしく、清新明瞭な山氣そのものが迫る感がある。そして所々に現はれてゐるテクニクに關する片言にも、味讀すべき貴重なアドヴァイスがある。男らしい卒直と純眞さで盛られてゐる。

出來上つた「山岳大觀」をひらいて見て、自分はその一つ一つの岩かどや頂きに特別な慕はし
い想ひ出を有つ山々の間に再び生きていることの喜びを感じた。寫眞の製版もよい。原畫の幾つか
を知つてゐる自分にとつて複製されたものは殆ど例外なしに自分の豫想以上の出來榮であつた

松方三郎



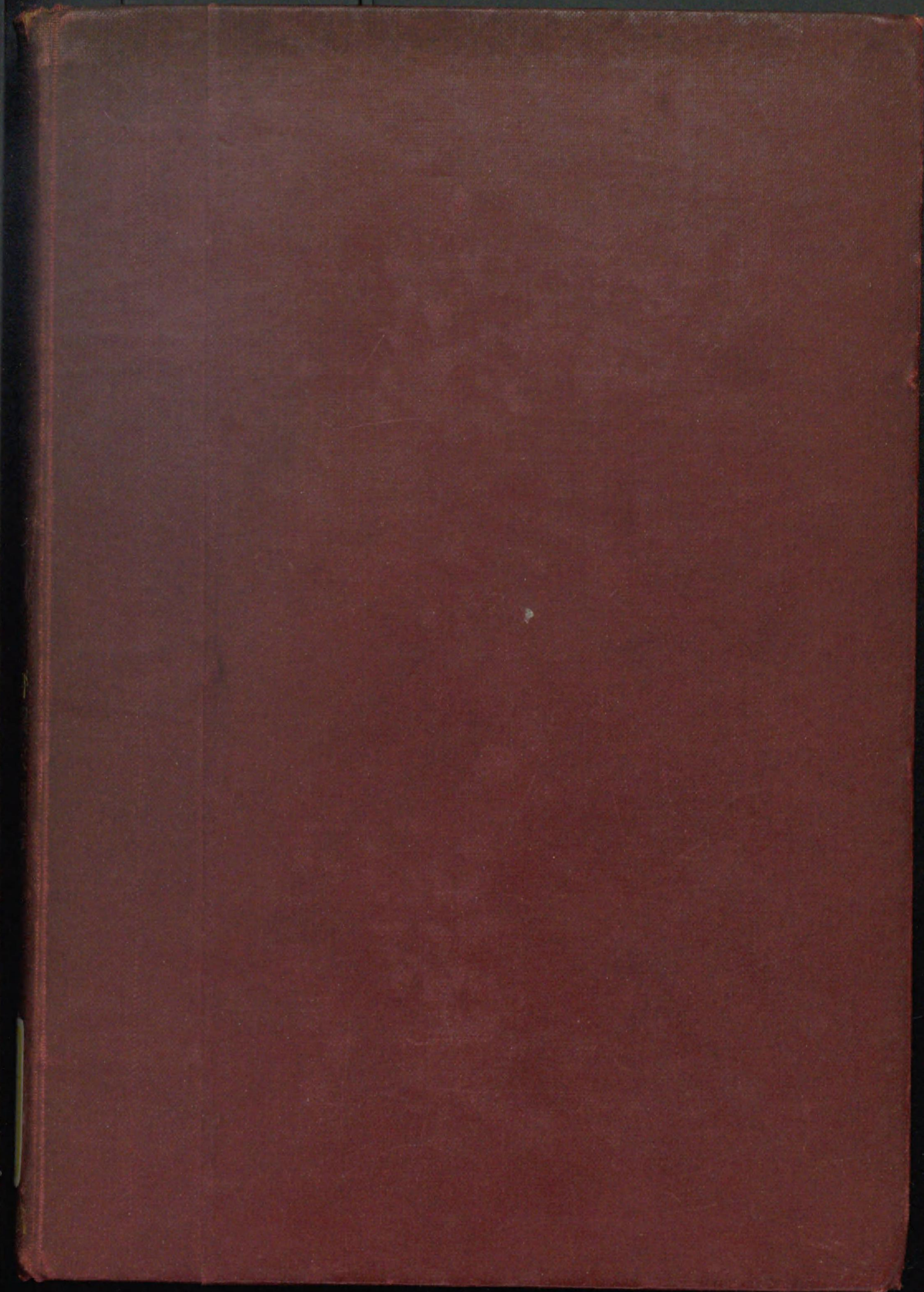
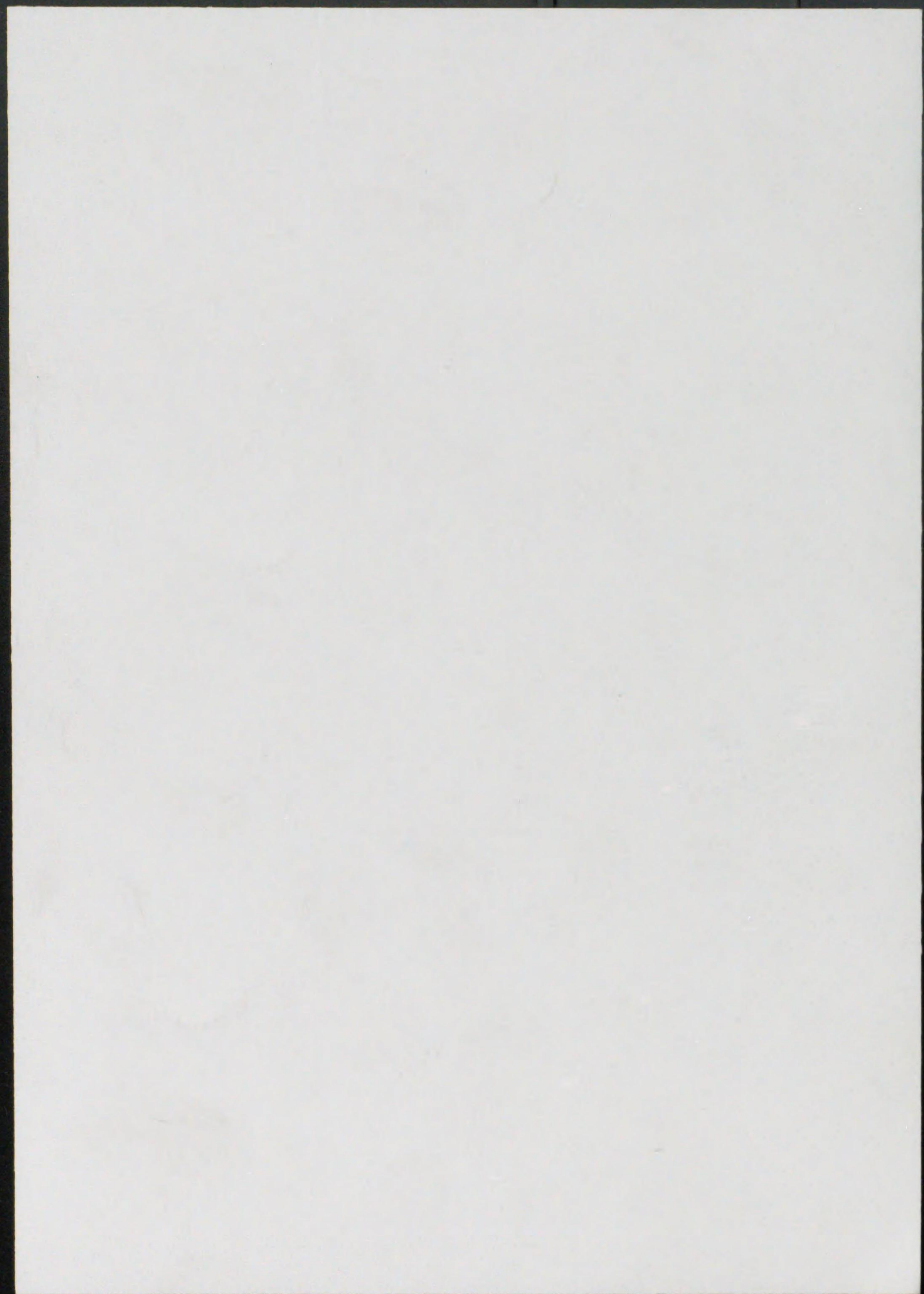
Small white label on the left edge of the left page, containing illegible text.

A large, faint rectangular border on the right page, containing very light, illegible text or a diagram.

639
114

1849

639
114

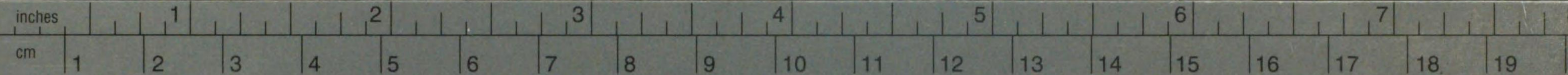


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

